

二松學舎大學日本漢文教育研究プログラム
「日本漢文資料による日本像構築の國際的研究」

和刻本邦人序跋集成

經部

二松學舎大學日本漢文教育研究プログラム

和刻本邦人序跋集成 前言

日本漢文學の實態研究を任務とする二松學舎大學二十一世紀COEプログラムにおいて、江戸期の漢學者の研究と、我が國における中國文獻受容の研究とは、欠くことのできない分野であろう。ただ、その資料として、和刻本漢籍に附された邦人による序跋が、これまであまり注目されなかつたことは、如何様に考えても不審にたえないのである。個々の和刻本漢籍に誰の序跋が附されているか、それを確認する作業そのものが、膨大なエネルギーを必要とするばかりでなく、文獻の價值認識における和刻本漢籍の評價の低さも、邦人序跋への注目度を低めていた可能性があろう。こうした現況にあつてCOEプログラムの採擇は、状況打破の一つの機會ではあつた。ケンブリッジ大學のコーニツキー教授との談話のなかで、くしくも教授が邦人序跋のことに言及されたのには、「我が意をえたり」の感があつたのである。

實際に蒐集活動を開始して明らかになつたのは、十分予測されたことではあるが、特定の所藏機關における和刻本漢籍悉皆調査が必要であり、そのこと自體が予測以上に困難であつたことである。つまり個々の和刻本漢籍のどこに邦人序跋があるか、あらかじめ知ることができず、また同一序跋においても出版の経緯のなかで變更があるやもしれず、とすれば個々の文獻の出版状況を同時にチェックする必要がある、そのために各版本の書誌調査も並行して行わざるを得ないこととなつた。中には四書・五經における同一系列の序跋が多出するものもあり、書誌調査は煩雜を極めたのである。しかも、この資料収集に實際にとりかかるといふ、諸般の事情からかなりの遅延を余儀なくされたこともあつて、望むべき完成度を達成しえないまま、今回『和刻本邦人序跋集成』を経部に限つて公表せざるをえなかつたことは、このうえなく残念ではある。

ただ、従來同種の調査や蒐集が管見のかぎりにおいて皆無であること、にもかかわらず個々の漢學者研究や漢籍

受容の研究にとって、これが一級の資料を提示するものであることの認識にたつて、本集成をその一つの嚆矢として理解していただければ、これに勝る幸いはあるまいと考えるのである。

今回調査対象とした機関は、二松學舎大學附屬圖書館・東京大學總合圖書館・國立公文書館内閣文庫・慶應義塾大學斯道文庫・個人藏本若干である。なお、東京大學總合圖書館・慶應義塾大學斯道文庫については、時間的限界により未調査部分を残している。

本集成作成の現場においては、高山と大學院所屬の小野澤路子が調査を分擔しておこない、序跋の複寫を業者に依頼して入力のうち、それを小野澤が校正し高山がさらに確認するという方法で作業を進めた。なお、末尾に附す人名索引は小野澤が担当した。慶應義塾大學斯道文庫の調査には、本文庫の鳥海奈都子氏の協力を得たことを記して謝意にかえたい。

凡例

一 本集成は和刻本漢籍（一部準漢籍を含む）・經部における邦人の序跋を集成したものである。勿論これで全ての經部書を網羅したわけではなく、經部はもちろん、今後さらに史・子・集部、準漢籍へも範圍を擴大して、調査を繼續することが必要である。

一 各書の分類は、易・書・詩・禮・春秋・孝經・群經總義・四書・小學の順に従い、各書の配列は、『和刻本漢籍分類目録』におおむね従うが、本目録にみえないもの等、臨機に對應した部分がある。

一 各書冒頭には、それぞれ書名・卷數・出版事項・序跋撰者名・序跋題を記し、その次に序跋本文を記す。

一 撰者名は極力本名を記す。

一 序跋は、原本での掲載順に並び、各書冒頭の序跋題もその順に従う。

一 冒頭の序跋題のうち、本文冒頭に標題の有るものは「」内に記し、無いものは括弧を附けずに序・跋等の内容を記す。ただし、版心によって標題を定めたものには「」内に（版心）の注記を附す。

一 同一書に複數の序跋がある場合は、一序ごとにページ變更せず、續けて記す。

一 ページ變更は、一書ごとに行う。ただし、一文のみ極めて短文の序跋をもつ文獻については、前後の状況に勘案して、一ページ中に二書分掲載することがある。

一 序跋個々については、白文・返點・訓點それぞれあって一様ではなく、ネット公開時における検索の便も考慮して、すべて白文にて入力することとした。ただし、原文が、句點・返點・送り假名・縱點・四聲點各付加、あるいは白文の場合については、それぞれ序跋末尾にそのことを注記してある。

一 表記については、異體字等は極力舊字に變換したが、完全ではない。また舊字・新字の如何にかかわらず、

變換不可能の文字については、■記號で表記してある。ただし、各序跋末に大漢和辭典所載の音と文字ナンバ―、あるいは索引ページ數、あるいは「無字」との注記を附す。行草體の序跋については、全く讀解不可能のものも含めて誤讀等あるうと思われる。讀解不可の文字については、□記號で表記してある。また序跋本文中、おおむね二十字以上の不可讀文字を含むものについては、冒頭標記題目下に（難讀）と記載し、本文を除外してある。いずれにせよこれらを資料として活用する場合は、現物との對校が望ましい。

一 各調査漢籍の所藏者については、個人藏書もあり、記入を省略することとした。現物閲覽の場合は、『和刻本漢籍分類目録』『内閣文庫漢籍分類目録』『東京大學總合圖書館漢籍目録』『二松學舎大學附屬圖書館漢籍目録』等によって、確認されたい。

一 末尾に人名索引を附す。

和刻本邦人序跋集成 經部

高山 節也
小野澤路子 共編

易類

周易正文二卷 寬政四年刊天保七年江戸和泉屋金右衛門等印本

吉野永親「周易正文序」

周易正文序

四子六經之於國讀可謂迂且煩也而世儒不辨以爲儀則者何也蓋傳習之久耳目熟焉心意定焉滔滔天下皆是安知其非以今觀之迂煩之蔽文勢句法芒乎昧乎正誼以乖學士論經屬辭動失之國讀書亦大矣吾兼山先生憫焉乃式古訓削去迂煩以示學士於是乎舊讀之陋一洒而皜如鄉也先生命葛子福菽伋卿國讀易禮既奉業經先生閱梁壞之後未遑刊行從遊之徒相傳筆寫頃時慮其勞以附庸人夫讀法莫如簡簡則其膝於口也便其記於心也易然後論經則逐章水釋屬辭則隨筆竝出雖瑣瑣國讀其所關係不亦大乎是先生所以去煩就簡而二子所以繼而成業也先生誘人有物有則後之學者由以秉彝則正誼不失其涉羣經猶假舟楫絕江河寬政壬子季冬望吉野永親撰（句返送）

鄭氏周易九卷 寬政七年京都林伊兵衛刊本

伊藤長堅「弁言」 田中章「跋（版心）」

弁言

訓詁之學大有補聖經□謂非磊落之人後之註者或以明心見性之說解六經之文劫非修己治人之實學也鄭氏易註後人裒群籍所成今雖未覩全虎其一班足可窺焉宜公于世乎哉時明和壬辰復月平安伊藤長堅書于□子齋中寬政乙卯六月姪善韶書（白文）

余每慨異書之不易得矣蓋書非良緣奇遇不值非通邑大都不購適將購而囊橐或不滿乃聞有人能蓄必資緣覓之而慳祕痴惜之夫口難色□而彼安知其緘滕祕籍既爲郭瓊僊人所諳知也且古書鮮有全者其亡佚拂地者亡論殘簡斷編僅存其目者什八九嘗聞明沈汝納家有十六國春秋百二十卷則有古書不悉泯沒者竊憾鄭氏之易不復見于世余嚮倣王厚齋之舊業索搜李鼎祚易解所引及散在諸書者合之胡震亨集鄭註者補綴增定編爲一書藏諸篋笥以自珍猶是鳳之一羽備知其毛色耳爾來十有餘年矣邇者偶於洋舶所載盧見曾雅雨堂十種中始得覩斯書較於其所脩者出入不無相遠於其鄭易亦唯厘厯晨星已余觀□見曾氏之業彼亦有所憾焉與夫中夏右文之邦而古書難得若斯矧我東方乎余又曷敢憾焉斯書之成也在乾隆丙子歲實爲本朝寶曆六年與余輯錄之日年期頗相當邈矣絕海萬里之外雖俗殊嗜異哉曷雅尚□望之□□也可不謂未曾有也哉社友木世肅固知有餘業乃囑斯□於余搬壽諸梨棗余躍然謂曰易言互體見于左傳陳侯筮雖孔聖未嘗及之然其說古矣秦漢博士家之所習必有師資相承弗失古傳者魏晉尚名理故有易無互體之論互體固不足盡易然名理當盡易哉趙宋高頭巾妙談性命以說易故互體象數學者不屑是鄭氏易之所以永亡也夫易主卜筮參天釋人雜物撰德變化无方五體之說未可全誣則斯書之刻何不可以庶幾乎世肅氏嗜實書必與同志嗜苟有裨於古訓不敢專祕惜以廣傳聞而後止余之遇斯書

也奇斯書之遇世肅氏也亦奇所謂非良緣奇遇不值者若斯矣明和丁亥季冬之望近江田章子明甫識
(白文)

周易九卷 寶曆八年江戶前川六左衛門等刊本

井上通熙「新刻周易古註序」

新刻周易古註序

周易上下經魏王輔嗣註繫辭以下晉韓康伯註及輔嗣略例皆前代活字板也蓋吾邦古博士家所傳而足利學印行者歟余始得此本姑藏巾笥茲命梓人刻于家塾余惟輔嗣註獨冠古今趙宋以來程朱傳義盛行於世輔嗣註如弁髦況乃此本人莫之知也今而不傳恐無聞焉凡五經傳註箋解義疏既刊者不鮮矣此本異於是則稽古之學豈可舍諸因絀其由如此皇和寶曆戊寅冬十月東都井通熙謹撰（句）

蘇氏易解九卷 文政十二年息耕堂藏版活字印本

窪木俊「跋尾」

跋尾

嚮家君出此書命俊曰汝盍以所蓄活字刷印之以貽同志俊受之唯唯然資性懶惰加以世事不暇荏苒逗歲月者久矣至客歲十月始起功則家君亦屢在坐督之而以事廢亦數今茲己丑八月功將就緒家君適遭勵瘧之疾一病卒不起爾後追念往事不忍就功廢置有日既而以爲功虧一簣豈可廢遺命哉因讀禮之餘時又勉強從事經十數日而刷印完成嗚呼俊也以家君初命之日起功則及其在日庶乎可成也不然亦令天假家君日月之生則及見此書之成是亦不足助菽水之歡乎而今已矣俊之懶惰爲罪實重憾悔之念終無窮已聊記數言於卷末不知悲慟之從也文政十二年冬十月下總窪木俊克明謹識（白文）

周易二十四卷 寬永二年京都中嶋久兵衛刊本
如竹跋

周易程傳本義未有和點讀者往往苦之以故吾文之翁旁加和點以示門弟子也今也雖恐我家醜之顯外而欲幼學者之易曉故壽之木以廣其傳云寬永第四丁卯仲冬吉旦散人如竹書 (白文)

周易二十四卷 寬文四年野田庄右衛門刊本
松永昌易跋

右周易程傳本義之引証翼考者專以蔡虛齋蒙引季仲容句解爲要旨矣且又以元明諸儒之說爲談柄矣嗚呼由辭以得其意則在乎人焉春秋館教授昌易謹記 (白文)

周易十卷 寬文四年序刊延寶二年京都勝村治右衛門等修本

林恕「新刊周易本義序」

新刊周易本義序

夫易者成於四聖之手卦者伏羲之所畫每卦之辭者文王之所繫謂之彖六爻之辭者周公之所繫謂之象所謂上下經是也十翼者孔子之所贊謂之傳古者文王周公之經與孔子之傳各各竝行所謂古易是也漢儒費直附象象傳於經之下今易是也自是古易廢而王弼等諸儒皆據今易作註解程傳亦不改之東萊呂氏分別經傳復古本朱文公從之作本義人皆雖知朱義之精簡猶不能改流行之本唯胡雲峰通釋就古易演朱義之旨及大全之出竝載程傳朱義朱子之學雖宗程子然於易則其所見不同以是本義雖行於世與程易混雜而古易不明蔡虛齋專主本義雖作蒙引然不分經傳則亦是非朱子之本旨俗習如此故本義元本於中華殆絕況於本朝哉不亦傷乎及惺窩滕先生曾寫五經白文於易則隨古易之次第然其訓點竝存程朱之兩義而未歸於一也頃歲河州牧源正利潛心於易學特守朱義不顧他說使洛人以活字刻本義惠一本於余余講易東閣程傳陳說本義加訓點於活字本且記本義所援之來歷于鼈頭乃思活字本一出不能再刻猶未遍於世則有不快於心邇日有伊東祐上者自洛偶到東武乞鏤余點本於梓未遑再考則雖非無毫差謬千里之懼然本義元本永傳吾邦者不亦幸乎此本遍於世則朱義之旨明朱義之旨明則古易之學存古易之學存則四聖之道行矣是余所以不顧嘲也遂以家本授之寬文甲辰孟冬弘文學士

院林子敘 (返送縱)

易學啓蒙通釋二卷 享和二年昌平坂學問所刊弘化三年訂本

杉原直養跋

此書原係經解本重鐫然譌脫不訾天保甲辰夏日俾試員就影鈔元槧本及朱子文集語類等校訂且併鈔本所載胡氏自序熊禾跋文補刊杉原直養記（白文）

啓蒙意見五卷 元祿十年井上忠兵衛刊本

室田義方跋

嘗觀李退溪啓蒙傳疑知有此書頃剽刷氏某持一本來請加訓點披而閱之掇緝分析爲圖爲說以明之要勵精於易者也覽者并考李氏論及此書者以訂之不爲無益矣但舊印蕪穢紊錯已甚而漫滅難識者閒有焉今略爲脩整更附訓點以塞其需其他固有可矯正者今不敢據意以革舊在於讀者自考爾元祿丙子孟冬下弦日室田義方識（返送縱）

直音傍訓周易句解十卷 寬文十一年吉野屋惣兵衛刊本

小出立庭「題周易句解首」

題周易句解首

大傳曰乾以易知坤以簡能富哉言也良惟經緯乎六十四卦者乾坤之象也紀綱乎三百八十四爻者易簡之善也是知二言足以蔽一經焉請試論之天覆地載暑往寒來山峙川流飛潛動植生成於其間粲然昭明煥乎文章推雖謂之正經之易亦可也聖人立畫示其象係辭闡其微作翼發其蘊三古四聖垂裕後昆雖謂之註脚之易亦可也睠夫西伯姬公主卜筮而說大用東魯一聖宗理義而說本原營爲雖殊所以其開物成務者一也繼而河南履魯聖軌轍紫陽守文周繩墨機權雖不同所以其解大易者一也本末相濟體用交發蓋竝行不相悖者乎烏嚮天生萬物也形色雜還不遑縷舉焉聖人演易建教也著龜象數之變性命鬼神之情其論異塗有不可得比而同者焉聞之夫物之不齊者物之情也品彙之殊絕也如彼聖教之不一也復如此雖謂之流行之易亦可也而其實不出一陰陽而已聖人櫛易簡而天下之理得者不亦宜哉可贊之可嘆之喆矣廬陵朱子由述斯編也其爲言易而其義偏其爲文簡而其指遠上以默契乾坤之妙義下以輔翊後學之守約可謂善說易矣抑其中有吻合于程朱者有矛盾于程朱者此所謂不齊之物情也異不異全不全何必偏有是此而非彼哉善學者不局異同惟義是從採其可舍其不可茲乃聖賢大公之心也程朱復作點頭此言歟古人有言曰善易者不言易信然則解之者豈涉煩論也哉句解之爲作殆庶幾乎今也洛下書市清水氏貞盈將印梓貽諸不朽余僉其謀因訂亥豕之謬下訓點之手遂書以應其需寬文辛亥春三月丁丑永菴小出立庭恭書新蕉軒下 (白文)

周會魁校正易經大全二十四卷 江戶期刊本

林信勝跋

周易合部點之以伊川傳朱子本義分之以硃墨寫而滴露云爾羅山夕顏巷主 (白文)

易經直解十卷 元祿十年跋江戶須原屋茂兵衛刊本

宮城隆哲「跋(版心)」第二丁表闕

學易者欲研精文義則費力欲默而識之則心通也俗儒僉謂易止於卜筮之書而未知孔子說盡無窮之理義也迨程傳朱義出而理義卜筮相爲表裏諸家不爲他說所惑也獨張泰嶽直解以簡易治繁(第二丁表闕)未克通徹也劄劄氏曰若無訓點則無啓初學之矇而難得其大意矣於是務舌耕之餘力強爲之訓點亂其有功於易者乎劄劄氏欲梓行之而請訓點于余余想夫易該盡天下庶物之理也於文義亦所以且置之編尾云乎元祿丁丑歲夏五月中旬武江水竹居釣月散人宮城隆哲題 (白文)

遂初堂易論一卷 嘉永二年江戸山城屋佐兵衛等刊本

龜田長粹序 大久保奎「遂初堂易論跋」

易之教推天道以明人事使人避凶就吉焉其所以覺世牖民之法備矣自漢以來變爲京焦再變爲陳邵推及方外之徒皆援易爲說易於是乎終遠於民用至宋程伊川始還之於儒吳澄俞琰歸有光繼之而起遞抒推闡之力解外學異端之蔽其於斯學也洵爲有裨最後潘次耕著易論首辨易原圖書之妄次論掛揲乃謂過揲之數正數也掛扐之數餘數也九六七八實計過揲之數而參天兩地正確指著策之數也其論卦變也根據來知德卦綜之說乃謂上下經之卦皆以反對爲序綜兩卦爲一卦其言固得聖人設教之旨焉本邦先儒東涯先生卦變掛揲諸說暗合潘氏論此亦奇矣門人常陸大久保奎嗜學不懈尤覃思易經獲潘氏易論甚喜之捐貲刊布于世因推奎意而引之首云丁未夏四月綾瀨龜田粹撰半僊中根容書 (句)

遂初堂易論跋

往者屈來者伸大道消息盈虛之常也易取諸此推人事之吉凶悔吝進退存亡焉後儒昧於斯義或主象數或流玄虛或言易原圖書而作曲學支離無稽之說紛然襍出易於是乎益晦此不可不辨也潘次耕蓋有憤于此而奮障川迴瀾之力痛排擊後儒之謬妄焉其見解之卓辨哲之嚴眞僞是非彰然明白終歸於聖人作易之旨不亦偉乎次耕明室之遺民也自號稼堂晦蹟山谷覃思斯文初受業於徐俟齋後學於顧亭林其經術文章實橐籥于二氏焉康熙中以布衣應徵游息翰苑當時以碩儒推之俟齋沒周卹其孀婦孤孫俾得之所又捐貲刻亭林日知錄及詩文集沈德潛國朝詩別裁集阮葵生茶餘客話竝載其事則知非特經術深邃其報師之厚足以敦薄俗也其所著易論收於遂初堂文集我綾瀨龜田先生嘗稱其論精確焉奎因抄出別爲一卷題曰遂初堂易論乃鏤版貽于同志庶覽者足以滌除舊習之害而闡明斯經之旨矣哉弘化四年歲次丁未季秋常陸大久保奎文星識 (句)

書類

古文尚書正文二卷 安永五年集思堂刊本

長萬年跋

自古學氏鳳鳴于西京大給氏鷹揚于東都而復古之業日躋可謂盛矣然至其所導初學之書一唯朱考亭氏之用此所教非其所求也不亦反乎有識者蓋慨焉我兼山先生患其若此嘗因古注施國讀於詩書易等以訓蒙士余輩慮其書寫煩勞頃與同志謀之請先生刻諸冢以惠社中童蒙非敢公之世也然膾炙所同也我豈獨之哉若外人有同嗜焉亦所不惜分也乃所教不反所求而事有終始則復古之業於是乎份份丙申之秋九月紀邸長萬年謹識（句）

尚書十三卷 天明三年京都田中市兵衛等刊本 大阪河内屋茂兵衛等後印本

字野成之「凡例」 齋新甫「跋」

凡例

一舊刊誤字頗多焉今就萬曆嘉靖正德板及汲古閣足利本等考之諸本竝誤而不得正者姑闕疑俟後哲一句讀之誤者因古人之例正之

一舊刊至所有音注者必發之此非發字之例也凡有音注者難字及多音之字亦日曰等易混字也如多音之字音異則義亦隨而改故加圈點而別之然至于發字者亦有一定之法故朱子者傳字直戀反音之然則去聲發之也陸氏者直專反音注有焉今隨之而平聲發之餘者推而可知之

一今爲初學施訓點其訓點者全隨古注及孔疏之意

一本文及注中難解者亦有事跡者抄於疏中而書之首以備參考明和九壬辰之夏宇成之識 (返送)

跋

先王之道在于六經而書者其最者也故雖頗老儒難其句讀況年少幼學遽不如視指掌也我師東山先生嘗因孔傳施國讀抄孔疏而標注令讀者易分曉也豈不小補乎余乞命書肆上梓以賚四海天明三癸卯之初秋齋新甫謹識 (白文)

尚書正義二十卷 弘化四年刊本

林煒「影鈔宋槧尚書正義序」 細川利和「例言」

影鈔宋槧尚書正義序

昔人珍愛異籍藏之於名山石室雖在好古之徒有不得津逮而窺之者彼我一也然其逸於彼存於我者亦夥矣故掛川教授松明復晚耽古書既縮刻開成石經又影鈔足利學所藏宋槧尚書正義進之熊本源公愆憊而劖劖之及刻成公屬煒爲序而觀之書法圓遒宋代諸諱皆缺筆其刻在淳熙前後者無可疑蓋係我永亨年間安房守上杉憲實所寄藏每卷有上杉氏題署筆蹟并皆謄摸存其舊云因憶曩年閱官庫所儲金澤文庫印記尚書正義單疏本鈔刻頗精字體版式與此本相等檢乾隆天祿琳琅書目皆無收載乃知海內外屢有此二部而逸於彼存於我洵可謂希世之珍矣嗟夫上杉氏當干戈騷擾之際愛護墳籍至四百年之後待公而顯則方今昇平文運之隆亦可因公而徵焉是乃公刻此書之素志而煒序此書之微意也矧乎世之攻漢學者每患諸經注疏本多誤脫訛謬至近時阮元蒐羅諸本校勘之猶有所未盡今此書一出好古之徒皆得津逮而窺之斯其嘉惠士林也匪尠殆亦公之志然歟雖然或謬謂公之學確守漢唐者則不然也是爲序弘化四年歲次丁未十二月式部少輔林煒撰

例言

細川利和識

一此書原本南宋初所刻現藏足利學校室町氏之時鎌府宰安房守上杉憲實所捐松崎明復病其無副本影寫一通明復本貫係我宗國因以進呈筆畫精審不違毫釐今取雕鈔務加精校其黑闕漫滅零字缺誤竝仍舊樣意在存宋版面目也

一原本脫紙凡十五葉（第一卷第七葉第二卷第四十葉第十卷第十八葉第十九葉第廿二葉第廿四葉第廿五葉第廿七葉第廿八葉第廿九葉第卅葉第卅一葉第卅二葉第卅六葉第十一卷第一葉）後人以別本補足山井鼎作考文時猶有謂之補

本今止存一紙因刻原補二字於版心其餘姑据宋十行本參以考文補之以便讀者亦刻一補字

一每冊欄上橫書足利學校公用等字及首尾題署花押皆係安房守親墨松竹清風印即其圖書記竝照真摸鏤

一足利學校亦藏上杉氏所捐周易禮記正義版式字樣與此書如出一手而其禮記紹熙壬子浙江路茶鹽公事三山黃唐所刻其自跋云本司舊刻易書周禮正經注疏萃見一書則此本爲黃所指本司舊刻明矣且以宋諱缺筆刻工名識考之其刻蓋在淳熙前後阮元謂注疏合刻易書等當在北宋之末按山井鼎左傳考文引禮記黃跋紹熙作紹興阮元不知其爲誤故有是說明復進書時取黃跋置諸卷尾蓋以證此本爲浙江萃刻之祖也今因而存之

一諸卷大題不一其曰正義者蓋襲單疏本舊名也原本標題依而用之今不復改（句）

尚書註疏二十卷 安永六年京都風月莊左衛門等刊本

芥川元澄「書疏跋（版心）」

徐福泛海載尚書百篇而來我日本者歐陽公詩而述之既已膾炙人口焉余竊意徐子駐蹤于熊野蓋其所載之書藏諸斯以免秦皇之火嗟亦幸矣然上古文運未融無有人探其祕者乎其將不傳之人藏之岩穴以擬宛委之籙乎以故其寥寥就泯滅則與秦災無以異矣設令存于今亦乃竹牒科斗不能通曉視爲殷彝周鼎以供博古則何有補于道哉然則壁中之藏與伏老之誦無論其古今文僅存于今者豈可不尸祝尊崇矣哉而安國之傳漸至東晉梅頤而顯矣其文簡質古奧不由穎達之疏則不能盡其義矣吾邦十三經註疏刻而行世者孝經爾雅左氏傳數書耳窮鄉寒士乏書冊者夫以何發其蘊奧乎哉今自孔傳註疏以及蔡傳旁以經解若欽定註爲之輔則尚書之義庶幾可以盡矣書肆某某謀授劊劊刻萬曆本以行于世矣使余校而句余不佞旁以嘉請汲古閣本校之十易裘葛以從事鉛槧然古人校書擬之掃落葉顧梓工之踈亥豕不少至其遺漏則幸埃大方君子之是正讀者亮之安永六年丁酉夏六月書於思堂中平安後學芥元澄（白文）

書經六卷 嘉永六年跋刊本

中詔之舜跋

蔡氏書集傳本存安國序於卷首又合小序爲一篇附諸卷末共爲六卷事具於序辨并集傳序而傳摸浸舛失其本真者固已不
尠至其并兩序遺之者則遂亂成書謬妄尤甚矣惟正統監本者號爲精善然予未得其本近取大全讀之篇卷排紋與序中所言
者略同而猶頗有所未盡又文字譌謬尤多亦非當時舊本故今姑因此書更與二三同志爲校定悉考衆本異同而一以文勢義
理及他本可驗者決之而不復別標諸本異字如其音釋則諸本錯雜不同而概屬粗略疑或後人所補今皆刪之以悉復舊貫因
點國讀以便於幼學之講習云嘉永辛亥孟秋吉旦中詔之舜識

(句)

書經六卷 寬文四年野田庄右衛門刊本

松永昌易跋

右蔡氏集傳之考證評註者專用陳師凱旁通鄒季友音釋爲要矣其餘引据博採可爲確證者而已矣寸雲子昌易記焉
(返送縱)

書集傳音釋六卷 嘉永四年昌平坂學問所刊本

杉原直養跋

昌平學庫有明正統閒槧本書詩集傳各一通故國子祭酒述齋林公欲據其本而校刻之於黌院使四方取正焉嘗命直養督其事客歲二書刻成今茲又取鄒氏書傳音釋釐爲六卷以附刻其後此亦公之所命也顧校書固非易事故反復校讐不遺餘力雖有一二可疑者不敢改寫必仍其舊然恐尚有疏脫因略具其由以俟來者之是正云嘉永四年復月教官杉原直養識 (白文)

砭蔡編一卷 享和二年跋江戸遠州屋清右衛門活字印本
石塚尹跋

活版砭蔡編跋

明人袁復坡先生著砭蔡編一卷正蔡傳誤旁及孔傳以示其子袁了凡學者資以讀尚書不爲亡補余故活字刊印以與同志先生名仁字良貴復坡其號云爾享和二壬戌上巳武藏石塚尹（白文）

書疑九卷 明和二年京都唐本屋德兵衛刊三年補刊本
赤松鴻 「題書疑首」(難讀) 湯淺元禎 「書疑序」

書疑序

赤松大業校宋王拍所著書疑以授梓人夫書者先王之法言豈可疑乎傳曰信而好古君子之誼迺爾關洛而後賤故貴新古誼見貶於是乎有書疑此宋人之常政已雖然魯壁秦燹殘缺之甚雖信而好古不可得而讀之蓋信古者無以尚之能疑者其爲信矣可謂知之次也學者卒業斯編沈湛之思精氣之極有發一識則庶幾乎可得而讀之大業意在於斯乎大業播人少有儁才善屬文以文學穀於赤城云明和三年丙戌正月備藩湯元禎 (白文)

新鍤書經講義會編十二卷 延寶二年跋京都吉野屋權兵衛刊本

眞祐跋

友生某氏應書肆之需點訓于尚書講義就予請正讀之愛其承蔡傳之意敷演得詳明也遂一校讐加點竄還之甚恐風葉之喻亦請四方學者正焉延寶甲寅初冬日洛陽眞祐 (白文)

洪範一卷 寬政十二年序修本

古屋高「定正洪範序」 佐藤平格跋

定正洪範序

臨川吳幼清學宗程朱而所見頗異是以其解易不依傳義解書不取蔡氏專信今文率由伏生之舊其餘二十五篇舍而弗釋其所解亦往往卓越諸家如洪範洛誥皆有定正條理井然文穩意順讀者忘其聲牙嚮佐藤氏者抄洪範一篇序而傳之近書肆某更乞序於余欲以爲奇貨余豈皇甫也哉焉能爲斯篇之重唯欲其梓之有繼以及全篇因應其請書以勸之云寬政庚申八月既望東肥古爾撰 (句)

蓋注洪範者數家而不知皇極五福有錯簡也獨草廬吳氏依韻考正乃始得其次序學者不可不讀寬政乙卯之冬十月佐藤平格識 (白文)

尚書大傳四卷 明和五年京都林伊兵衛等刊本

片山猶序 細合離「跋（版心）」

尚書□經文有古今而學□其家或先出或後行由是羣□聚訟紛如乃兩造具備苟不□乎於古有倫要良蔽之猶不蔽也余嘗竊謂疑而蔑古寧古而□□者惟闕□是以學不可不博也遺編不可不傳也如伏生大傳是也善此編也首尾不倫雜記而不能無□□也雖然名而不觀其物則無如歐陽氏遺憾□東方耶木世肅刻此編并盧文弨考異以弘其傳□乃慨□歐陽氏□也抑惠及同好之士亦大矣哉嘉之以序云明和丁亥之春越後片猷撰（白文）

秦燔而後傳尚書者漢濟南伏勝其學歐陽諸家列于官云孔氏有古文尚書安國因得多篇史僅記之至漢藝文志載其經而不及其傳則晚孤行亦不能無論也夫伏生經雖今文徵於先出又有大傳以知其學何廢之久也逸矣東土古所傳書既有免乎秦火之說而況漢以來具存乎且近所東傳亦可以補闕則必有藏如木世肅者而不如世肅之好也其意謂多未廣布書吾力任之尚書大傳先告版成是亦或疑非其徒記聞之舊然班志實收之則學古訓者其舍諸世肅之緒乃見歲次丁亥春三月河曲合離題（白文）

詩類

毛詩正文三卷 安永六年集思堂刊後印本

小田煥章跋

國讀助聲之猥詩書二經殊甚如塗塗之附若蝟毛之磔宜矣讀者有買櫝還珠之患也古云誦詩斯豈可誦歟我山夫子之授毛詩也其譚簡便使人易誦不亦說乎世之習舊讀者觀之其何異乎披雲霧而睹白日不亦快乎田煥章謹識（白文）

毛詩正文三卷 安永六年刊後印本

鳥居忠見「詩書正文序」

詩書正文序

幽厲之後王道衰禮文息而節族廢孔子論詩書正禮樂千載之下其粲然者六經是也而奧突之間簞席之上歛然聖王之道具焉學者之務莫先焉兼山先生授六經常患舊讀助聲之煩施訓點於詩書以便童蒙詩從毛萇書從孔安國不少加私行將及易禮無何先生逝矣可歎哉田子文者同社之老成也來謂余曰梁木雖壞二三兄弟今猶昔也各木鐸於東西緒業日興詩書亦從行日詩書之上木將使公爲之序而辭以不敏屬者二三兄弟相言及于此其志在成先師之意公盍達其志乎忠見曰善哉子之言也於我心有感然先師已命焉兄弟亦云焉我敢不然焉哉遂以其言爲序天明甲辰春三月鳥居忠見謹識竹岡井庸肅拜書

(句返送縱)

詩經二十卷 延享四年江戸前川六左衛門等刊本
井上通熙跋

毛詩傳箋刊行已久字亦訛舛今特是正而刻之以播於海内日本東都井通熙識 (白文)

詩經二十卷 天明六年江戸前川六左衛門等刊本
宇野成之跋

毛詩和刻有二板其江戸板者雖誤多然京板亦頗誤也今就華本及足利本等而正之加圈點施國讀也傳箋意異而易混或有句中難解者則抄於孔疏而標記其事聊備初學考索天明乙巳之孟冬宇成之識 (返送縱)

毛詩指說一卷 明和五年跋兼葭堂刊後印本

關世美「毛詩指說序」 岡元鳳「跋（版心）」

毛詩指說序

蓋詩之於文字抑末也而況副墨乎雖然先王修其末而本色不掩其教亦始盛矣後人聞諸副墨之子而大義不泯物名亦兼舉
哉何則結繩以前雖無文字人稟七情情之斯感苟有事於輔頰舌則其詩也固矣而其不傳者無字故也書契以後迨唐虞三代
其言與事足以記焉雖然若發夫蠢愚野人之喁喁者豈盡有字雖無其字其詩也固矣而其傳者蓋先王譯其音用字也當此時
也亡論吐露士大夫衷其言之雅馴雖發夫蠢愚野人之喁喁而無其字者悉皆收之連類含章以爲治具矣官采之而瞽誦之上
風化下下風刺上猗與偉與莫以尚焉爾及春秋時先王澤竭采詩官廢雖然士大夫尚能諷誦舊章以喻其志賓榮身文皆從事
於斯則詩之用猶活潑哉當孔夫子時其教益亡樂章亦紊殆將併失彼賓榮身文者歸之造物矣夫子嘗有慨於此乃祖述先王
之意遂就其舊章刪三百篇存其本色以揭示後世雖則揭示猶尚懼斃聞罕漫而不昭察故其所雅言諄諄然每權輿其述旨而
後繼之者大小二序不得不序焉後素之解多識之說萌芽其訓詁而後繼之者毛氏不得不傳焉而草木疏等書亦不得不作焉
唐成伯瑜氏有見於此乃著毛詩指說一卷大義與物名交舉則亦後世不得不作焉之物也歟而所述率根極條貫乎古來傳
授說而非彼宋儒臆斷千載之下之比則雖有不存焉者寡矣可不傳乎浪華木世肅氏近購得其書將上木而遠寄請序因題數
言還之若夫他日獲彼斷章一卷者將合刻連璧有請焉則不辭又操觚之役云明和丁亥冬復月筱山文學浪華關世美撰
(白文)

孔筆刪詩三百篇以其諷誦乎□□而完後世奉之固是幸也乃詩之有說自漢迄唐不止數十家然其傳於今塵塵晨星是何故
也宋而元明經說更端夫人喜新學而不暇古□之存傳承之言幾乎熄焉夫不朽者而朽矣余嘗慨之云以今觀之如成伯瑜指

說者不亦寡僅乎□人木世肅近獲其書刊之□□唐人或曰六朝人顧雖其履歷未詳然其爲□稱述古賢闡明大旨要亦傳承
之言也如刪詩大小序諸說何其與後儒懸隔也此可不存哉□□行世可□斯道然後不朽者不朽矣余嘉獎同志之舉因言
其志□□佚之日已久惜夫明和戊子之春浪華岡元鳳撰（白文）

詩經八卷 寬文四年野田庄右衛門刊本

松永昌易跋

右詩三百十一篇朱子集傳之考證評註者余教授之暇採摭元明諸儒之說以便同志後學之徒者也講習堂寸雲子昌易謹書
焉 (白文)

詩緝三十六卷 天保十五年序 姬路藩仁壽館藏版本

林銑「刻詩緝序」 酒井忠學（姬路城主）「詩緝跋（版心）」

刻詩緝序

宋代說詩之書凡若干種其尤顯者有廬陵本義頴濱詩傳東萊讀詩記俱闡發詳悉不遺餘力而至於考亭集傳備矣華谷嚴氏所撰詩緝亦其一也是編以讀詩記爲主而雜取諸說以發明之附以己意皆深得詩人本意至於音訓疑似名物異同考證尤爲精核蓋在士子爲不可闕之書矣方今說詩諸書流傳於我者不爲尠而獨詩緝雖散見於他書所引而睹其完帙者鮮矣至近時往往舶載新刻本訛繆極多屬者姬路源公獲明槧一善本命翻雕之以藏於家因屬銑爲序顧公幼時嘗執經於吾先考夙馳好文之譽今又有斯舉益信公之崇學其用心也篤矣況是編參之朱傳有所資益學者由是而津逮焉更進而折衷於諸家之說其亦可矣然則是書之出必知皆爭購競獲時月之間殆將遍布寰宇其有嘉惠後學孰謂匪公之賜耶銑因抃手樂而序之天保十五年龍集闕逢執除季秋月大學頭林銑敬撰（句）

余不肖叨牧民之職日夜兢兢恐墜祖烈顧念教育人材之道莫先於講學因欲刊布好書以資生徒未果也壬寅之夏官下令俾有土列藩各開鏤典籍於是與祭酒林先生議定將刻華谷嚴氏所註毛詩募其善本聞愛日樓有舊儲因借覽之則字畫端正迥非近時坊本之比愛日老人與余有舊乃懇求之老人割愛見贈余喜可知也適命侍臣重加釐正遂就翻雕焉蓋毛詩之解朱呂二家註本早已鐫行但嚴氏此述固稱博綜而舶齎不多學者以爲憾今始入刻庶幾於抱經之士或有裨益則大府之令鄙衷之私一舉而兩得之也滋爲可喜矣剞劂告竣乃題詹言如此天保甲辰三月姬路城主源忠學識（句）

毛詩名物圖說九卷 文化五年江戸堀野屋儀助等刊本

多紀元簡「毛詩名物圖說序」

毛詩名物圖說序

吾醫脩本草之學以辨明動植之名狀是非□誇博而鬪奇也唯要知其功用以治人之疾疹耳儒者講毛詩之學以疏證鳥獸草木之名物亦豈貪多識而誇博聞乎哉要在□其興象以正人之性情焉夫治人之疾疹以躋壽域正人之性情以入聖域其事雖異而其理則同是故詩三百要思無邪再本草三百六十種要身無疾再人身無疾而民以無邪則太平鼓腹之治聖賢所願豈出此外乎是故云不爲良相則爲良醫蓋以其理相類也吳中徐實夫毛詩名物圖說會萃衆義斷以其所見簡而有要是學詩之寶筏也滕揚州翻刻之以請序於予予醫也不好序儒書況於解經之書乎雖然此書疏解動植之物則涉於吾本草之學而脩明本草者不可不參考此書也是故於其請序論詩本草之所以相爲表裏者矣其編端云文化五年戊辰三月江戸醫官丹波元簡廉夫蘭溪西島長孫書（白文）

韓詩外傳十卷 寶曆九年大坂淺野彌兵衛等刊本

秋山儀「新刻韓詩外傳序」 鳥山宗成「韓詩外傳序」

新刻韓詩外傳序

先王之教始於誦數誦數始於詩詩可以興可以觀可以羣可以怨邇之事父遠之事君多識於鳥獸草木之名故夫子雅言也而罕言寓焉亦唯溫厚和平諷詠□□循循然善誘人使人思而自得之知來起予職此之由故古之學者必先於詩焉然後經藝可陳苟不先於詩乎經藝不可得而陳也亦後經面牆而已故鹽梅五味之和也四詩六經之和也諸家之傳得失互有燕人韓嬰亦著內外傳惜矣內傳不傳唯外傳存其書博采古人言行引詩韓之其文瞻其辭縟□讀者欣然忘疲厭而□之愈嚼愈覺其味之源長於是乎自經史而外及諸子百家之言譚然□融乎詩而無凝滯焉其爲義之府也昭昭矣設令夫子而在乎亦當曰嬰也始可與言詩已矣諸家訓詁局於一經豈如韓之旁通貫綜哉元儒山東張□士行云外傳傑出可謂知言矣己卯春余從吾侯而東三月上浪華磯夜宿逆旅之舍有人携是本來曰是越烏世章所□今將上木□乞子一言余年無千眼目有玄花又子□□行俱下加之跋涉之□未□□下草草讀數葉而已且未識其人將□以措辭明發倉皇上途四月抵江都不復以序爲迄後數月世章寄余詩及文申以拙序之役余更而讀之亦猶見其人乎義遂不可固辭因題其□曰草閒之蛇翹首尺其脩短立見余於校本亦未卒業既已知其必有裨於學者也云寶曆九年秋九月□□秋儀書於江都就口□舍之中 (白文)

韓詩外傳序

孔門之說詩也猶造父之御車孫子之用兵也進退步驟奇正開闔惟其意之所欲出焉至矣盡矣其蔑以加於此矣繼之者其惟孟子耶其所謂不以文害辭不以辭害志以意逆志者實開萬世說詩之法也自孟子沒寥寥乎亡聞哉降迨後世引繩墨而論之取性理以鼓之則詩道幾乎熄矣獨韓氏在漢文之世著韓詩內外傳當斯時孔門之澤未墜於地賢不賢識其大小韓氏蒐而鳩

之其文也非左也非莊也非孟也非荀也非賈董兩馬也秦漢之間別構一家乃爲藝苑絕品蓋繼孟子而興者豈非斯人歟惜乎內傳既亡外傳孤行余在鄉之日甚嗜韓詩嘗病外傳之多衍脫謬誤讀之使人不勝乙反覆校之繕爲善本又傷內傳之亡妄不自揣剽掠盜竊以擬之琢字成辭屬辭成篇篇凡五十餘猶未脫稿固亦西施之顰邯鄲之步而已甲戌之春城門失火禍及弊廬其校本擬稿一夕爲灰燼余於是乎拍然而抃嗑爾以笑曰猗乎祝融之神藏吾之拙而奪之邪抑亦韓氏之靈怒吾之妄以火之邪此二者固不可以臆度則吾豈若已乎哉從茲絕筆不復屬意韓詩今也浮遊浪華暇日與六七兄弟讀外傳亦皆苦其不可句也是以校華刻數本窮丹鉛之用傍添國字授劄劄氏非敢爲馮婦也聊便於童觀耳寶曆己卯端午日南越烏宗成撰（返送句）

禮類

周禮六卷 江戸期刊本

林信勝「周禮跋（版心）」

周公撰政制禮樂官得其人任稱其職於是六典以敘周禮是也故儒先有言周禮者周公天理熟爛之書也善用則太平可以馴致矣若新室用之以爲篡竊熙寧用之以爲苛法人實有咎書何咎之有哉讀者其精詳焉近代讀者鮮矣余嘗塗朱墨以藏于塾今周哲生加之訓點苟不自是來就余質正不亦奇乎或有起予者或有竄定者他日更校讎庶乎可也哲生者大江參議甲州牧君之家人也牧君成人之美故勸而教之其意蓋欲國家官職能得其人益延治平於無窮者是亦可貴也遂跋寬永九年冬十一月夕顏巷戸部卿法印道春（白文）

周禮正文三卷 文化六年刊東京和泉屋金石衛門等後印本

佐藤政敦「序」

序

聖人之制禮也上律天時以建之數下襲地誼而立其度三百六十以網羅天下周官雖闕可以觀其綱矣至威儀之節則所以使人固肌膚之會筋骸之束以立無過之地其條三千擾之亦多矣高堂禮雖弗備可以睹其端也至戴氏記摭其遺輯其闕兼以論其義者也然則三經之在禮譬之鼎足失一則不可也自世有五經之稱而後之初學唯知誦戴記不知讀二禮習貫爲常脩業之後徒言其理已至如制度之數威儀之文則芒乎不省以是議禮不亦左乎雖幼蒙之不及於此抑亦誰之愆歟我聞兼山先生之塾式次五經以二禮可謂善揀其敝者而二禮之有舊讀米鹽蟻傳其煩可厭頃者重野東成携其所校周官正文來視余曰前依鄭義正讀施訓既經師閱今也將上櫻儀禮之鐫亦復有日願得太夫一言以冠卷首余國事之不遑講學之無素焉敢雖然向者我藩主延抬受經又使藩子弟就學余亦時質問則此舉也豈云他人之幸乎哉是余所以不辭有此序也文化六年己巳之秋延陵藤政敦撰松山源忠孝書（句）

儀禮十七卷 寬永十三年序刊本

周哲「儀禮序」 林信勝「儀禮跋（版心）」

予見儀禮周禮二書苦其難讀且憾無倭字之訓解古或有之而爲失火所焚邪抑遭亂賊而委于塵土邪嘗竊聽羅山先生之點焉意必祕而不出越不揆禱昧點之而思授諸童蒙者故悉鄙情從事于机案閒手寫白文經三霜而漸終其功自漢唐宋元以來注之者有多門予惟從鄭康成之解則聊存古之義也既而顧蛄蜩轉丸之譏謁于先生需是正之先生使予讀其始終被質十其一二遂跋其卷尾嗟乎先生之於學者泰山之蟻垤江淮之細流也片言之褒猶踰華■何況此跋乎榮之而藏于筐笥今茲書林松氏請鏤于梓膚淺孤陋非無謬誤讀者自擇執之幸也寬永十三年夏六月愚齋周哲序（白文）

■ (ㄏ、 34121)

儀禮者文王武王之制度而周公所撰之經也有鄭註陸音賈疏而行于世雖然往往佶屈聱牙故韓愈尚云苦儀禮難讀而況於今乎余往日滴句讀之露行墨點之鴉姑藏于家以待再校今茲大江參議甲州牧君之近習周哲生手自寫白文且點之來問其臧否又請補寫其脫落者懇甚於是出示家本以使參考焉古人檢書譬諸掃風葉他後宜重是正焉夫禮之盛也優優乎三百三千待其人而後行今讀此書則雖千歲之下如升降出入于其處進退揖讓于其間也孔子曰周監於二代郁郁乎文哉吾從周嗚呼大矣遂跋寬永九年冬十一月夕顏巷戶部卿法印道春（白文）

儀禮十七卷 寶曆十三年京都山田三良兵衛等刊本

菅原在家「儀禮序」 河野子龍「刻儀禮序」

儀禮序

從三位行右大辨菅原朝臣在家撰夫周禮之與儀禮同是周公所制然而周禮繫之周儀禮則不者蓋以其兼有三代之法也嗚呼孔子生周末衰亂之世睹典籍煩亂懼憲章遂泯絃書刪詩脩春秋讀易道慎明舊典於是乎所以節威儀序尊卑寧社稷正朝廷經邦國之法備矣比光日月垂法萬世郁郁乎文哉蓋以秦漢以下典禮制度雖世有沿革源遠流分而要莫不出於儀禮於我朝廷亦然人唯知其制度摸隋唐而不知其禮本出於儀禮詩曰不識不知順帝之則其是之謂乎賈氏曰周禮爲末儀禮爲本余謂三百三千儀禮實爲之本本立道生豈可忽之哉今也此書刻成矣余喜而不寐遂爲之序云爾寶曆十二年三月三日（白文）

刻儀禮序

禮經周公之所制作也舜自五禮章五服禹湯之際質文相移損益斯可知至于有周綦文綦章曲爲之防制之禮經故曰周監二代郁郁乎文哉周道既衰彝典攸斁故武子聘周始講典禮宣子適魯乃知周典禮三百曲禮三千缺有閒已久矣然春秋列國相聘玉帛將命冠昏喪祭俎豆之事猶依以行之夫子問禮柱下聿暨杞宋補缺舉遺文獻是索以明禮經夫子沒而頽乎戰國而七十子之徒之所雜識尚可執也聖經百六祖龍作災先王之大典禮經斬焉亡矣漢緝遺文搜缺典灰燼之餘寸簡尺璧魯國高堂生所傳者裁一十有七篇是乃周公所制作禮經也唯其王朝之禮咸缺邦國之制存半淹中之出者亦堙泯之餘亡有師說世是以不傳今儀禮即高堂生之舊也蓋周公之所制作三千三百該其大數禮制之凡節文之目其實也一胡岐而兩之若夫記則七十子之徒之所雜識與漢諸儒博士之所述而皆言其義禮之有記也其猶春秋之傳乎而正經之逸者亦糅焉至周官之書

則先王體國經野設官分職之典先儒或目周官爲經禮謂儀禮曲禮似失之矣夫體履一揆已非本末經禮曲禮胥言威儀人之所以異犬羊之與戎貊者何哉有威儀也是故慎終追遠則喪祭重始敬本則冠昏肅離嘉淑於是乎有朝聘享頤湛樂燕衍乃制之射鄉食饗周還謁襲其儀整如也俎豆玉帛其節森如也是以執玉之高而子貢知其死亡受瑞之惰而內史知其不終審威儀也詩曰威儀抑抑德音秩秩又曰敬慎威儀維民之則重威儀也君子之成德也將必於是乎觀焉故曰容止可觀進退可度致威儀也是故威儀德之表也法度禮之體也君子之所審焉禮經雖缺有周之制可知也夫時有升降所遵異尚以今視于數千百祀之上舍法度威儀而何觀哉夫法度威儀物也周公所制禮經之載豈外乎物以今視于數千百祀之上不以法度威儀求之乃舍本論理舍物審義俛俛乎其不能合也必也審物而論厥本伏習之久宛乎身周旋揖讓于一堂之上秩然且莫趨詳張皇于一庭之間夫如是也綴綴然其有以合也嗚乎專門之學廢而士之習禮節者益少明氏排儀禮學官獨立禮記陳氏之說遂孤行而世之讀儀禮者益鮮亡稽之談一錯廁明氏之敝斯流矣悲矣夫且夫辭之棘焉韓愈而難之儀文已繁讀者不能竟篇奇辭奧旨又奚自得焉世之儒者遂束而不窺弁髦而磨棄之廼又諉曰禮不在法度威儀屑屑焉于繁文末節祝史之事爾夫先王制禮以能成民能事神修外而爲異乃法度威儀而存焉不求於法度威儀而求諸浩眇宏肆之中■矣即法度威儀之外而別有浩眇宏肆之理彼杞宋文獻夫子何其不足而不徵也禮經雖缺有周之制可知也其物之與本既審而正矣讀儀禮者之於禮也其猶視諸其掌乎不獨禮也六籍皆是也余得錢塘鍾氏校本校之文字紕繆甚多不得則不通迺會數本徧蒐諸注家即朱熹以降莫不該焉唯其古義之得以爲難自朱熹旁引經傳分析篇章其徒頗知言儀禮而其得也蓋少獨元敖繼公所著論學雖不純古皆誦證于二禮春秋多所發明予是以旨之於是攷定較訂窮年累月始得其正嘻經術蠱壞習流日波是刻也成其庶幾乎足以喻夫束而不窺又從而排之者焉耳矣乃志古之士其有少鑒于予之言夫寶曆壬午夏五月河子龍伯潛撰

(句返送縱)

禮記正文五卷 寬政十年青蘿館刊本

青木萬邦「跋（版心）」

余之在越前也客從京師來而謂曰大哉山子之學也余曰子之出此言將何所見客曰然我未嘗見象見牙而知象之大今京師學士尚山點詩書簡正佔畢成風舊習之陋如飲灰洗腸餘風所扇動肥之西紀之南莫不靡然於是乎引領東望曰既以詩書惠天下易禮盍出乎夫句讀細故也我以見山子之學之大豈亦不象之牙乎余曰然哉然哉嗚呼無此物何以易之昔者先王移風易俗禮樂則其物也子以象之牙知山子之學余亦以子之言知禮樂之德詩曰如切如磋子其記之客頷而去客歲從駕於東朝乃縱與葛菽二子授此書於梓人以酬東望之士云爾戊午之冬十一月青木萬邦識生駒恒書（句）

禮記三十卷 寬文四年野田庄右衛門刊本
松永昌易跋

右禮記集說之考證引援者孔穎達正義及柯尚遷全經之說採焉掇焉爲初學蒙士之譚柄潤色而已矣春秋館教授昌易記
(白文)

禮記集說大全三十卷 昌平坂學問所刊本
林信勝跋

禮記一套以陳澧集說之趣爲之訓點道春
(白文)

檀弓一卷 延享四年大坂堀內忠助等刊本

仲子由基「合刻檀弓孟子序」 山縣孝孺「書檀弓孟子批點後」

合刻檀弓孟子序

三墳五典九丘八索吾未聞有伏生存焉夏商之際必也載於簡而後能瓜瓞後世則文之不可已也如是乎世無文辭日月不明仲尼曰辭達而已矣辭也者文辭也與言語不同辭而不文安乎成名不然何言之不文不足以行遠夫子獨警夫辭飾而意不達者耳自韓柳□六朝之粉□祖孟子唱古文也今之稱古文者遂擯孟子不取焉夫辭有正有譎文有雅有辟以余觀之孟子殊無譎與辟未見其或不正不雅者韓柳□而歐蘇歐蘇□而語錄豈孟子之罪哉洙泗之後儒者能言莫若孟與荀苟祖孟子而不爲孟子之奴於儒家文辭足矣孟子豈可擯耶□者□縣先生之所獲謝蘇二氏所批檀弓孟子之書卒業則二氏以爲鑿鑿中肯綮不啻庖丁解牛若夫檀弓與左氏頡頏時或出其右唯是洛誦之孫知讀檀弓不知讀檀弓之文謝君乃一上其手一下其手是或可庶幾歟於是肄業之暇旁註國字以便誦讀且舊刻一二疏義不與文章者後人所加非謝君之意今悉削去從簡顧學古文者得二子之意讀二書焉思過半也抑亦涉嶮之津梁也頃剞劂請梓而傳不許三余曰吾過矣吾過矣龜玉毀於櫝中是誰之責與蠹之又蠹皮之不存如之何沾之哉沾之哉遂命上梨棗云延享丙寅夏六月長門仲由基題 (句)

書檀弓孟子批點後

余□年得疊山批點檀弓老泉批點孟子於傍閒初廼以是或王會稽千字文不必出乎二子然其批點評論精覈周□非老於文章者不能爲焉復及見清人崑山徐與喬經史初學辨體輒有言曰儒之尊經莫若宋使不可評謝疊山何以評檀弓蘇老泉何以評孟子由是觀之二書傳授久之可證焉唯爲王李古文之□厭不甚著焉耳命置帳中云縣孝孺 (句)

大戴禮記十三卷 元祿六年刊鴈金屋昌兵衛後印本

淺見安正跋

書肆某欲刊大戴禮記因點和讀以與之且考其本末可驗者載諸後如右此書固純駁混襍而先聖偉辭禮典關於道術政教之要者蓋亦不尠讀者宜慎選莫忽焉（逸禮出于說郛）元祿壬申季夏日淺見安正謹書（返送縱）

新定三禮圖二十卷 寶曆十一年江戸前川六左衛門刊本

菊池武愼「題新定三禮圖後」

題新定三禮圖後

宋河南聶氏所奉勅而集註新定三禮圖定擬先代車旗服色鍾鼎裸器之制而詳悉該備有益於後進如俯拾地芥矣恨國朝未經剗闕氏之手坊閒畜之者殆少矣不佞適得善本於同志之珍藏乃喜而校訂俾書肆錄于梓云寶曆辛巳之春南陽山人菊池武愼（白文）

春秋類

春秋經傳集解三十卷 寬永八年跋刊後印本

堀正意「左氏春秋跋」

左氏春秋跋

春秋有五傳左氏公羊氏穀梁氏鄒氏夾氏是也鄒夾二氏無傳高赤俱受學於再傳之子夏獨左丘明受經於仲尼身爲國史躬覽載籍廣記而備言之其文艷而富其旨遠而深漢魏以來言左氏者數十家而晉司徒杜元凱耽思經籍自謂有左傳癖平吳之後辭去世務爲春秋左氏經傳集解又參考衆家譜弟歷數年月作釋例長曆備成一家之學文辭質直理義幽邃卒不能解故人未之重唯摯虞賞之曰此書孤行矣宜哉鉅儒碩才崛起於唐宋之間無加點竄之筆矣爾後林唐翁藻飾之爲句解申周翰羽翼之作詳節瑤泉評苑之異論稚隆測義之該洽遂不離於杜氏範圍之中矣古者本朝之盛建大學寮設得業學生之科令讀五經三史及天文九章等書限左傳以七百余日以謂文義古奧簡帙重大故也自是至今迄于千祀朝野傳習師弟授受然而時有隆汚人有智愚則琅琊之稻無辨而空束高閣奈何至於艾穎擢異時之甲科東萊撰一月之博議耶今遇明時大闡儒教人知禮讓家蓄經史爰彬田氏玄與欲刊訓點左傳以行四方屬予求善本予嘉此書之神益學者遍考數本正字畫之紕繆改和訓之異同可者存之闕者補之以俟後之君子矣庶幾讀之者辨淄澠分涇渭者幸甚時寬永八年歲次辛未冬日南至尾陽路醫官法眼杏菴正意跋（白文）

春秋左傳三十卷 安永六年刊大坂河内屋茂兵衛等後印本

源賴亮「重刻左氏傳後序」 那波師曾「跋（版心）」

重刻左氏傳後序

左氏與公穀匹固勿論矣而左氏獨行者以屬辭比事三體五情曲臻也至其文所結構依經以辨理錯經以合異隨義而發例則杜氏更修傳歸凡而原始要終微顯闡幽而其義確如也是復所以獨行也然而年禩之久編蒲之所致剗削之所加紕繆已多矣於是乎阿州人那坡某務辨魚魯照烏焉校訂研究句讀竟歸于正國字旁注全備矣既而衆志貴重冠於藝林此刻最行焉故未數年舊版已靡爛猶尚切劑不倦再刻是謀乃介某而謁予予曰杜氏之有大造于前若燒犀而照也那坡氏之躡影于後若浣質而睨之也其所以最獨行之所自可以知也已矣奚借予言固辭不許竟書以塞其責云爾天明丁未冬守山源賴亮東江處士源鱗書（白文）

春秋一書聖制所寓輕重之權衡曲直之繩墨誰得而易之哉雖然時有遲速人有賢愚欲因遺經窺聖人之用亦既難矣是故以公穀之專門而猶有疎漏誤事之毀獨至武夷胡康侯以剛大正直之說明天理正人心史外精義炳如日星何俟於後進之贊哉蓋此數家以經爲斷以義爲主而議論紛紜猶尚如此若丘明傳則先後依錯未嘗必以經爲意復奚與焉唯敘事洽博往往與經相爲脣齒則大非諸家縮■之儔也潛意於此經者豈其可措乎若夫陶鑄一派富豔浩蕩之文爲鉤棘難讀之地以丘明爲口實抑亦降哉余蚤校左傳集解三年卒業先賢有言讀書不眠徹夜聞杜鵑之聲余未必無感焉嗚呼一堆破爛朝報其勞神費精亦勤矣此何心哉此何心哉寶曆四年甲戌冬十一月十七日書於魯堂中西播後學那波師曾舊本漫漶改刻再校安永六年丁酉春三月二十一日魯堂重識（句）

■ (シク 14356)

鼈頭評註春秋左氏傳校本三十卷 明治十三年東京山中市兵衛刊本

柳原前光「序」 北島道龍「序」(難讀) 石川英「評註春秋左氏傳序(版心)」

序

讀書有死法有活法誦文字記事蹟而已謂之死法以古商今由今稽古謂之活法官脇通赫頃者著一書名曰評註春秋左氏傳校本請序於余焉余曾讀漢譯萬國公法序今之全球譬諸彼春秋列國以余親之米則齊清則魯土則燕俄則秦英佛猶吳楚普澳猶趙魏而伊蘭西葡諸國猶宋衛陳鄭亞佛利加其所謂蠻夷戎狄耶夫此數國其一盛一衰如五霸互起然而以一小國竝立大國之間保其國權者抑何所致而然乎曰治內善外有如子產之於鄭孔丘之於魯者而然矣世之讀是書者能以其意明之可謂得活法哉神武天皇即位紀元二千五百四十年明治十三年五月一日議官柳原前光撰并書 (白文)

義皇之世邈乎不可考故夫子刪書斷自堯典而弗道其前文武之際事實亦不詳故夫子脩史斷自隱公而弗書其前蓋夫子脩春秋也約其辭以述其道於萬世子夏之徒不能贊一辭公羊傳疏云孔子求周史記得百二十國寶書立成然而三子之徒暢其辭傳之豈其搜索各國遺書有所傳而述之者歟太史公十二諸侯年表序云孔子西觀周室論史記舊聞興於魯而次春秋七子之徒口授其傳指魯君子左丘明懼弟子人人各安其意失其真故因孔子史記具論其語成左氏春秋或云孔子將脩春秋與左丘明乘如周觀書於周史歸而脩春秋之經丘明爲之傳共爲表裏杜元凱序亦云左丘明受經於仲尼然則左氏之述經學乎聖人所傳發經之所不書詳經之所不言探賾鉤深將令學者原始要終究其所窮其有益於天下後世可謂偉且大矣至若苞羅旁魄該通百事二子所不及是亦所以有三長五短之說也而韓文公謂之浮誇呂成公亦謂以人事傳會災祥余以爲若申生伯有雖事涉怪妄里巷所傳不得不書若趙盾許止所謂爲法受惡非可復難特至引易稍疑之莊公二十二年周史爲陳侯筮之遇觀之否蓋一爻變也閔公元年畢萬筮仕於晉遇屯之比又一爻變也其他所載十有餘大率係一爻變意二百年間各國所筮豈

止一爻變哉夫爻辭聖人所繫如繇辭乃係卜人造語猶莊公二十二年鳳凰于飛和鳴鏘鏘襄公十年有夫出征而裘其雄裁載二三而不載其卦豈厭卜人之言獨擇聖人之語者歟若言舊史所載如斯以其有驗者傳之舊史亦可疑也凡秦漢以前之書係偽選者最多以古文尚書可知耳其他如管晏莊虞真偽殆相半所謂盡信書則不如無書豈獨左氏也哉由是觀之左氏之傳經籍焉以作私史者安爲微顯闡幽述聖意乎而漢唐諸儒之註左氏者皆陷其術中者若劉炫之規杜抑亦未免罣獲爾且夫左氏者不審其生卒太史公不載之列傳或云魯史或云楚左史倚相之後王荊公疑爲六國時人顧夫子距隱公僅二百年而不書其前左氏生乎其後安得詳之況若杜氏後乎左氏七八百年其間一罹秦火何以證焉今生於數千歲之後掄腕驚遠喋喋求以究其理嗚呼亦不量力而務勝毋乃爲君子之嗤乎方今學課浩繁典籍爲山學者欲盡講究之壽餘彭祖復不以爲足矧以有限之力讀無限之書乎宮脇通赫著左傳校本由杜註以芟除葛藤折衷諸說擇其佳者且正字音以詳句讀使童蒙一讀了解大意世之學左氏者讀斯編其亦足矣歐陽公曰君子之學不窮遠而爲能慎所傳以惑世者通赫氏之著蓋亦在於此歟明治十三年龍集庚辰姑洗中澣日後學鴻齋石川英撰并書（句）

增註春秋左氏傳校本三十卷 明治十五年大阪山内五郎兵衛等刊本

近藤元粹「凡例十則」

凡例十則

一 斯編本係余幼時課讀之本講肄之次有異說足訂杜氏之謬者則隨錄之欄外積久增多丹青溢卷至無復餘白書估某來見請上之木乃再校一過略令整齊就世上所行秦氏校本別設一欄於上層次第填塞之命曰增註春秋左氏傳校本以附之非敢道裨益于大方君子姑欲爲家塾課本焉耳

一 秦氏校本行于世久矣其書摘錄孔氏註疏者過半於諸儒所著僅僅止於趙陸傳顧數家耳而其說多護杜氏未足以聳動人意也余斯編所引上自唐宋下至明清兼及本邦儒先無慮數十家而於杜氏注辯駁討論不遺餘力至其護杜氏者僅存十一於千百讀者或將有好駁杜氏之譏也雖然余謂左氏一書非經非傳作一家文集看自可耳非復孔孟諸書可信可敬之類也然則至如其解左氏者亦其支流餘裔已當辯其非何暇顧慮哉要在使文意易通豈欲與區區左僻之人爭分寸於文字之末哉且舉全書而論之其從杜氏者固什七八但其從者不錄焉耳我寧爲諤諤之士不欲爲諾諾之臣矣讀者其諒旃

一 前人諸說鄙意所取而校本既登錄者不復載之避其煩也有標其意於上欄者有不標者讀者亦應知之

一 我邦儒先所著中井氏左氏雕題刊行既久人或雖有排擊一二小疵者然高眼卓見頗破大荒後儒終不能不據之也古賀氏左氏探蹟博引廣證而別出一機軸說皆適人意增島氏讀左筆記專蒐輯舊說亦時有奇說焉二書皆未上梨棗俱爲布有之珍余得之鄉先輩頗摘錄之但筆記缺自囊元年至二十七年一卷無由補焉期其完全不異俟河清故姑闕之不復遺憾哉安井氏左傳輯釋說頗爲精微但以左氏爲左邱明信傳如神且有強壓前賢之癖則爲短耳其他至如宇野氏左傳考岡氏鱷伊藤氏章句文字等亦徒孔疏餘唾清儒糟粕而已而閒非無一二佳說故時登錄之以資博洽

一 編內錄外人皆揭其姓名錄本邦人每卷首必一揭其姓與號自餘則揭其號耳不徒避其煩亦春秋尊內抑外之意也但宇野

霞亭特書字鼎與外人同體例蓋我邦有宇野氏無宇氏而彼自稱爲宇是護園餘習所謂不善變者故書法如此亦是春秋貶杞之意山井氏考文余所藏係清人阮元輩所校刻書中不錄其號故不得已揭其名讀者勿深罪

一清儒學皆主考證故如臧琳王引之焦循之徒好誇其該博其說動至數葉之多如古賀增嶋安井三家亦其說或過長斯編僅餘上層一欄至其不得已則雖有波及下欄或本文行間者要之紙幅有限不得詳登錄之故儘彙括之雖云頗用意或有害原文之意者亦不可計也余他日欲別編一書悉載前人之說更加鄙說論其是非讀者其待焉以訂此書之踈

一前人著作皆好欲使說出于己而往往有與他人所說如合符節者蓋出暗合決非踏襲者雖然後人讀之或有不慊之想焉余謂前人著作如此之多且精何必待容後生之喙哉故斯編雖係鄙考苟於前人書中已發之則特揭其名矣雖云緣學問淺薄腹笥無所出也其或庶乎免班史摸倣之譏歟

一編內一二係鄙考者多揭賤名閒或用一案字者亦復有焉至前人說尾辯其是非之類用一案字者頗多蓋避其煩也

一左氏爲戰國人而非仲尼所稱左邱明傳末既略紀三晉事是其第一確據其他傳中可以爲證者不暇倒指矣以左氏爲左邱明蓋出于馬遷謬說相續以及輓近牢不可破也雖然朱紫陽之好古而既辯其妄明郝敬著春秋非左二卷駁擊頗痛快清焦循所著左傳補疏直論杜預注左傳以佞司馬氏兼辯左氏之妄亦自豁吾人之胸學者俱不可不讀也其他陸粲惠棟及我邦儒先中井古賀諸家亦各有說焉如孔廣森劉逢祿之徒主張公羊而直斥左氏則却不免爲僻說也要之三傳各有長而終不得不據左氏但大信之則不可大斥之亦不可爲正論也矣

一前輩名氏翻刻馮氏左繡其例言云左氏非夫子所稱左邱明也唐啖助始立說而文宗恠而不用斥而爲穿鑿家弟子趙匡亦卒不得暢其說韓子贈盧同有詩春秋三傳束高閣獨抱遺經窮終始及宋程朱固有定說歐陽修鄭樵呂大圭以至郝敬顧炎武諸人其意大同小異耳又云近世如林雲銘金聖歎儲同人馮天閑諸人皆以具一隻眼洞見千古自詡多所著而恬然不疑左氏非夫子所稱左邱明是乃千古之疑案是先得我心者故附載于此明治十四年二月識于浪華寓居南州外史近藤元粹

(句返)

春秋左氏傳校本三十卷 明治十六年大阪修道館排印本

南摩綱紀「增補春秋左氏傳校本序」

增補春秋左氏傳校本序

春秋一經而已而爲之傳者有左氏有公羊氏有穀梁氏其說互有異同劉漢以後有專治左氏或公羊氏或穀梁氏者各爲一家之學其註解亦各自異本朝文武天皇大寶元年定大學國學之制易詩三禮及春秋左氏傳各爲一經而左氏傳用服虔杜預註公穀二傳則不取之其取之則始於桓武天皇十七年式部省奏曰教授正業取左傳而公穀二傳棄而不取是以古來學者未習其業寶龜七年遣唐使伊與部連家守讀習而還竊檢唐令詩書易三傳各爲一經立之學官望請公穀二傳各準小經永聽講授以弘學業詔許之至仁明天皇承和十一年諸儒言當代讀公羊傳者惟善道眞貞耳恐斯學墜焉乃命講之大學眞貞以三傳三禮爲業承和十一年諸儒言當代讀公羊傳者惟善道眞貞耳恐斯學墜焉乃命講之大學眞貞以三傳三體爲業承和十一年距桓武天皇十七年僅四十七年而二傳之衰已如此則公穀二傳之行於本朝不若左傳之久且盛也其後時勢變遷大學國學有名而無實繼之以干戈文學掃地迨德川氏起大興學教自經史至諸子百家人人爭治之而獨於公穀二傳則治之者甚鮮矣豈左氏之傳獨其事詳實其文簡雅以致然乎以余觀之三傳互有得失何獨取左氏而棄公穀二氏哉頃山田榮造大開修道館於浪華印刷和漢諸書以益海內學徒遂囑余友豐島洞齋編增補春秋左氏傳校本梓行於世其書以左傳爲本插公穀二傳於經文閒註解則以杜預爲本雜揭諸家說於欄頭更加己說補不足刻已成謁余序余曰三傳序古今諸先輩既悉焉何俟後學余輩言然此書之行也復桓武天皇三傳並講之舊合劉漢以後各家專治之偏而博證旁通得以詳其事實文章之得失則有補益於學春秋者不少小矣況於雜揭諸說以解難文疑義乎余焉得不一言以贊之是爲序明治十六年七月東京大學教授南摩綱紀撰泊堂愿書（句）

呂東萊先生左氏博議十二卷 元祿十三年跋刊京都永原屋孫兵衛等後印本

伊藤長胤「書東萊先生博議後」

書東萊先生博議後

傳春秋者三家而左氏最純無公穀歇後之失然其是非不能無詭乎聖人則不能無待乎後賢之折衷此呂子之所以不得已於議也後之讀者或議其過於刻或嫌其傷於巧或咎其□於冗何也鋪敘富麗則疑乎冗締構密緻則類乎巧辨究覈實則似乎刻宜其議之嫌之咎之也然文之弊常緩故其詞貴覈實文之疵常拙故其製貴密緻文之病常枯故其體貴鋪敘勢也法也蓋呂子之作專爲舉業設則難以註疏家繩墨裁之今所刊者專係黃之案校本陶瞿二序及凡例評注釋義參取陶稚圭本其考異疑誤今所新附者別加小圈云元祿庚辰之春伊藤長胤原臧謹書（句返送縱）

音註全文春秋括例始末左傳句讀直解七十卷 寬政五年刊大坂志多森善兵衛等刊本

奧田元繼「左傳評林序（版心）」又跋

左傳評林本朝未及刊布實爲藝林欠事故予插架善本不敢自祕用而授之剗剗公於同好以棟氏自謂較昔所輯史漢董董苦心予元繼於是乎不揆昧憊纂脩先儒微言論述之散見于羣籍者以繼以棟氏躡於百有餘年後然證據不晰最爲悶濇因各評之首詳錄某書某人間所竊附管窺者按字上下別加「」不敢掠古人之美以要譽也博雅君子教督其不逮更貺規言爲幸矣林堯叟直解七十卷大要斟酌於杜氏之意益其所未逮補其所未備章章句句反覆丁寧甚便初學考索焉唯恨明清貢本不多見矣故坊間舊刻字畫舛漏不可勝指近日購得鍾人傑校本暨申瑤泉增補合注魏永叔林注批點等兼讐訂定遂歸至正而止庶無復弊耳杜預序善舒筆削大意而經傳之全體所自可類推矣故講此書者必先宜研覈焉孔疏林解雖具美然亦在乾隆中方廷珪文選集成載此序不無所發明不忍捨之因附之上層使覽者無遺憾矣元繼識（句返送縱）

昔孔聖因魯史以作春秋誠萬世不刊禮典極宇宙罔墜也其後有公穀焉有左氏焉各傳所聞以羽翼經義矣雖持論互有得失然要其淵源皆自聖門諸弟子無敢私竊一說者廼所以尊經也大抵公穀主發義左氏兼長紀事紀事之體援古爲鵠依例示法臻其辭令之妙則有衍爲數百言者有縮不過數字者節節照應處處融通故世儒或以爲失之誣矣予夙校此書費多年苦心每論國成敗事臧否輒如身履其時然猶至禮樂兵賦喪葬之纖悉古今之所聚訟者欲會衆說而要之規矩焉亦難矣夫於是乎本凌稚隆評林續輯程胡子暨明清諸賢之論尤當於實理者三子餘條冀以致經之蘊焉然不敢定其爲孰是者信以傳信疑以傳疑蓋其慎也予常慨焉以愧無芥許功業表見乎世時適撰此書集厥大成垂之久遠亦聊所以仰文明之治獎來學之心矣乎日本寬政五年癸丑秋七月七日識于浪華拙古堂後學播州奧田元繼（句）

音點春秋左傳詳節句解校本三十五卷 明治十六年岐阜岡安慶介刊本

野村煥「跋」

跋

春秋左氏傳注解行于世者不尠而杜元凱注解林堯叟句解其表表者頃者書肆岡安主人攜宋魯齋朱申詳節句解來示余乃取而見之就傳文中摘其大要節注句釋明白通曉與杜氏林氏相爲表裏間又付議論補左氏之缺實爲後學之津梁會清人陳鴻誥曼壽來處吾垣城示之曼壽曰此書吾邦所不多見贊稱以爲善本但歷年之久版頗漫滅以爲遺憾耳主人將謀翻刻請乎校正乎謀之門人河相春等春等奮任其責乃相共校讐以公於世但余才膚學淺不能無紕繆質之於大方君子云明治十五年九月上浣美濃藤陰野村煥 (白文)

春秋集傳大全三十七卷 官版京都吉文字屋庄右衛門後印本

林信勝跋

余嘗點春秋胡氏傳以成訓解而已羅浮山人 (白文)

左傳附注五卷 寬政十一年江戶西村源六刊本 英平吉後印本

山本信有「春秋左氏傳附註序」 奥村眷猷「跋(版心)」

春秋左氏傳附註序

北山山本信有撰儒家治左氏春秋學者周季有吳期鐸椒虞卿荀況西漢有張蒼賈誼尹咸張敞劉欽東漢有陳元延篤彭汪孔奇孔嘉鄭興鄭衆賈徽賈逵馬融服虔謝該穎容許淑魏有王朗王肅董邁吳有張昭各作詁訓義解今皆不傳也晉杜元凱以好左傳癖偏集諸家解至其肯綮據左氏釋左氏是所以眊然輒解異夫諸家襍取公羊穀梁強通之故能傳于今而不與諸家同佚亡蓋有故矣然以其特卓乎後之難駁者亦不少南北時崔靈恩著左氏條義申服難杜樂遜著春秋序義通賈服發杜氏違衛冀精服氏學難杜六十三事又陳王元規傳云自梁氏諸儒相傳爲左氏學者皆以賈逵服虔之義難駁杜預凡一百八十條蓋駁者愈多行愈盛矣豈非其駁失當乎將依勢令然耶唐初孔穎達奉勅撰正義巧善回護杜氏擯斥衆異使斯學全然歸于一師先是沈文阿蘇寬劉炫各爲義疏沈一意奉杜然其說極疎蘇旁攻賈服劉性矜伐好誹毀故拾杜氏失一百五十餘條欲奪而先焉無如人不許何是後趙宋陳傅良著左氏章指亦多異乎杜至元黃楚望說左氏特以杜注爲主授其學于東山趙汭奉師說作左氏補注亦以杜爲主杜所未足則旁考之陳而補其缺錢虞山以爲高出宋元諸儒之上是書陸粲左傳附注之藍本也附注五卷前三卷駁正杜註第四卷駁正孔疏第五卷駁正陸德明音義不翅若他難駁杜解而止爲左氏學者其可不讀焉乎然此書甚少人多不見或有不知世有此書者吾門奧村子產世以儒爲業得吾學該博好古而研究□日家藏此書出授劓劓氏以博此傳坊閒嘗鐫行明傳遜左傳注解辨誤辨誤之爲書夤緣附註別無所發明偶至其所自爲說淺陋甚矣卷末附刻其春秋古器圖圖舛謬一如聶崇儀三禮圖其卒誤後學不少若清顧炎武補正惠棟補注朱鶴齡補錄沈彤小疏等皆瑣瑣小家要之不能出附注之範圍嗟呼夫讀春秋者宜憑左氏傳讀傳宜憑杜注讀注宜憑孔疏陸音欲考核註疏之當否宜憑附注然後宜知子產之有功於斯學而惠後學之義焉寬政己未十一月辛酉 (白文)

左傳附注明吳郡陸貞山之所著也其爲書也援證精博行文簡明裨益乎後學不少矣後儒雖別成家有所論著者率不得弁髦陸氏至若博士遜著辨誤顧炎武述補正亦是暗中摸索庸陋荒昧無所發明因此標竊者十五蓋杜征南之注比之於賈逵服虔輩不啻□壤異耳雖然人以不同聞見異趣是非相易要之明月之珠夜光之璧尚猶不能無瑕類雖杜注一二豈無譌謬哉然則陸氏之作此書於千載之下雖曰爲元凱之忠臣不亦可哉眷猷家藏是書舊矣半屬蠹蝕今也得數本而讐校之刻于家塾以公于同好云寬政己未夏五月武藏奧村眷猷題并敬義錄（白文）

春秋左傳屬事二十卷 文化九年大坂加賀屋彌助等修本

林信言「刻春秋左傳屬事序」

刻春秋左傳屬事序

夫學者博覽載籍而精其義明于古今而知于理亂者學者之先務也門人菊池武愼於左傳屬事訓點之翻刻之研究之力鑿飫之功有年于此一日請益之閒請余序蓋此書也吳郡傅士凱之所纂而王弼州紱其始潘松陵紱其終詳哉言也則我又何贅言哉雖然武愼之志不其爲己唯言此書之有益於初學也厚好而不怠則杜當陽之癖千載一致也而公之世閒其癖以大也因以一言而稱彼之務明于古今知于理亂之功而已是爲序寶曆壬午之春國子祭酒朝散大夫林信言子恭父識 (句)

春秋左氏傳註解辯誤二卷 寬政六年大坂河內屋總兵衛等再刊本

皆川愿「再刻左傳辨誤序」

再刻左傳辨誤序

余自少讀左傳杜預注每遇其說與私意不合者輒筆之簡末積數年而所筆頗多後與傅氏辨誤顧氏補正考之同異於是二書之文每閱其條竝皆手爲施之句讀以自導吾心目之審詳戊申歲京城大災余藏書幸皆免於禍而辨誤版在京者半歸烏有今茲大阪書肆某收其燬餘而謀再刻聞我本之有句讀請以就鐫余心因欲以鄙見所書附刻而書肆乃欲余書之別行且請爲其再刻之敘夫傅氏素崇仰杜者乃至於更其名以志效法之意而其讀傳釋意乃不免有所不相合以標其異見且顧氏又繼辨誤而有補正則是所謂雖百世可知也抑亦非以人心不同如面故而然耶然若以謂左氏之文可隨所見各通其義則是左氏之不能爲其文也則豈通論乎哉要之前儒率皆踈名義昧文理不察象類忽略事情各主意見互相排訐譬如羣獼猴之相從迭指其尻而哈笑爾苟不精名義明文理審象類盡事情恐其終難乎得作者之意矣雖然傅氏之所辨頗亦極考覈其可採者甚多若謂不爲杜氏忠臣於千載之下則又豈通論乎哉寬政癸丑初秋三日平安皆川愿撰并書 (句)

春秋非左二卷 明和三年京都河南四郎右衛門等刊本

皆川愿「刻春秋非左序」

刻春秋非左序

春秋非左二卷明郝敬所著本附載其山草集中乙酉冬京人有嘉其說者抽出而刻之請余校焉余爲校閱數日卒業按郝敬字仲輿萬曆閒仕爲禮科給事中即所稱京山先生者是也所著有九經解余未能得而覽之而其山草集中別又有談經者頗亦具其春秋之說蓋其大略曰春秋無例但據史所記之事有慨於心者提而書之公道難揜是非自見時或創新義如正月稱王王稱天鄭棄其師天王狩于河陽之類與凡書或不出隨宜化裁非爲例也其餘多因舊史彙括成文蓋經特標其要領而顛末具在舊史原非棄舊史不用也後人以雕鑿之辭補綴□籍□以胸臆妄起凡例後世誤爲左丘明一切憑之□而不合牽強附會聖人之情遂晦矣春秋本不獎霸而左乃尊晉春秋本不夷於九州之地而三傳乃於秦楚吳越盡翦爲夷狄故舍三傳而知春秋不可一日無者始爲眞知春秋觀此則知非左之所言亦□之其緒餘者爾大抵世謂左氏爲丘明者始自司馬遷而其實乃經傳之旨往往背馳豈謂之曾受於夫子乎杜預集解猶糾正傳文之失六事則其非夫子同時之人者亦已可以知矣是以自唐啖助趙匡痛訾之以爲秦後偽書乃有虞□秦庶長之疑矣宋儒由此研摩乃諸家春秋之學起焉明儒復承而擴之則其卒有郝氏而興乎其閒者固勢也未足爲奇也已但專斥左氏特成一書者何休膏肓以還其唯此而已則郝氏之有功於春秋也豈又謂之淺鮮耶今我邦人士讀書率多以左氏爲標的而善治左氏輒足名家矣雖乃宿著之儒亦往往信左之誇張眩左之浮□若夫能去三傳之蔽惑而直究乎夫子筆削之眞旨則數千百人未嘗夢見也斯尤可歎也顧左氏之言其以此一破則來者必有興者乎若夫郝氏春秋之說君子必有取捨焉丙戌孟夏望平安皆川愿書（白文）

左傳古字奇字音釋一卷 延享三年江戸前川六左衛門刊本

後藤世鈞「左傳古字奇字音釋跋」

左傳古字奇字音釋跋

自古癖左傳者莫過杜征南而癖征南者莫過明傳遜氏傳雅以征南資兼文武實深欣慕焉甚至自更字曰士凱嘗編左傳屬事及註解辯誤自謂千載之下爲杜氏忠臣耳別鈔出傳中所載古字轉聲假借通用者奇字難讀者音殊義別者爲之音釋可謂左氏忠臣何唯於杜氏已也我國左傳之行尚矣其註解獨宗杜氏而讀者苦其聲音難臆孔疏攙入陸音非不備然分附各處不便考閱近得傅氏書讀之而愛其音釋簡且便因校訂之或疑者質諸字書又移其卷末補遺若干字以出各部下遂付梓人以公同志其屬事辯誤俟佗日刊矣延享丙寅六月望讚岐後藤世鈞撰（白文）

春秋左氏捷覽一卷 安永九年大坂田原平兵衛等刊本

奧田元繼「跋（版心）」

左傳文上下二百四十有餘年事辭互見醇雅竝具取彼兼此由後曉前貫串照應非胸圓熟全文靡少得其意也杜氏註之亦簡明亡儷矣往昔唐王維畫名冠于古今曾寫垂石隱泉云筆斷氣不斷形斷意不斷若神龍雲隱首尾相連予謂文辭之於法亦然故能讀左傳者詳文之緩急主意眼目隔承插入等爲先焉不識此訣則莫由窺一斑嘗一嚮況意外之意味外之味乎諱善哉此書雖巾箱小冊顯便于考左傳也章句段段節取類分瞭然于目下也則如庖丁之經肯綮矣近日有譯而傳之者就予乞點定因姑據所視以題簡末云安永己亥冬十二月浪華奧田元繼撰（句）

左傳經世鈔正文三卷 明治十八年山梨徽典館藏版活字印本

廣瀨範治「左傳經世鈔正文序」

左傳經世鈔正文序

余在西京獲左傳經世鈔以爲古史之足以經世者莫善於此將翻刻之不果今茲在甲府講本傳於徽典館每周一講每講一時非費數歲不能卒業因思方今學則多科株守一經不如博涉精究訓詁不如疏通如本傳亦不必全部就簡約者通其大意則可以長識見可以供世用乃膳原鈔正文活字印刷以便初學初學之路在諳行文知敘事故以熟讀爲主如諸家論評雖有卓見校引浩繁非初學所先故不載之魏氏以爲御天下之變備於是編蓋人之在世事故紛錯悲歡寵辱之至相變於咄嗟之間則所以應之方不可不豫講究之也善讀是鈔者其立志也貞且正而運用之活適其機宜則忠孝之美亦隨而□徽典之教自在其中矣奚翅經天下之變耶明治十五年歲次壬午冬十一月南豐青邨廣瀨範撰并書 (句)

左繡三十卷 嘉永七年刊大坂梅原龜七後印本

貫名包「翻刻左繡紋」又「例言」又「引書目」

翻刻左繡紋

左傳非邱明所作也唐宋已來論之鍾惺於文定標之左氏文章也非經傳也朱軾於此書論之苞謂夫子修魯史春秋以爲千萬世史家法也後之爲史者固將取法於斯奉以周旋也然春秋之爲書俟後賢傳說疏解尚且左支右吾不易明晰如是則後人何從措手古之所稱以爲良史者不以不懼不諂不失事實耶如果如諸傳所說義例拘攣典要詭祕俾人不易解乎則無乃史官無其人而職或闕乎夫子以王法寓魯史其文則史游夏之徒不能贊一辭其義炳焉以魯史爲難解者諸傳家祇以攬之爾夫子如慮後世之茫然而親授之乎慈舍游夏之徒附之別人之有如果授之邱明乎則公羊穀梁豈敢於吾師之師所親授立異議之有夫子之不授邱明也昭焉謬以左氏爲邱明者自漢時司馬遷劉歆班固以至晉杜預因癖作解承謬護訛竭力闡思其解之精詳明辨衆家所不及乃後之學者亦并其謬而奉之焉爾左氏既不可解經因并二傳而不用獨取胡傳而胡氏亦不得舍三傳而別成傳則是并四傳鈞雖是謬各自以爲經傳矣其不可以解經也審矣而今此專斥左氏者其他不待言也抑以左氏爲邱明爲夫子親授則孰不尸而祝之今明知三傳非夫子親授猶且各宗而戴之至寧乖經不乖傳信傳不信經陷誣聖之罪而不覺是誠何心哉是誠何心哉今如崇左氏之文章其義則繡固竭於斯矣嘉永七年甲寅之歲仲春之月阿波貫名苞題於平安城東錦織村廬（句返）

例言

一翻刻左繡雜插累輯如此者何也木係苞家塾課本年來與生徒講肄之間隨得隨錄初無詮次積久增多殆無餘白乃與繡本意不相副者亦有之然書肆得本漫貪其多將併刻之既而知之索予一校今因準繡整頓行閒字數則填溢不能容不得已割愛

亦有之語本不必錄而因填空白贅者亦有之

一新加者●下必記出處鄭康成惠此是惠棟補注所引鄭玄也他倣此●下無出處者屬鄙見如繡中典故偶爲初學拈出者●低一字無餘地則已

一馮氏大率湊合諸家評及細閱則針縫隨見輒各歸其舊曰其字句以上某氏評某字句以下某氏評非欲以盡復舊貫又非敢許之也庶見馮氏亦猶用古賢集注意矣

一繡意專論文不敢論及經崇經也今於經本文不敢施句讀圈發者亦循其意一所采於朱批本者最多其偶論及諸傳異同經傳當否者有之雖非繡之本意人各有所取仍廁錄之不能犁然亦有之但於繡則不敢搖動一字

一左氏非夫子所稱邱明也唐啖助始立說而文宗恠而不用斥而爲穿鑿家弟子趙匡亦卒不得暢其說韓子贈廬仝有詩春秋三傳束高閣獨抱遺經窮終始及宋程朱固有定說歐陽修鄭樵呂大圭以至郝敬顧炎武諸人其意大同小異耳

一以左氏爲邱明以爲夫子所稱者漢馬遷以後相續及輓近如林雲銘金聖歎儲同人馮天閑諸人皆以具一隻眼洞見千古自詡多所者而恬然不疑是乃千古之疑案

一古人以左氏爲相斲書爲刑書爲禮書爲教戒之書乃今觀其一事各貫穿其始末其善惡報應禍福倚伏本未必具有條理有案有斷以此爲自省之書則不但文章之鼻祖可以爲陰隲願體勸懲書部之源宗

一古人於評林疏釋之類多用省略字者以從簡便耳而非皆悉俗體已如從爲从事爲□與爲予類古字也離爲■篤簡筆从艸類是所謂書家字也此類尚多他如職取過■實■舊旧靈灵猶鄭□■難觀勸歎■■■當當黨歐歐義■賢■雙双學■舉筆書□變變巒■賓■竊窃讀讀統統體體聲聲劉劉圖■會會獻獻歸歸皈遷勞■雖■衆■廟廟异异與異通通之類並依舊不改不必正字畫者不但惜工抑且有說蓋古今字體之變之多一字或至十數字今將盡从楷正尤非易易視如千祿書五經文字九經字體亦可見且久遠所用來則亦是字也如謂其書不正而不能讀則不能讀者之愧也乃讀此等書亦初學之學也（又有杜撰字聊且字之類今不及辨）

一予已喜於卒舊業不以老僮辭而書閒應接亦不可以拒絕寒宵篝灯眼華淒耿旁無將伯矻矻自苦極覺多謬至其穿鑿傳會之謂尤所自甘厭見之者一筆勾可矣甲寅春二月貫名苞識 (句返)

- (リ) 42102) ■ (カ) 38733) ■ (ク) 7123) ■ (テイ) 策 1107) ■ (ナン) 策 1109) ■ (カ)
ン 策 1106) ■ (カン) 策 1105) ■ (カ) 策 1106) ■ (ギ) 策 1105) ■ (ケン) 2577) ■ (ガ)
ク 13453) ■ (無字) ■ (無字) ■ (ヒ) 策 1109) ■ (ズ) 策 1108) ■ (ロウ) 策 1107) ■
(スイ) 策 1108) ■ (無字)

引書目

左氏傳解詁 (漢服虔) 春秋五論 (宋呂大圭) 六經輿論 (鄭漁仲) 春秋臣傳 (王當) 困學紀聞集証 (王應麟) 左氏傳說 (呂祖謙) 春秋王霸列國世紀編 (李琪) 東萊博義 (呂祖謙) 春秋或問 (呂大圭) 春秋意林 (劉公是) 春秋左傳評苑 (牛申) 春秋集注 (張合) 春秋或問 (元程端學) 春秋本義 (程端學) 春秋諸傳會通 (李廉) 春秋左翼 (明王震) 春秋傳注解辨誤 (傅遜) 春秋左傳補注 (趙沅) 左傳附注 (陸燾) 春秋輯傳 (王樵) 左傳事緯 (馬驥) 春秋翼附 (黃世憲) 左傳文定 (孫鑛評選鍾惺參訂) 五經餘聞 (陳智錫) 古文奇賞 (陳仁錫) 千百年眼 (張燧) 山曉閣左傳選 (孫琮以下清人) 春秋三傳異同考 (吳陳琰) 春秋鈔 (朱軾) 春秋左氏古經 (段玉裁) 春秋注疏校勘記 (阮元皇清經解十三經校勘記) 惜抱軒筆記 (姚鼐) 左氏春秋聚 (唐述山房遺稿) 易堂問目 (吳鼎) 古文觀止 (吳楚材) 古文翼 (唐德宜) 春秋四家五傳 (張秀初) 春秋左氏傳杜林匯參 (周正思) 古文析義 (林雲銘) 重訂批點春秋左傳詳節句解 (魏邦達) 義門讀書記 (何焯) 朱批左傳 (姚培謙) 湛園札記 (姜宸英) 春秋紀事本末 (李國華) 春秋毛傳 (毛龜齡) 儲同人文集 (儲欣)

他如西疇春秋麟旨明微麟經指月春秋單合析義諸書之類或偏於胡傳不與他傳相通或純於經不與傳義相屬或主辦傳例

異同不與左氏相關發者概而不登錄或雖隻字之義理半句之異同而有不可忽者采錄以備他日參甄苞又識
茲丙辰孟陬偶得一本題曰左傳詳解自其序文迄列國圖說十二年位序次原注評論悉與文定無二惟無列國圖而序文則
爲史官陳仁錫每卷爲長洲明卿陳仁錫評選潭陽開侯劉肇慶點定爲十卷然陳鍾時已同論選著述之富亦頗同固非白晝剽
竊者則其一出於賈人射利之爲可知矣余本隨得隨取非有所取舍而爾而今不能遽定其是非姑錄此以俟能辨二水者云苞
重識（句返）

新刊公毅白文 寬文八年荒川宗長刊本 植村藤右衛門後印本

林恕「新刊公毅白文序」 公羊林恕（弘文學士）跋 毅梁林恕跋

新刊公毅白文序

春秋之有三傳如鼎足之峙左詳於事公毅精於義共出自聖門而幸免秦火公毅盛于西京左氏興于東都同立學官名家專門各有所取不能相捨焉左氏逐世而顯公毅稍微然傳授不絕昔本朝學寮之盛明經紀傳之兩流講左傳者不爲不多加倭訓以教徒弟故家家無不讀焉人人無不習焉曾聞桓武帝朝伊與部家守入唐受公毅說而歸興一家之學爾來都良香等諸儒通其義者歷世不乏宇縣左僕射之好經學也三傳交講無闕然則本朝亦不廢公毅者可知焉其後猶有讀左氏者而公毅寥寥不聞豈不嘆息哉我先考羅山先生暇日始加訓點於公毅二傳然深藏巾笥不妄示人偶有懇求寫之者又祕不廣行焉嗚呼公毅之文古而簡約在初學則不易分句讀豈輒會得其義哉余竊痛之故使一二門生寫家本訓點於白文乃附劄劄氏播于世若夫由是聊分句讀而據註疏以解文義而後參考左氏以辨其異同而後潛心於程胡之傳知其折衷其爲窺聖門藩籬之一路乎然則先考惠末徒之意不空而有補於起聖學乎近世明儒說春秋者往往有之而其中非無新奇之驚耳者然多是入室操戈者也本根之基枝葉之分不可不思焉噫左氏讀而不廢則公毅亦果不可廢焉是余所以不祕家本也寬文戊申春三月國史館提舉弘文院學士林恕之道甫序（返送縱）

公羊傳聞本朝昔曾有讀之者然未見其點本我先考羅山叟加之訓點家藏年久今使一門生就元本寫其點於白文而爲副本者也他日可再考焉寬文丁未秋弘文學士（白文）

頭考羅山先生曾加訓點於毅梁傳此傳點本未聞先於此者我受讀之藏巾笥有年而令一門生寫其點於白文以爲副本頃聞

再校之然猶恐有風葉之拂殘戊申孟春林學士恕記
(白文)

春秋四傳三十八卷 寬文四年野田庄右衛門刊本

松永昌易跋

右春秋四傳者以胡氏傳爲本註以公羊穀梁左氏傳爲附註矣故今考證評註以胡氏爲全體以三傳爲大用胡傳以陳哲說公羊以何休說穀梁以范寧說左氏傳以林唐翁說爲引證者也春秋館教授昌易書焉（白文）

孝經類

孝經集覽 安永四年奚塾藏版刊本

山本信有「孝經集覽序」 太宰純「古文孝經序」

孝經集覽序

孝者百行之首道德之典所以人之爲人孝爲職之魁然孝之不易若瞿塘爾不知艷預之出沒欲布帆無恙得邪夫子爲之狀而陳如牛如象如馬如■之序垂後世名曰孝經孝經之爲書語上非幽玄之不可及語下無可厭譬諸江海人飲各滿其量故自人主以下逮吾儕小人遊學者必尊信孝經不敢舍而求佗者信有以哉逮茲炎漢孝經在二本一河閒王所獻隸書也一所出孔壁科斗文也學者各徇所受列素粲於古文置酒肉於今文夫先王之遺書文有今古也何啻孝經耳也哉先王之遺書文有今古既不啻孝經則何論佗經之今古者眇無聞相爭錙銖於此而數經匠石運斧之手栴屑益多而繩矩彌不定抑得無說乎孝經者六經之大本論語之輓軛所以格五典經綸邦廈不過推而擴之耳若謬爽一字風馬千里滔滔焉幾多岐亡厥踪跡有後世君子乘槎而窮河源厥辜在所歸蓋先輩慎焉也慎則慎也然厥識不足於夫子曰信而好古尚有閒孝經者夫子所口授子輿氏而子思子春之徒聞斯記諸也爾來嘗割據之艱歷秦火之厄僅存矣假令之出于一手勿差錯金木者在其閒耶後儒大抵取諸厥胸臆斷今古之臧否故桓桓名厦魚貫不見弄於韓氏兒者亡幾旨哉宋景濂曰古今文所異者特語微有不同稽其文誼初無絕相遠者諸儒於經之大旨未見有所發揮而獨斷斷然致其紛紜抑亦未矣故予於今古不左袒一於此見其可乙而乙之述所以乙之意著乙一篇二三諸君子看之欲刊諸塾上予笑曰古人有言俟年六十而后著書亦不晚豈著書之難也哉恐識未足神未定也

信有今茲二十有三歲宜納而不出之秋也舍諸何厚顏受佩觿之謗時母親在步障後聞之喚予曰噫兒過矣自知厥非也雖聖難之矧女小兒乎乙自以爲非歟爲非則已矣不非則已不知其非也不知其非而忌人質責之何其陋矣不知女亦將爲一上梓材二難更其說而遂其非之俗儒熊歟若陰揜其非陽飾其美非吾志曰唯出而謀諸君子曰孝經固非俟註說喋喋便通者彼遙望夫子之牆於千里外而目未睹俎豆之殷是甲非乙何異於敲鼓而求迷子然註說亦勿起予者乎請竝舉諸家註解俾讀者各擇其可否奈何僉曰諾竟在此役經文輒繇古文用厥古也今文所無傍施黑圈子刊語所刊傍施白圈子以便易見也上方標故事若干者聊省寒士閱市之勉耳不悉抱携之養不與孝經也輯成而名以集覽也竊効守山侯論語集覽之例云安永三年甲午孟冬北山山本信有喜六（白文）

■ (ホク 3475)

古文孝經序

先王之道莫大於孝仲尼之教莫先於孝自六經而下無非孔氏遺書其有出孝經之右者乎何以言之天下無有無父母之人故也孝經有二本其一河閒王所得十八章者謂之今文其一魯共王壞孔壁所得竹牒科斗文二十二章者孔安國所爲作傳謂之古文安國曰今文十八章文字多誤又曰河閒王所上雖多誤然以先出之故諸國往往有之漢先帝發詔稱其辭者皆言傳曰其實今文孝經也由是觀之今文孝經之行也已久矣古文者雖安國爲之訓傳蓋當時未之行也迨乎漢季馬季長擬作忠經十八章倣今文孝經也鄭康成注孝經亦其今文者也自是厥後今文孝經之行彌盛而古文亦與之俱行至唐明皇親注孝經雖兼取孔鄭二家之說然其經則用今文取其闕闕門章也於是古文孝經遂廢不行至宋邢昺依明皇御注作正義然後孝經唯御注本行于世鄭注遂亡古文孝經亦亡其傳文而僅存其經文宋人尊信孝經者莫若司馬溫公然特得古文本經而讀之耳不睹孔傳也自二程至朱熹氏皆疑孝經以爲後人所擬作朱子又妄改易本經篇章著爲經一章傳十四章且刪去其本文二百餘字孔子曰信而好古若朱子者可謂拂矣自是以來學朱氏者舉不信孝經塾師不以爲教至令童子輩目弗見孝經悲夫先王之道莫大

於孝仲尼之教莫先於孝夫子不曰乎吾志在春秋行在孝經是以後世人主不讀書則已苟讀書者必自孝經始況下焉者乎今朱氏之徒不讀孝經而學心法其不爲浮屠之歸者幾希夫古書之亡于中夏而存于我日本者頗多宋歐陽子嘗作詩稱逸書百篇今尚存昔僧裔然適宋獻鄭注孝經一本於太宗司馬君實等得之大喜云今去其世七百有餘年古書之散逸者亦不少而孔傳古文孝經全然尚存于我日本豈不異哉予嘗試檢其書古人所引孔安國孝經傳者及明皇御注之文邢昺以爲依孔傳者畢有特有一二字不同耳得非傳寫之互訛乎先儒多疑孔傳以爲後人僞造者予獨以爲非經曰身體髮膚受之父母弗敢毀傷孝之始也諸家解皆以爲孝子不得以凡人事及過失毀傷其身體孔傳乃以爲刑傷蓋三代之刑有剕刑及宮非傷膚乎以此觀之孔傳尤有所當也王仲任亦嘗誦是經文而曰孝者怕入刑辟刻畫身體毀傷髮膚少德泊行不戒慎之所致也合而觀之可以見古訓焉如從諸家說則忠臣赴君難者不避水火兵刃節婦有斷髮截鼻者彼皆爲不孝矣是說不通也余故曰孔傳者安國所作無疑也或曰尚書之文奇古難讀安國傳之其言甚簡孝經之文平易安國傳之乃不厭繁文何也曰傳尚書者爲學士大夫也故不盡其說使讀者思而得之傳孝經者爲凡人也故丁寧其言以告諭之此其所以不同也嗚呼夫孝者百行之本萬善之先自天子至庶人所不可以一日廢也夫孝不可以一日廢則孝經亦不可以一日廢也夫自朱氏之學行而孝經久廢于世純常慨焉幸孔壁古文孝經并與安國之傳存于我日本者寧不知珍而寶之哉惟是經國人相傳之久不知歷幾人書寫是以文字訛謬魚魯不辨純既以數本校讐且旁及他書所引若釋氏所稱述苟有足徵者莫不參考十更裘葛乃成定本其經文與宋人所謂古文者亦不全同今不敢從彼改此蓋相承之異未必宋本之是而我本之非也傳中間有不成語雖疑其有誤然諸本皆同無所取正故姑傳疑以俟君子今文唐陸元朗嘗音之古文則否今因依陸氏音例竝音經傳庶乎令讀者不誤其音矣書成而欲刻之家塾則淺田思孝出其橐裝以助費遂趣命工從事予未能爲吾家孝子且爲孔氏忠臣云爾日本享保十六年辛亥十一月壬午大宰純

謹序 (返)

孝經一卷 文政六年跋福山藩刊本

阿部正精（福山藩）跋

西土之文籍逸於彼而存於我者爲不少矣即是皇國一大美事而足以觀守文至厚之化也古文孝經孔傳卽爲其一按此書梁末亡逸而顯於隋當時諸儒以疑劉炫偽撰唐司馬貞從而議之謂近儒欲崇古學妄作此傳假稱孔氏雖然隋代以至盛唐此傳與鄭注竝著令式矣皇國先王通信使於彼文物頗有遵其制者故大寶學令以習孔鄭二家傳注彼及唐玄宗自撰新注以行於世二家始廢而至趙宋時遂又屬亡逸我貞觀時有詔立玄宗注於學官二家亦不充試業然世猶或講習而不廢矣享保中清商來長崎者訪求以歸鮑廷博得而大喜依式雕梓盧文弔序之引用唐代諸書證其爲隋代舊本也吁千年外之書存於皇國傳至今日豈不珍而貴哉無論其爲孔氏之舊與否耳世往往有舊鈔其字體所謂隸古文者數本皆同則增可以見爲開元改字以前之書矣凡古書之傳世者據其字體察知時世如此書最方然但坊間刻本改鈔轉寫以便童蒙讀誦字體無一存舊貫甚至以今文本改換經文其所傳播西土亦是爲之種四庫全書總目排譏此書謂宋元以後所影附之書雖固屬臆斷蓋由不見正本歟林祭酒述齋先生悲其正本遂埋滅以弘安鈔本活字刷印收之於其所輯逸存叢書中字畫悉依舊學者以爲鑿飶也余閱其本自有叢書邊格故不得不換舊裁亦不無遺憾焉弘安鈔本近日歸余插架紙質精堅筆蹟沈澹裝成卷子實爲五百年前之舊本矣於是乎影摸以刻於家但惜原本序文脫簡僅存二行今以一古家所藏元亨中清原良枝校本補繕之以做百納史記之顰耳此舉也欲酬升平文運之化以備考古學者之用若夫充翫奇家之好則余意不敢也文政癸未冬十月阿正精識（白文）

古文孝經一卷 天保六年跋活字印本

山田文靜「翻刻古本序」(活字版孝經附錄)

活字版孝經附錄

翻刻古本序

班掾之史曰孝經者孔子爲曾子陳孝道也夫孝天之經地之義民之行也舉大者言故曰孝經其書曩傳皇國與五經竝立於學官以教天下大寶元年學令曰凡教授正業孝經孔安國鄭玄注天平寶字詔曰令天下家藏孝經一本誦習之貞觀二年制行御注其文曰此閒學令孔鄭二注爲教授正業然其學徒相沿盛行於世者安國之注劉炫之義也若猶敦孔注兼聽試用事載在國史雖中或經亂離孔傳獨存于世者蓋亦有以也其存于世者孰不知之昔者靜少年之時嘗聞活版孝經猶存自爾已來服膺四十年不圖今春獲二通自不堪喜就而校之其內一通最爲先出版後人字旁記古點上層或舉述義經年之久冊子蠹蝕殆難翻閱洵希代寶典也因意物已如此人何不然異日散失不可不謀於是斷意割愛命工督之字體殘缺不可辨者皆依舊本毫無所補翻刻于家傳之子孫以貽後代若好古博雅君子與我同志亦所不隱也天保五年仲冬日(以下非序跋)

天保六年乙未三月日後學信濃山田文靜太古氏謹識 (句返送)

古文孝經一卷 寬政十一年序活字印佚存叢書本

林衡「題古文孝經孔傳後」

題古文孝經孔傳後

古文孝經孔傳坊刻數本余所見古寫本四五種唯弘安二年書本爲最古而又多與坊本異經文往往雜異體字如上作上下作丁始作■終作■之類蓋所謂隸古文者已足利學藏孔傳尚書多用異字而其體亦與此同乃知此本之傳於我蓋在唐開元改定之前也往者山井鼎等撰七經孟子考文獨收尚書異字而不及孝經或未之見耳余故取書本數種參互校訂定爲此本至孔序則刊本皆載之而書本多不載今亦從之孔傳之出於僞托先儒既已論之雖然舊籍之留遺於今日者無幾即其出於僞托要亦千年外物寧可使之終歸淪廢乎己未仲春初七日天瀑識 (白文)

■ (レ) 193) ■ (レ) 19 22729 c.)

孝經一卷 天明元年京都田中市兵衛刊本

清原則賢「序(版心)」 清原宣條「序(版心)」 赤松鴻「跋(版心)」

古文孝經者孔氏之遺策而安國之訓傳也學者必先讀之所以立教本也余家世宗古學此書亦傳之久矣嚮門生某請我先予以梓行恨會先子病篤不及再訂余自幼從同宗佩蘭先生受業每歎此經之多訛而懼覽者疑惑今也先生再考訂以授梓闕誤已正大義粲然余甚說之謹題其首天明辛丑年冬十月少納言兼侍從博士清原朝臣則賢 (白文)

古文孝經行于世久矣我家所藏與世所傳文字有異同焉夫孝經漢以來已有二本其一今文十八章河間王所得者其一古文二十二章孔壁所得者今文漢有鄭註唐有御註我先人不取焉蓋以今文不存乎家也我家業儒已六百餘年祖先所見不及宋朝朱氏刊誤之說古文者實夫子之裔安國所傳註而無閒然焉享保中某生請鄙宗故三品保文刻以公于世保文當時疾病不能詳校無幾逝矣條不佞欲繼其志更就家本頗有所校正乃以授梓豈敢他本之非而家本之是云乎欲使讀者識其異同而已天明辛丑年冬十月正二位清原朝臣宣條撰男從三位侍從宣光書 (白文)

伏原公所考訂孔傳孝經刻成矣公既自序之又以示不佞鴻俾志其簡末蓋先是孔傳孝經行于世者有數本而皆未悉讐對之功衍闕訛舛傳文最甚其一則公同宗故三品舟橋保文君所校當時以病劇不能再正無幾捐館公深以爲憾每欲一定正而未果一日其所善源生孺皮造見語次及之孺皮乃從與曰不獨舟橋君本缺明備他刻亦甚踈陋公盍速正之以惠後學也公慨然遂有斯舉矣蓋公家所藏孝經及論語六經各有數本鴻以辱知嘗閱之或繕本或鑲本或活版有簿秩有卷軸有摺本盡是先世所傳公乃據以取可替否鉛槧數易遂成善本宜哉此刻之精且備也於是乎鴻乃私嘆曰美哉吾大東之爲國也天神地神邈矣不可得而考已神武垂統列聖相承一姓相傳迄今二千四百餘年矣朝臣世家相從不變各世專門術業不廢若夫舟橋伏原二

家皆清原氏其先肇乎藤森親王寶胄蟬聯至車析公以明經爲高倉帝侍讀自爾以還家學相傳世奉恩榮近世雖分二家其學淵源一也重惟自車析公至今日六百有餘年而祖宗手澤具存乎二家之堂焉豈可不尊信哉宋歐陽子嘗作日本刀歌而欣慕於逸書百篇之存豈復知有子孫雲仍傳而不朽若此盛者邪公方奉帝師之寵命日侍講筵非有多暇而研究典籍不苟就宴安好學之篤世業之隆可知焉耳矣日本天明紀元辛丑冬十月播磨赤松鴻謹志於平安客舍（句）

孝經鄭註（知不足齋本）文化十二年昌平坂學問所刊本

岡田挺之「鄭註孝經序」

鄭註孝經序（日本國原文）

孝經有古文有今文孔安國爲古文作傳而鄭康成註今文孔傳世多有刻本鄭註則否南齊時國學置鄭玄孝經陸澄乃與王儉書論之曰世有一孝經題爲鄭玄注觀其用辭不與注書相類案玄自序所注衆書亦無孝經儉答曰鄭注虛實前代不嫌意謂可安仍舊立置據之則鄭註之行其來尚矣是本與陸德明經典釋文吻合無差其爲鄭註審矣頃者讀知不足齋叢書所載古文孝經鮑盧諸家序跋乃知唯得孔傳未得鄭註瀛海之西其佚已久嗚呼書之災厄不獨水火斬祕之甚其極有至漸滅者豈不悲乎今刻是本予之志在傳諸瀛海之西與天下之人共之家置數通人挾一本讀之誦之則聖人之道由是而弘悠久無窮海舶之載而西者保其無恙冀賴神明護持之力鮑盧諸家得是本再附劄劄則流傳遍於寰宇當我世見其收在叢書中所翹跂以俟之也癸丑之秋尾張岡田挺之撰（白文）

孝經一卷 寬政十二年跋井上慶壽刊本

屋代弘賢跋

右逍遙院內府實隆公眞跡開元御注孝經一卷往歲獲諸牛込門外書肆今茲摸刻以傳世跋曰原本後小松帝御用者夫孝經用玄宗注始自貞觀以距于今凡九百有餘年矣弘賢嘗疑謂古書之存於我邦者居多而特不見玄宗注孝經古鈔本近偶得而讀之其成在開元十年而石臺之經奏於天寶之初其間相距廿餘歲試取石臺之本校讐之正義謂舊註者咸合而石臺之改竄昭然明矣註疏序天寶二年註成頒行天下者蓋似不知有舊注也而此卷闕疏爲恨雖然今之正義多存元疏之舊何以知之正義序曰剪截元疏若感應章長幼順故上下治下疏與注不合及見此本乃知字句用元疏而不改化也吁嗟微此卷則何據明之乎可謂奇矣元氏序往佚于彼今存于此亦復奇矣其可不刻而傳哉寬政十二年五月九日源弘賢識（白文）

孝經一卷 明治二十四年三条公美景刊本

屋代弘賢跋（前書同文略） 三条實美跋 三条公美跋 藤原實美跋 三条公美又跋

逍遙院內府臨書開元御注孝經一卷原係我十九世祖後押小路內府公手寫進後小松天皇者今也原書散亡不可復見而視是卷猶視公書追慕之餘再上諸木以永其傳明治甲申七月裔孫三條實美識（白文）

先考內府公會製此跋既而聞原書藏於祕閣請拜覽對校未及改作跋文罹病薨今者檢遺篋獲其手書日付卷尾云明治廿四年三月十八日不肖公美拜誌（白文）

御注孝經劄劂功告竣偶閱故篋得後押小路內府公日記紙背有古文孝經父母生績章數行諦視之則公書也嗚呼曩得臨本今又見真蹟何其遇合之奇也不遑復論經文今古併刻附後以誌余喜云明治十七年九月後裔藤原實美識（白文）

按後押小路內府公以弘和三年十二月薨享年六十所著有後愚昧記本文所謂日記即是而先考之得公書在甲申歲其鈎摸之者爲堀博附記于此辛卯三月公美拜誌（白文）

孝經一卷 文政九年跋狩谷氏求古樓重刊

狩谷望之「跋（版心）」

夫孝者德之本教之所由生則家不可一日而無教人不可頃刻而忘孝故天平寶字元年四月辛巳詔曰古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本精勤誦習倍加發□其教授正業孝經用孔安國鄭玄注既明著大寶之令甲而貞觀二年十月壬辰制若曰哲王之訓以孝爲基夫子之言窮性盡理即知一卷孝經十八篇章六籍之根源百王之摸範也然此閒學令孔鄭二注爲教授正業厥其學徒相沿盛行於世者安國之注劉炫之義也唐玄宗開元十年撰御注孝經作新疏三卷以爲世傳鄭注比其所注餘□義理專非又稽之鄭志康成不注孝經安國之本梁亂而亡今之所傳出自劉炫事義紛薈誦習尤艱靡厭衆心更招疑義故廣酌儒流深廻睿想爲之訓注冀闡微言即敕學士儒官僉議可否於是當時有識碩德名儒咸集廟堂恭尋聖義妙理甚深常情難測同共嗟服伏請頌傳侍中安陽縣男乾曜等奏曰天文昭爛洞合幽微望即流行佇光來葉制曰可然則孔鄭之注竝廢於時御注之經獨行於世而唯傳彼注未讀件經假之通論未爲允愜鄭孔二注即謂非真御注一本理當遵行宜自今以後立於學官教授此經以充試業庶革前儒必固之失遵先王至德之源但去聖久遠學不厭博若猶敦孔注有心講誦兼聽試用莫令失望自是以來天皇太子御讀孝經必奉授玄宗注而人閒依兼聽之制多守孔傳者然古文之非真孔傳之依託制中固既明辨而斥之且曰御注一本立於學官革前儒必固之失則捨御注而學孔傳豈非沿習之陋蔽邪御注孝經舊無刻本近時源輪池弘賢摸刻逍遙院內府真蹟本卷首有元行沖序注文與天寶石臺本不同按唐會要開元十年六月上注孝經頒天下及國子學天寶二年五月上重注又頒天下則知逍遙內府本爲開元御注是本西土失傳足稱最奇然天寶四載九月以重注本刻石於大學則今日授業理宜用天寶重定本而世猶未有刻本蒙竊憾焉嚮有依開元本增益改竄以天寶本刻於京師者不知校書之法亦甚矣所幸篋衍中有北宋天聖明道閒刻本精意摸彫以公世夫家不可一日而無教人不可頃刻而忘孝則伏冀家藏日誦欽遵天平寶字詔天下之聖意庶革必固恭奉貞觀立御注之明制云爾文政九年十一月長至日市井之臣狩谷望之

味死敬識
(白文)

孝經會通一卷 文化四年京都林權兵衛刊本

朝川鼎「孝經會通序」

孝經會通序

孝經原無二本而其文有古今焉所謂今文十八章古文二十二章蓋分拆併合雖異體裁而其爲孝經一也故今不分經傳不次章第會而通之今文古文又奚別焉沈氏作孝經會通其意或在此矣惟其列先後次序爲一十五條者予所未信也司馬溫公曰經猶的也一人射之不若衆人射之其爲取中多矣然則綺文主人梓而傳之豈其徒哉文化丁卯秋八月朔日江戶善庵處士朝川鼎譔（白文）

孝經宗旨一卷・孝經引證一卷 文政二年江戸小林新兵衛等刊本

井田龍「序」 山崎苞「序」 井田經綸「跋」

序

語曰天下有大戒二其一命也其一義也子之愛親命也不可解於心臣之事君義也無適而非君也無所逃於天地之間也至哉言也吾儕小人未世窮年徒學雜識志未會讀書活法而妄鼓饒舌曰莊周異端之徒不知聖人者也唐虞三代之禮樂吾獨明之孔曾思孟之道術吾深達之退而視觀其所以由克伐怨欲荼毒心胸蔽陷離窮枳棘思慮虛譌百端暴賊萬計其所安者亦唯財色名利讀書百萬以至汗牛充棟未嘗得顧其安而由其誠也是以弟子負其師極口而訐徼讒毀師亦擯斥弟子不墜諸淵則苦獲陷阱隱賊暗害以爲祕密眞印於所謂不可解於心者與無適而非君者弁髦不啻也父子君臣之際亦猶如此而況於夫婦兄弟乎況於朋友之交乎若使漆園老人復起於九原以奉咳唾之餘教吾儕小人豈可不嚙舌而死哉夫古之爲學也豫時孫摩約達微藏終以盡命義之性故曰顧諟天之明命又曰盡其心者知其性也既而德成道明出服官政則忠貞輔弼使君超然立乎顯榮之地天下稱孝焉其開道術也活潑圓機如此君苟有過臣能諫之父有失德子善喻之夫婦兄弟朋友之信亦以救過全爲己任所謂人倫正而孝德備焉者非耶不然定省不曠養事不懈皆是陽飾孝慈之僞行而陰逞貪欲之邪術欺己誑人以至于如彼流泉淪胥以亡故曰禿而施髻病而求醫孝子操藥而修慈父其色焦然聖人羞之一日山如山入室出示羅汝芳之孝經宗旨楊起元之孝經引證二篇曰弟子以是書爲帳祕論衡者有年於斯矣每聽先生開示之說暗合默協分毫不差不審先生亦嘗讀焉耶否龍手閱之徐語如山曰南山生蘭採取以比北嶽之蘭花葉色香皆同焉西洋產金淘汰以混東海之金堅剛斷盡均焉五方之民嗜欲不同學以盡性則眼橫鼻直凡聖何擇焉小子勿輕視迺公舜何人是顏之學也行堯之行是孟之術也小子勿輕視迺公夫子不言乎自其異者視之肝膽楚越也自其同者視之萬物皆一也一也者何命義是也如山起曰若夫知命明義其性同一弟子既已得聞命矣不知汝芳起元出于何代而傳道於何等明師也龍時揮塵曰學稼問之老農爲圃請之老圃余唯取二君

子痛醒世人之妄夢以達至性之孝德已何賣博學奇才以掠市井之虛譽小子欲審二子之行狀事實則質之於考證學士學士不知通讀明史羅楊列傳及王守仁一家書何煩無學愚直翁時如山言下醒悟拜跪曰弟子今開無相宗旨豈敢不正有相引證哉於是乎遂以爲序于時文政二年祝犁單閼春三月望書於東都城南建標樓中赤城愚直翁田龍雲卿甫撰（句返送縱）

序

道猶燈也燈火不明則視物不眞欲視物眞唯在明燈已百年幽谷一燈照之則豁然光明數椽小室失一紙燭則立地昏黑然則不可頃刻無燈也不可須臾無道也以道燭物則是非枉直之狀歷分明赤者我知其爲狐黑者我知其爲烏花紅柳綠絲毫不差也看來聖賢佛菩薩隨緣應時交開小鋪席賣鬻燈心暗夜若有求明之客出來不賒分文隨手賣與使之傳燈續燄燭天耀地也獨奈燈火將明八風易動能不被吹滅者不知有幾人也昔者洙泗之一燈至於孟軻而光燄大熾其既沒也幾數百年不聞有傳燈者在也及明道象山善寬火種以續不傳之燈於是道燈一明乎趙宋也後數百年至於朱明有王陽明者盛講良知之學有陳白沙者別持主靜之說各以續聖賢之燈使學者各明慧炬以入乎堯舜之社火於是道燈二明乎皇明也余好讀其書旁及龍溪王氏近溪羅氏念庵羅氏等之所述作自以怡悅嘗藏羅近溪之孝經宗旨楊復所之孝經引證二篇鍾愛有年於此矣一日家君召如山於膝下誨言曰夫孝者善繼人之志善述人之事汝愚昧而不能繼述然從學日久矣先生之提耳面命不知其幾數次想當是非枉直之間小有辨知焉如能梓是書以公諸天下與孝子慈孫相共造道使吾一家祖燈永不滅乎後世則庶幾得報乎父師教育之萬一而可以無愧忤乎俯仰之間小子勉之如山謹拜受誨言退而命工以垂過庭之義訓云文政己卯暮之春中澣後肥宇土藩臣■峽陳人山如山撰竹屋今井戴雪書（返送）

■ (キ 8167)

跋

劉子有言曰吾聞之民受天地之中以生所謂命也是以有動作禮義威儀之則以定命也能者養之以取福不能者敗以取禍由是觀之孝者實天地之性也若夫陋讀五車四庫雜識志傲然抗顏談笑於衆人廣座之間而已則其爲學者亦賤矣是以仲尼之教以詩書禮樂之四術使人皆以自得孝之所以爲固有命性也不然誰謂堯舜之道孝弟而已乎山■峽家嚴高足弟子其言曰人之讀書也苟不達於固有之命性則畢竟口頭禪自救不了且瞿曇之所說大異於仲尼之所教猶曰天上天下唯我獨尊所謂我也者豈有他故異物也哉即吾人所受於父母之面目不可以不尊也故曰孝順至道之法而況聖賢儒中之君子而耽著名利賤棄眞我乎可謂善繼志者矣今茲新刻宗旨引證二書乃使經綸作跋予也乳臭愚童未嘗知盡性之所以爲孝也雖然格物窮理以辨至性之爲我而養之以福獨立於中心安仁天下一人之場則揚名顯親不出於瞿曇之下云爾東都田經綸謹撰武州磯田榮章書 (句)

■ (キ 田 8167)

群經總義類

五經白文 寬永五年安田安昌刊本

林信勝跋

本朝詞人博士振古講五經者唯讀漢唐諸儒之註疏未能知宋儒之道學故世人皆拘於訓詁不能窮物理殆數百千歲然今世往歲妙壽院惺窩滕先生講學格物之暇新加訓點于五經易則從程傳兼朱義詩則主朱傳書則原蔡傳禮記則依陳說春秋則拋胡傳至若倭訓之古而不可易者參之舊點而不盡削之也其可筆可削者亦竊取其義而已頃有人自京師來于武州曰今洛人安田安昌薩摩正重等鏤五經白文於梓其訓點則滕先生所嘗爲之也願請余一言置諸卷尾余謂先生雖嘗爲之訓點而其元本藏之不出蓋其副流落人閒而然乎點畫偏旁雖未必無三豕渡河之訛教授參校豈是非貽千金滿籛之謀耶於是乎書戊辰春正月日羅山子道春把筆于東武寓所夕顏巷 (白文)

改正音訓五經 天明七年刊安政二年大坂炭屋五郎兵衛等五刻本

林信敬「後藤點五經序」 佐藤坦「再刻五經序」

後藤點五經序

往年余奉命爲五經改點既而應書肆之請稍稍命刻而剞劂未戾功也今茲門人高松世儒後藤元茂齋新刻五經來示乃其父守中所訓譯也余受而閱之則其去繁從簡以便誦讀與余之所爲者大相同矣因謂訓譯之於經書特爲童蒙耳固非居業之要務也然吾學之有淵源亦足以徵一端焉守中名世鈞及吾高祖懿子之門學成而仕于高松侯才學文章號稱高第弟子曾成此書寔其緒餘耳然其惠童蒙豈淺淺乎元茂請冠一言蓋亦欲證不乖我家學也於是乎序焉寬政庚戌孟春國子祭酒林信敬撰

(白文)

再刻五經序

五經白文無慮若干種而芝山後藤氏塾本獨盛行既閱二十餘年板幾漫漶芝山之子曰元茂孫曰伯雍更加讐勘以再刻之寄余序余嘗謂今人往往有颺秕言逞浮辭不且巾笥焉而繡鑄之是則徒災棗梨孰若刻一部經典之爲有裨於人後藤氏世篤學其意或亦出於此歟則吾盍與焉雖然於後藤氏未足道也已文化九年壬申九月江都佐藤坦撰河三亥書 (句)

校定音訓五經 文化十年江戶須原屋茂兵衛等刊本

佐藤坦「音訓五經序」 三谷備「刻音訓五經序」

音訓五經序

郁郁之爲都都文哉之爲丈我陋矣彼且然況我乎迺黃吻學語咿唔良艱不但直下而倒行目一失步口輒躓之所以艱也雖然倒直閒而語乃順音訓參而義直見則亦不爲非捷法矣五經校刻成爲引其端文化十年癸酉五月上浣江都佐藤坦撰河三亥書 (句返送)

刻音訓五經序

語曰辟如行遠必自邇辟如登高必自卑凡事皆然五經聖人之道載焉學者攀而躋之可以至於堯舜矣然讀之之初必由乎佔畢課誦而其法莫要於辨音訓何也齊楚語異南北聲殊在彼猶爲然況我以吾譯讀之有數譯而一字有一譯而數字或同言異字或同字異言夫苟弗明焉則是非信所學輕重因所習恠不見毀不聞不惟自誤并誤人可不慎乎凡訓蒙之道譬諸染絲斲梓功在初變一旦器成采定難復改移處鮑居芝先入必爲之主一薰一蕕十年尚猶有臭亦不可不識也書賈千鍾房嘗藏音訓五經鈔本頃將梓而行恐其有差謬也更就一齋先生乞校余亦與焉音訓之得失訂諸大全諸書字體之乖訛一照康熙官撰諸本正之然後其書庶乎無謬矣初學之士由是漸進推而上之安見其不爲行遠登高之邇卑也乎文化十年癸酉九月東奧三谷備撰 (句返送四)

音訓五經 文化十年刊明治三年大阪山内五良助三刻本後印

川田興「再刻音訓五經引」

再刻音訓五經引

音訓五經嘗刻於江都而板今藏於浪速松敬堂初此書之出邇布遠被不知幾百千部版已漫漶未及改槧屆戊戌歲燬於祝融於是松敬堂主人請覆校於我一齋先生先生乃命門生就舊本更加釐正及刻成則清刷瞭然最便誦讀殆乎祝融爲之媒也主人謁引乃弁一言天保辛丑首春下澣川田興撰關研書（句返送）

訂正音訓五經 慶應二年序刊本

東條喆「五經句讀序」

五經句讀序

詩有朱註書有蔡傳禮有陳註易有程傳春秋胡傳而五經定矣自是而後元明清之際古學益盛而考證之學於是乎起矣新古相頡頏雖各有一得一失要歸於經義耳抑亦賴宋學之力一洗漢唐之陋習邪通志學海二堂經解是也學者折衷之可矣雖然古書有古言存焉非徒所以可以訓詁明字義者也是故說聖經者直溯秦燔以上而以古書徵古言則莫有一而難解者也雖曰周誥殷盤佶屈聱牙亦春融冰釋焉然而習句讀者必以四書五經爲先務故姑依釋文音義以爲初學之資已夫我邦讀書法與彼從頭直下者不同音訓參伍順逆迴反文義自會則字字之位置句句之斷接不得不施轉聲加助聲也欲詳悉邪則迂冗近于諄言從省約乎而短粗類於偏語語路一躓則唇舌俱澁雖欲琅誦豈可得乎是以去偏諄而就簡雅將欲使人馴讀也若夫助辭則宜讀知而不可目記也蓋其於聖賢之蘊意庶乎有餘味矣五經新刻成序以冠其首慶應丙寅端午前一日東都東條喆撰永井喜暉書 (句返送)

明治新刻五經 明治十三年東京前田誠之助刊本

永阪潛「校刻五經序」

校刻五經序

初學之於佔畢譬之斲梓染絲其質一成不可復變慎終于始之言良有以哉坊間所刻五經讀本者其類極夥矣其訓詁邦譯雖皆出先儒之手煩簡精粗各自異趣一是一非得失迭存余每憾焉頃日書賈岡中堂主人將裒資以從新鈐之役乞校于余余乃就各本旁搜獮索訂正其音訓折中其邦譯務取煩簡之宜俾以便誦讀焉苟誦讀之便足以能鼓舞晤咿之業則憤悱之力自此而生勃然弗可已也於是乎慎終于始之效可以見矣抑夫於豫時孫摩之際兒輩取材于此則他年知類通達之功將在于此矣而余之微志亦在于此而世教之資亦將在于此矣刻竣爲之序明治十三年十一月下澣會輔學舍永阪潛撰（白文）

標註詳解五經 明治十五年東京中外堂柳河梅次郎刊本

後藤義求「自序」 (無名氏) 緒言

自序

古者以易書詩禮樂春秋爲六經至秦焚書樂書亡今以易書詩禮記春秋爲五經而聖賢脩己治人之道莫不由此也我邦亦擬彼而以爲經國之典籍矣維新以來政府設學制而置之於高等不使兒童讀之然山村僻邑之人依舊聞欲使子弟學焉則無其師而自欲以授焉則力不足偶雖有其書而有音訓假字用格之誤謬而憂難供其用嘆息移時荏苒消日者不尠矣余不忍見之自忘其固陋終揮毫於南窗之下云明治十五年四月後藤義求識 (句)

緒言

一 凡讀書者有三望知字一也解字義二也記事三也是故著書者亦不可不勉也然自古至今以國字記字音或施傍訓者一不見有得其正者至於近世其失愈甚而四聲混淆五十連音錯亂使初學之徒有迷津哭岐之歎可謂杜撰之極矣予深憾焉爰書肆中外堂亦以與予同其歸今回共議而編次此書矣然至其國字用格非予所得意也是以質之南山先生而歸其本源苟初學之徒玩味此書則於知字解義記事知國字用格之義萬不失一也

一字音附假字者雖原於二百六韻而記適有國風之弊音而歸之正律却有爲初學之惑者譬如香雖原音幾也字用次音加字應雖原音伊與字用次音於字央雖原音伊也字用次音阿字依舊而不改之初學諒焉

一如屬蕭宵(上去准此)之字雖漢原音之也字伊也字次音佐字也字等今有故而用吳次音世字衣字而記之初學勿咎矣一如字訓之假字從皇國之假字用格八種活之格而記焉

一如鼈頭注音之假字閒有用上略和音中略和音者此無他故但以其境域之狹隘也初學勿怪訝焉編者謹識 (句返)

新刻改正五經 明治十五年大阪和田巳之助刊本

近藤元粹「新刻五經序」

新刻五經序

幼童讀書常以先入爲師故誦讀一謬而與文義相背馳者不爲少矣坊間所刻五經白文無慮如千種而或繁或簡得失迭存其不致幼童之謬者蓋幾希矣書賈某持新刻五經來乞序謂斯書係松陰後藤氏所訓譯余取而閱之似得繁簡之中者幼童據焉以便誦讀則至他日講求其義分析其理之時思過半矣然則如斯書雖曰以先入爲師亦不妨也嗟其惠豈少小哉於是乎書以與之明治十四年冬十一月鐵峰眞逸粹撰（白文）

音訓標註五經 明治十八年東京後藤宗秀刊本

土田泰「五經序」 小永井嶽「後藤點五經序」

五經序

天有五星猶人有五常書有五經也天無五星者不可謂天矣人與書無五常與五經者不可謂人與書矣五星者何也曰木火土金水五常者曰仁禮義智信五經者曰詩禮書易春秋夫人者受五星而生故生而保五常是以人者爲萬物靈以毓生萬物矣故天地之心者則人之丹府也人之丹府者亦爲萬物之靈犀矣夫春者溫厚和柔煦軟惠暖莫物不生長莫人不歡情猶仁之博愛篤近而及遠也且如木之德無爲而化也夏者暑氣炎氤朝露夕雨以盛盈萬物堅確人體千綠萬青南風薰陶猶禮之敬慎自卑至高皆不懈怠也且如火之始鑽燧火食以祭神也秋者金柔尚低火老愈熾肅殺慘愴樹落木枯猶義之果毅捨生而取死也且如金之鍊刀銳利斷物也冬者則四時愒會就往知來悉皆瞭然數計龜卜猶智之坐而可致千歲也且如水之所流莫不知淺深也土用者則中央四時調和陰陽寒往暑來循環不已猶信之主於一行於四也府下某會上五經於梓而請余於序其端余竊藏此論久矣偶以有五經舉乃品評之曰詩之溫厚禮之敬慎尚之刑律易之知明而春秋之不離四經猶土用中央四時木火金水生於土也時明治十六年十二月念日土田泰撰 (句)

後藤點五經序

學校教童蒙之目出今人作意非古所謂教也蓋五經掃地久矣然日星華嶽理不卒歸頽滅孰復回狂瀾於既倒者乃者書肆某氏使後藤某刻其家定本五經來請言余謂道亡猶有經典焉舉而脩之者儒宿學之任也不意此事出一書肆顧一綫之統未絕有有力者繼而唱之則古學校之教尚可見矣我家誦讀僅存舊規朝陽一鳴耳今聞茲舉知常綱之不可泯滅喜而弁一言明治癸未冬東京小永井嶽撰 (句)

音註釋義五經白文 寬文十一年跋京都積德堂刊本

不秀軒跋

右五經之訓點予曾入宇都宮三近先生門受句讀口授之趣書以輶匱蓋古義新傳註釋同者專從舊訓其於不同者捨故用新是口授之微意也今也命梓以教童蒙恐記憶之疎而有筆書之誤見者撰之可也寬文十一年春正月日不秀軒謹跋 (白文)

五經集註 寬政三年今村八兵衛印本

鈴木温跋 (標註五經集註)

標註五經集註者平安書肆郁文堂所刊行也而行于世日久印版磨滅且舊點國讀紛擾煩碎學者嘗苦讀而詩傳殊甚矣於此謀再刻來乞校正余則從望楠軒所藏之本正其國讀刈煩從簡一以不失傳義而便乎誦讀爲要若夫標註與傳之旨相背馳也存而循舊者將鳴寸雲子之勤而又使芻蕘雉兔者往焉其至剗刷氏之屢失工也猶似蚊蠅驅撲之患有不可堪者讀者恕諸寬政辛亥之秋尋思齋鈴木温記 (句)

五經揭要 明治十七年東京樂善堂校銅版刊本

岸國華「縮刻五經揭要跋」

縮刻五經揭要跋

聖人之道如日月之麗天瀾千萬歲無能掩其明也我邦輓近專仿泰西文物競講西學當是時新進後生唯新奇之趨六經四子束之高閣語及經藝羣笑爲迂濶而來未十數年天下漸悟其非府縣學校亦皆延老儒宿學爲生徒講經學四方靡然嗚呼是多見不知其量者雖欲自絕其何損日月之明乎顧我東方世重聖學至德川氏時諸儒盛唱宋學四書匯參五經體注五經大全及七經輯疏欽定四經等諸書皆有刊本而卷帙浩澣書價亦準之人家子弟常以不易購求爲憾曩年余在滬上偶得許穆堂先生五經揭要其書取諸儒解說合新注者句梳字櫛一目瞭然而不過僅僅數卷可卷而懷之尤便攜帶價亦隨廉唯此書盛行中土刊本濫惡脫誤極多後得石峰書院袖珍本上層有某氏五經說余服其文辭工妙括盡奧旨乃請高明老儒校對數次繡刻公世今也聖朝龍興文化蔚起此興庠序講聖學之時是書盛行庶幾可以充鼓舞名教振起世道之用也明治十六年龍集癸未仲春月東都岸國華識（白文）

四書類

大學古本一卷 明治三十年東京六合館排印本

佐藤坦「大學古本旁釋序」

大學古本旁釋序

王文成公大學古本旁釋本邦人所未見余嘗檢朱彝尊義考曰文成大學一本四卷取鄭注孔義本而旁釋之毛奇齡曰今行本有注釋者係門人僞入嘉靖間給事賀欽出陽明大學有章截無注釋案文成序明明曰傍爲之釋而今以無釋者爲眞豈其然乎至於文政甲申筑人抵崎始得之吳商轉傳歸於余其書爲清人李氏調元刻本詮釋厘厘止數處後半截尤簡略與世之訓注事體殊異遽讀之若淺率不經意者毛氏斥以爲僞入殆以此歟嘗讀文成答顧東橋書其所舉問目有似指旁釋中語者久疑之今取比校果然則知決非門人所僞造矣但自序係正德戊寅舊撰經義考所引亦與此同當時未專說良知之說故序中亦不及之嘉靖癸未與薛尚謙書有云致知二字在虔時終日論此同志中尚多未徹近於古本序中改數語頗發此意今閱文錄所收古本序於致知三致意焉與李本序不同是知李本序未經改定也至於經義考指爲四卷今不可考李本則本文一卷附錄一卷共一本而附錄全襲取經義考蓋出於調元所爲矣錢德洪曰大學問鄒謙之嘗附刻於大學古本而其跋載在東廓集則鄒氏刻本其有大學問可知也余今重訂之序取文錄所收者旁釋極爲簡易因亦僭補數條除去李本附錄依倣鄒本以大學問附焉庶幾於讀古本者或有所裨益爾文政十二年己丑嘉平月晦江都佐藤坦識（句返）

大學解一卷 文化四年刊京都梶川七郎兵衛等後印本

中野煥「大學解敍」

大學解敍

大學中庸者禮書也故併列禮記爲四十九篇夫祇析爲二書以行于世蓋歷漢唐以逮于宋但宋賢好理學說經義棄注疏爲糟粕師心自用欲悉通其說於是大學一篇爲之遷徙爲之增損其割裂特甚改本即出精神隨失離禮獨行以逮于元明改經沿習既久展轉效尤焉指瑜爲瑕指瑕爲瑜改之又改愈失其精神遂至使後世學者茫乎不知有舊本且其爲禮書也朱本一出舊本似乎無用夫以遷徙割裂之篇章用講正心誠意其亦迂矣惟郝仲興九經解大學依舊本還原文又合四十九篇之記以爲禮書此蓋漢儒校書之例夫郝氏以經學蜚聲明季其博洽淹貫窮波討源闡釋聖真腹笥甚富蓋胸有獨照能破萬卷之疑今之皓首而不能通者郝氏皆能通之然其書寥寥不得舶來者久矣是以雖老師宿儒之家罕有藏本而印本又益罕當時談經之家寫以爲繕本亦窮年累月以成其視此如九鼎其爲高價厚貲可以知也於是乎好學之士厚禮卑辭就以借之猶有難色三浦世傑仙臺士也來游于輦轂下交遊最與余親異聞必識祕簡必校但患九經解之難得而人亦困求假焉乃捐金於其書誠意以營之踴躍之心未知其止忽欲刊梨棗嘉惠來學然而簡帙浩瀚恐其難成因先抽大學一篇於其記中刻于平安城乃謂余曰若能得同志之嗣成全書者則初稱快矣此僅爲鑊中一鱗耳余曰不猶愈于不得味者過屠門而嚼乎況是書雖小經中之最小者舊合于記中則是大經不可不知也且經之小也非道之小也此則卷之少也卷之少也易鬻又易覽善讀者內以自鑑其身心外以爲天下國家之治具是書一出凡後來好學之士人人得置之几篋閒則是書之精神先露而且知全書之概知全書之概又且知是書之爲禮書知是書之爲禮書而後求道則道斯得矣文化四年丁卯臘月中野煥季文題併書于有竹居（句返送）

翻刻古本論語序

仙石君鶴君以古本論語本經一部屬余曰此是家嚴尹泉南時所得也其版藏在界南宗寺相傳細川幽齋所受清原宣賢而寄也清原者吾邦博士家之一族稱舟橋此書存何氏集解之題有序而無解卷末載清原跋語所云與世之相傳者不相同然不可考今竊校之諸本互有出入而與皇本大同小異筆畫古勁似六朝初唐人之隸書蓋奇本也遂爲作考異欲刻藏於家子試考正其文字余受讀曰千百年之後徵千百年之前豈易哉孔子嘗曰夏禮吾能言之杞不足徵也殷禮吾能言之宋不足徵也從牧野倒戟至洙泗講禮之日六百有餘歲以其世如彼其久矣以其土考之則非異域殊俗必待九譯而後得通者且當紂之亡也有故家遺俗流風善政猶存而不絕者然其間不有如老莊申韓亂眞悖理之徒不有如呂政李斯焚書坑儒之政而孔子以天縱之聖知而徵揆一之聖跡宜無難焉然而難其如是何耶是其文獻不足也故而已然則苟文獻不足以聖知徵聖跡固難事矣況經傳之道幾熄於戰國焚滅於暴秦乎故其欲較同異正得失者必當詳終始而牴牾質於聖人而悖理害經之甚有不得已而後正其訛誤矣苟不能盡讀先儒之書而闡其微意妄意牴牾特生得失者果有能得哉余未之信也況至愚淺陋何足敢議聖經耶昔者當西漢募收燼餘求拾亡迭獨論語一書以人口相習誦魯論齊論更興古論又出自夏侯勝蕭望之王卿庸生之徒傳魯齊論如張孔馬鄭王周等大儒家繼興注解作家者不一而足矣至何氏集諸家之善於其不安者爲改易經傳最詳審確定而諸家之本皆廢閣焉從是以來逮程子朱子出而探遺義發蘊奧頗多所正然於本經壹主何之本至今取正焉是皆雖前數君子之澤何之功固居多也然則學者於何之本苟近古者一句隻字可不盡思耶余故以爲君此舉亦前數君子之亞而非彼妄意牴牾特生得失者之从也古書逸彼而存吾不少昔釋耒然適宋鄭齋注孝經爲彼所貴重近太宰氏孔傳孝經知不足齋叢書收之其餘錢氏讀書敏求記等所載往往可見也今此書之行不啻不朽於吾而已亦將不朽於彼矣豈不快事乎於是君鶴君慨然命剞劂問

序余錄此數語以贈云爾文化八年九月大藏讓與識（白文）

跋語

古本論語泉南宗寺所藏版本家嚴□淡州君乎泉南時所得也筆畫奇古如初唐人之隸書相傳其版清原宣賢所附細川幽齋幽齋附南宗也蓋清原者吾邦博士家之一族稱舟橋此書存何晏集解之題有序而無解當時上木之由在清原跋語中曰累葉的本以付與據之則清原附阿佐井野以家藏之本阿佐井野以上木者也然云附幽齋者阿佐井野所受刻即今南宗所藏者以附之乎抑阿佐井野所刻集解全文而附之幽齋刪集解改刻以附南宗乎且清原所附阿佐井野今何本乎不可得而知也嘗恨不得見其全本者久焉聞書肆千鍾房藏正平版即囑摺之其版亦脫數十枚校之閒所有異同而字樣甚相似此也是翁得而爲書庫中奇本者彼不知正平我邦年號其以得朝鮮竟疑爲朝鮮年號也後又重價購得舟橋手校正平全本同異所以朱旁注每卷末有自記校若干家本語并歲月其以家本不一所謂累葉的本者雖不可悉得然據之講求既得思過半矣吾所以爲書庫中一珍珠也遂取校讎旁及世所行集解根伯修足利鈔本其餘若干本頗互有出入而與皇本大同小異也爲作考異一篇翻刻本經及序跋以附之以藏於家其傳寫之訛謬雖有易辨不敢正而亂其本爾文化辛未夏五月仙石政和識吉信天敬書（白文）

論語十卷 文化十三年跋刊本

狩谷望之跋

謹按應神天皇十五年勅百濟激博士王仁十六年二月王仁來貢上論語十卷千字文一卷論語之入皇國是爲始矣實彼晉武帝太康六年也大寶學令教授正業論語用鄭玄何晏注爾來明經諸儒皆奉是令中世海內騷擾干戈日繼學校不講生徒不肄於是鄭注湮滅不傳殊爲可惜矣吾師明經伏原清公世遵先王之訓不敢失墜其業是以何晏集解古本往往而存矣今日所傳雖有明應板本菅家本宗重本莫若正平本之正且善也又有活字諸本及伊藤東涯校本皆依邢昺疏本妄意改竄不足據也但正平刻本傳世絕少學者或不能見友人市野迷菴憂其如此捐貲翻彫以公于世別作札記附之卷末考證精核覽者自瞭焉近日清人有翻刻古書者善則善矣然皆不過宋槧元鈔諸本已比比書之爲六朝遺本不可同日而論也迷菴之功於此經可謂大矣方今文運昌明經學盛行國家假順考古道有石經之舉舍此本其將何取焉文化十三年二月辛亥朔湯島狩谷望之識

(白文)

論語（縮臨古本）十卷 天保八年序津藩有造館刊本

石川之駁「縮臨古本論語集解跋」

縮臨古本論語集解跋

先聖之教莫要於論語後進之業莫尚於論語此其所以號稱宇宙第一寶典也自罹秦火之厄僅存於口傳與壁藏漢代所授受遂有齊魯古三本之異劉向班固唯記其篇第多寡而不著卷數至鄭玄作注合三論爲一又分爲十卷三國時王肅虞翻譙周等所注皆同鄭本何晏集解亦因之粵稽國史應神天皇御宇三韓率服歲貢方物其十六年百濟博士王仁來歸獻論語十卷皇太子稚郎子就而受之皇國之有經學蓋始於此即晉武帝太康六年也其爲漢注與魏解今不可得而詳焉逮隋唐通信海路始開聘使學生來往不絕資彼禮文潤飾我凡百儀度大寶學令論語用鄭何二家亦遵隋唐之制也明經諸公充世其業郁郁之羔太備矣保元已降乾綱中弛學庭日就荒穢鄭注湮晦不復見於世何解則傳習較盛是以古昔鈔本印本收儲於舊庠故家者猶多以襲之寡陋所聞見餘二十通而我津藩有造館所藏鈔本十卷爲最古此本係我封內大和古市名族廣瀨某家祕祐信公時獻之鑒家了仲元祿八年證記定爲贈大政大臣菅公親蹟裝謹審定白紙墨欄欄高七寸五分界廣一寸經文每行十一字注雙行小字增一格獨第一卷注或增或否第六卷經注俱十二格而第一卷用筆凝重頗多姿態二卷以下則結體遒勁略似世所傳大安寺緣起雍也篇末署手自書寫畢字樣既得其正子孫可寶之丞相十八字通編施朱墨兩點又揭音注及宋槧摺本異文閒於欄外若紙背條記釋文疏義并家說每卷背有釋深尊貞和二年識語特述授受不苟之義第六第九第十卷尾並有極樂院主順乘記云我神文道大祖天滿天神垂擁護亦似爲菅公書者柿漆紙標黝漆木軸製造極樸古香藹然可掬深尊順乖皆未詳何人或曰南都元興寺中有極樂院二釋疑其住持貞和二年南朝改元正平距今天保八年凡四百九十二年菅公昌泰二年拜右大臣在官三歲左遷大宰府昌泰二年距今九百三十九年此編果出公手與否固非襲輩所能辨要其紙質墨彩一望可以知爲九百年外物也祐信公嘗齎到江戶時出示人吉田漢宦見而奇之私鈔上之活板印刷一百部以貽同好其所著集解攷異稱卷子

本市野光彥正平板集解札記稱管家本皆指此也。札記云皇國刊板經籍莫古於正平論語較之羣書治要開成石經頗有異同。聞與後漢石經及史記漢書說文所引合又多與陸氏釋文所引一本合。乃知其六朝遺經而非唐本也。褻試取諸本對校其經注字句增減以至筆畫奇異多用六朝書體。唯我古本與正平本大略相近而美其年代久近則此殆倍於彼。洵爲宇宙第一古籍矣。抑又通觀古今以推究一部集解顯晦存亡之跡誠有可惡可悲可憾可喜者。嘗試論之在西土五季之亂古籍蕩盡其幸而存者不過何氏集解皇侃義疏等數種。然據晁公武所記則宋初見行集解唯有長興監本一派耳。所謂監本後唐長興三年詔諸儒就唐石經各部編插注文鏤板者。唐石經用開元改寫今文已非古本真面。長興編注又成一時衆手匆卒竣功所以多訛誤也。邢昺正義出於皇疏而經注全依監本其訛誤字句往往望文下解不復就皇疏校正焉。鹵莽之甚貽害後學是可惡也。邢疏行而皇疏亡既而注疏合刊本出人憲其便覽。單注監本亦湮滅無遺加以劉王蘇程諸家新義紛紛競興各立門戶漢唐之學掃地矣。朱熹集注一從邢本其所比較僅止晁氏所錄孟蜀石經及福州寫本二種。當南渡偏安之世文獻兩闕使人學問枯單至此是可悲也。夫窮經之要在於講明大義得立教之本旨原不以搜求奇祕爲長然一字之訛或害全章之義自非取徵於古審訂得失則著論雖辨析理雖精憑虛鑿空究不免爲燕說。明季以來諸儒有見於此故其說經專力考證主張漢唐之學者項背相望但歷世散佚之餘所存無幾如錢曾好聚古書賞鑒之精儲藏之富一時無比猶且不能見集解原本財獲摸寫正平本爲希世之珍以其傳自朝鮮目爲高麗鈔本後之著錄家沿襲其繆竟不知正乎是皇國年號洋洋茫茫無由通其情是可憾也。於戲赫赫日出處風土之美實冠萬國偃武二百年人文之盛不讓於漢唐往時西條藩臣山井鼎就下野足利學所藏古本校錄其異同作七經孟子考文侯偉其業獻之於征夷府講官物觀等又補其遺享保十六年刊行明年下令長崎附西船送致清國即彼雍正十年也。皇疏舊鈔亦出於足利坊刻既久流傳海外會有乾隆購書之舉皆取入祕庫又翻刻布世學者莫不崇奉爲是可喜也。總之以宇宙第一寶典遠越滄溟托迹於無雙靈區神天之所護持傳其真本至於今日豈非斯文之幸乎。況其最古本儼然存我學館吾儕晚進之幸莫大焉。娶承乏學職竊謂此編已顯於古學興隆之時然其顯較後不逮入考文補遺之撰財有吉田氏活字之舉歷四十年亦復散佚殆盡今而不圖不朽恐違先聖垂訓之旨乃使書手影鈔一通以充副本每張十行統計二百六十葉釘爲十冊便披覽也。又

縮臨經注一通勒成二册建請上梓爲學中誦習定本所冀頒行之餘還傳西土或有篤信之士若阮元鮑廷博者翻雕以資稽古之業焉則不唯發我學之菁華而已亦足以增皇國文明之輝矣褻不敏謹敘其概略以詵觀此編者皇天保八年歲次丁酉二月丙辰津藩督學兼侍講石川之褻謹撰并書（白文）

論語集解義疏十卷 寬政五年大坂柳原喜兵衛等重刊本

服部元喬「皇侃論語義疏新刻序」

皇侃論語義疏新刻序

往者根伯修與神君彝俱遊下毛足利學足利之藏昔稱石室中遭散失而厯厯乎存於今海外後世所不傳異書猶多矣君彝乃與伯修讐校七經孟子而還考文既刊行於世矣伯修與功爲多矣而又伯修所寫而還皇侃論語義疏即亦海外後世蓋無傳焉據馬端臨考乃目論語疏十卷而晁氏云梁皇侃引衛瓘某某凡十三家之說成此書其引事雖時詭異而援證精博爲後學所宗又云皇朝邢昺等亦因皇侃所採諸儒之說刊定而撰正義正義因皇疏則然也未知馬氏所考即所親觀而云歟抑將徒耳所傳而勦說歟夫邢疏出而後亡幾程朱諸氏經生之學紛紛輩出雖別成家弁髦舊傳於其所校皇本異同無一及焉者泯焉可知況復後繼無覩而非宋說者時乃益遠其書不傳必矣獨焦弱侯云公冶長辨鳥語具論語疏以駁楊用修其他匏瓜爲星一二若覩皇疏者然不可以一信百道聽相傳文獻不足徵也因此視之海外後世今亡矣夫要之世好事唯新是貴乃積薪之情率以後世爲尚而作者不厚亦不欲存其舊宋人之弊乃爾則蓋邢疏出而皇疏廢矣廢以至亡無聞焉爾亦其勢耳夫邢氏所疏比諸他正義既屬丙科皇疏雖詭援證復博觀聽不決寸有所長兩立而竝行非過存也焉可附之烏有氏哉惟我皇和神明扶持物亦與世代永久於是可知也唯是足利之藏我不可保今而不傳後世恐復散失是可惜也乃伯修氏之志如斯則鐫刻之舉其可緩歟近有請鐫焉者伯修既再校以授之矣此舉也余惟非獨海以內行既弘矣即傳之海外而俾知吾邦厚固有關文明則伯修之勤有功於國華哉乃復伯修氏志余亦喜其足以酬焉遂爲之序寬延庚午春正月平安服元喬（句返送四）

增補蘇批孟子二卷 明治十三年刊大坂岡島眞七等後印本

藤澤恒「刻蘇批孟子序」

刻蘇批孟子序

秦火■矣六經缺矣後之學道者不得不取翼于諸子諸子之可以爲經翼者孟荀爲尚而古文之秀光焰煥赫貽範于今者世推孟與莊然則孟也者可謂兼華實也而世人皆以實取孟後之註者不復說其華雖然道由文以傳言而不文則其行不遠也華豈可廢乎余平素以爲憾焉去歲秋原田西疇來贈此本閱之則蘇批趙評探賾拔祕毫分釐析無復餘蘊余大喜乃校正上梓矣然而取舍人異識見家殊蓋先考之於孟勸王一事所不取是以後之尊孟以比孔子推其書以配經命爲醇之醇者皆不取也此別有錄故不贅記矣今額上補疏施圈以別舊者皆字句解或先輩評語而亦任讀者之取舍云爾明治庚辰首月南嶽藤澤恒撰養素村田壽書 (句)

■ (77) 19379)

四書集註 文政八年刊安政四年江戶須原屋伊八重刊本

佐藤坦「刻四書集註跋」 三谷備跋

刻四書集註跋

四書章句集註亡慮數十版惟吳志忠校本爲尤善但以其與通行諸本異同極夥生徒聽講者輒錯惑非便也又有朱錫旂雕本
依遵監本更加校勘不似坊本多繆曩日余謀刻吳本未成今又刻朱本取便也至於讀式吾塾舊從簡省五經既有讀本今亦沿
其例文政八年端午江都佐藤坦識 (句返送)

四書坊刻概不勝陋惟朱氏鐫本庶無紕繆翻刻之舉洵士林之幸也是以喜而校之文政八年乙酉上元三谷備記 (句返送)

重校四書 明治六年大阪高槻平治郎刊本

橫尾謙七「四書重校序」

四書重校序

自大權復古奎運日開月盛而天下府縣設大中小學校上自縉紳子弟下至衆庶兒童無不入校習讀焉然而其習讀之所主張以平穩簡易易進步者爲目的非如彼誦讀難澁難解者以爲高超也非如彼涉獵浩瀚無邊者以爲博雅也故入校者先自數字五十韻下手以漸次及國乘律令譯書諸書而施之實事行之活物非復如彼一生窮窮老死于章句間之儒家者流也於是乎學制一洗而從來迷迂路之徒始就上達之捷路何其幸之甚哉頃日堺縣下某氏齋四書來請予訓點予斷然辭曰方今讀書貴平穩簡易者如四書既屬陳腐迂遠而今施之訓點以付劊劊氏不亦可笑之甚乎某氏強之不止且曰此書非難澁難解者又非浩瀚無邊者而其中仁義忠孝之道叮嚀教示而其切實著明無不至矣無不盡矣唯因舊來讀法不善以屬陳腐迂遠耳今讀法一變而爲實事活用之具則其平穩而簡易者無過焉予以其言不誣且有所大悟乃從其所請歲之八月遂卒業焉其所訓點大抵折衷道春點後藤點其他一齋東條諸點閒又以予臆見以爲詳略而其訓點之旨趣唯使兒童便誦讀而易進步耳是以或涉繁冗或不免俚俗也如其注脚多存舊點而不復下手者因賴氏不讀注脚說不敢區區費力也夫方今雖珍書奇冊或廢或衰展轉變遷無所底止而如此四書依然不變遷而戶誦之家讀之愈盛愈行昔人以此書爲兒童入學之初階梯可謂卓見也且夫此書關係于仁義忠孝固不待言矣讀彼布告書新聞誌其他譯書揭示文之便無若熟此四書何則布告新聞諸書無一不漢字填之無一不漢語譯之苟熟此四書焉解漢語漢字猶解國字國語耳且至解洋書記洋語亦思過半嗚呼方今皇運隆盛鳳翔鸞舞化溢四表而學校增立日盛一日遂至不可計矣當此際刻使用書以供智識開洞之具則其功用之大不特爲兒童實可謂報皇恩之一端矣四書固使用書也豈可謂之迂遠而束高閣哉豈可謂之陳腐而委長物哉猶且有可服膺之要語大學云日新又日日新是與西洋知新之學相符焉論語云祭如神在是與皇朝敬神之道相齊焉然則四書終不可廢絕者自在焉其概謂之迂遠陳

腐未能熟知耳或難曰今日之勢非爲純粹國字則爲純粹洋字非爲純粹洋字則爲純粹國字必矣彼漢字漢語一時之爲耳而子訓點之不亦蛇足乎予曰其說高則高矣然漢字漢語一日行則訓點亦不可一日無也文丞相所謂存一日則盡一日之責事雖異其所爲之意一也予豈關係他日此書行與不行哉遂爲之序以與某氏時紀元二千五百三十三年識于浪華僑居後學橫尾謙敬紱（句返送）

正點四書 明治七年大阪書林商社刊本

高見岱序

天皇即位之六年詔天下大布設庠序學校時大阪府既創建學之役敢可勿亟乃先竝脩百餘小學於管內衆宇爭起結構宏壯斧斤隨造絃誦隨湧盛矣哉府之僚屬掌學者周旋監督勤勞甚大矣而又相謀曰小學之科必務誦讀則諸書讀式不可不擇而讀式異同惟四子爲繁後生罔知所依遵可耶於是日柳石邨二子奮任鉛槧之勞以吏務餘隙校讐訂政刻以爲課讀定本焉此書豈止府下生徒奉以爲灋而已哉四方諸學亦將執之授受夫然羣鼓一節衆吹同律無音而不和則所搯皆諧乃至官司之閱其業亦庶幾不惑於聽府僚是舉謂之兩便世之官民可也嗚噓僚屬之於學其用心如此尹氏任使之明可知耳然則府治之益隆而俗興於學以能應聖天子明詔之旨者蓋尹氏之所不難也耶而是必自僚屬校本之誦習于其小學始矣明治六年夏六月伊賀高見岱識（白文）

〔四書訓點〕 明治十五年東京丸屋善七刊本

井上揆「四書訓點序」

四書訓點序

學書楷難而草易學者先自其難者入則易者可隨手而能也讀書之法亦然支那音讀也我邦訓讀也抑兒童訓讀莫難于四書五經苟訓讀四書五經而熟至讀左國史漢不待師授而可能也且學楷書法須嚴正讀四書五經法尤不可不嚴正是以先儒校訂四書五經附以訓點蓋訓點昉於菅原大江兩氏成於清原氏元和以後道春闡齋出而訂之至近時芝山一齋益精之一字一句不苟讀訓式大備塾師率無不由之豈非訓點之所以不可已耶然而學有流派訓點亦不無異芝山專主於訓義一齋主於文理二家互有得失故從一齋點者晦於訓義從芝山點者晦於文理余因折衷二家點取其所長閒竊以己意斷之名曰四書訓點以備家塾讀本極知遼豕然不過取其便於兒童云耳兒童苟由此而讀四書以及五經則至讀左國史漢固不待師授也書法云不從嚴正之法入則不能得放逸之法余於訓讀之法亦云爾頃者書肆丸善來請上梓因書一言於卷首以授之明治壬午三月初六後學櫻塘井上揆敍菊地泰圓書（句返）

四書大全說約合參正解三十卷 元祿十年京都天王寺屋市郎兵衛刊本 又明治本

三雲義正「題新刻四書正解後」

題新刻四書正解後

夫道無他焉率性是也人而率性則爲子必死孝爲臣必死忠凡夫婦之別朋友之交亦必有其道而日用彝倫不可須臾離也而其齊治平之驗不求而自至焉故不云乎道在邇而事在易若夫學道而求諸遠求諸難則離安在其爲道也哉是大可歎漢興來談經奚止數百家然其能得正意者幾家而其間真識血脈路者尤爲鮮矣多厭邇馳遠舍易取難繇是而五車萬軸牛汗棟充而學者泛然莫識適所從滔滔古今皆是也君子病之矣今大清之人有孫右氏耑用力於經學刻苦積年而始能成其書總若干卷命曰四書正解其志欲爲天下后世啓徑者也元祿某年航海入崎島賣書翁某獲之一日問余而曰此冊子倘有益於學者迺吾將壽梓以廣其傳焉子其圖之余就而檢點之務折衷諸家閒附以己意其合參折講事簡而詞白義得而理盡可謂孫右先得其邇且易者矣甚便於講習視彼顧奴失主者大有庭逕於此不自揣竊以國字作訓點功成而某喜而持疾去客有詰余曰是果爲階梯乎抑或爲蛇足乎未可以知也余長吁曰客非知言者居我語女若朱夫子當晚宋稱鉅儒上自六經四子下及通書離騷等書蔑不悉有釋其學宏博其識精深議論正大文章雄渾確乎義操萃乎德風人仰之如泰山北斗實河南已來之一人而後世未敢置異論焉尚且不免於有少出入而況於孫右者乎擇而采之存乎其人焉耳矣要之學道者直從堂入室親見孔曾思孟而可也若徒弄紙上死語不得之心猶竟日對畫餅然雖目視而美之畫餅豈可使能飽人耶然則何益矣客幡然正襟而謝曰我過矣時某來告刻成遂爲之跋元祿丁丑春三月哉生魄洛陽後學三雲義正新四郎謹書

(返送縱)

四書翼註六卷 嘉永元年江戶須原屋茂兵衛等刊本

筱崎弼「翻刻四書翼註序」

翻刻四書翼註序

四書末疏茫如煙海予好讀觀濤王氏之翼註以其簡而要也聞舶來本不多命口概校授書肆某等使刊行焉或曰是書非不簡要然往往有爲舉業設說者君子何取焉予曰無傷也所惡於舉業者以急於干祿非爲己之學也然場屋程文非其說至中不可易也則不爲有司所選我唯其至當之說是取焉而國家固無舉業之利誘人則亦何傷也文章軌範非謝氏所爲舉業編輯乎然天下之學文者莫不師法焉不嫌於舉業也或又曰翼註非欲羽翼本註乎而往往疑本註舉新說使學者不知所適從是殺翮也安在羽翼也予曰亦無傷也所惡於異說者以其不信朱子爭欲勝之也既信朱子則其學必正其人必賢時舉所疑以資商量譬之忠臣之事君或有獻替孝子之事親或有諫諍其何害乎忠與孝也翼註之時有異同於本註亦猶朱子雖信程子之篤而其說不無從違耳或曰善然末疏之刊行者亦多矣何復刻是書之爲也予曰方今學者之於本註淺者囫圇吞棗厭末疏之煩而不復讀故不能知深意之所在深者剖析絲毛汨沒末疏殆失正意之所在是書簡要淺者易讀而深者無汨沒之患矣予欲同吾所好於人所以末疏雖多更刻是書也既而書肆告刻成因書爲或人辨惑者置之卷首天保辛丑六月浪華筱崎弼撰 (白文)

■ (カ、 25655)

論語集益二卷 明治十八年兵庫長尾景弼等刊本

龜谷行「四書集益序」

四書集益序

明王烏傷曰經者載道之文文之至也李性學曰易詩書儀禮春秋論孟學庸皆聖賢明道經世之書雖非爲作文設而千万世文章從是出焉信矣二家之言漢唐諸公於文也皆莫不原經典然而其專論文者以蘇老泉爲始老泉批孟子謝疊山評檀弓或疑其假托然流傳既久爾後陳明卿五經統宗張惕菴四書翼注論文等皆倣之而于惺介四書集益最爲詳核夫文脉不哲則理義不精欲精理義則宜哲文脉故施批圈以標舉其句法章法又闡其布置閒架抑揚頓挫之微則言論緩急意味厚薄灼然可觀如集益是也此書舶載慕希林君櫟窻偶獲之捐貲校刊嗟乎其用心與世之競新射利者逕庭讀者亦能玩文以進乎道其庶幾矣

明治十八年三月省軒龜谷行撰 (句)

日講四書解義二十六卷 明治三年彦根學校刊本

藤原直憲「四書解義序」

四書解義序

聖賢治教之要具於四子之書矣而朱子集註折衷羣言闡發微旨世奉以爲圭臬但以其措辭縝密命意深奧也初學或苦難尋
繹今此編据註旨以講述大義平易明啓使人一讀心領不啻耳提面命其裨補後進豈淺鮮乎余雖不敏承乏藩翰宣德布化職
分所有乃命藩學儒員訂謬誤施句讀翻雕以行于世童蒙之士苟由是而學焉則升高自下陟遠自邇庶乎其達治教之要以供
國家之用矣是余之志也云爾明治三年庚午孟冬從四位守彦根藩知事藤原朝臣直憲撰萩原翬書（白文）

松陽講義十二卷 文政十一年江戸須原屋茂兵衛等刊本

古賀樸「序」 筱崎弼「松陽講義跋（版心）」

序

清陸稼書氏之學以心得躬行爲根柢一生精力用之四書章句集註其所研究辨明筆之而爲困勉正續錄等書讀者可見其深
有得於此而松陽講義乃爲學者諄諄剖析使之務心得躬行者清人稱稼書氏爲國朝醇儒第一尊之也至矣其在仕途再進再
黜官不過七品年止六十三而沒用不究於當時識者惜焉然是固不足爲稼書氏輕重其直道而行顯晦一節視富貴如浮雲祇
足以證所得之深而垂範後學豈曰小補哉浪華某等欲翻刻講義問序於余余素重此書欲與同志共之適有斯舉不堪喜幸然
又竊念夫學明於講而或蔽於講何也學以身心爲本則其所講皆有用不然則徒爲口耳之資借使所講不差亦無益於脩己治
人之實況學而不本身心則如人無家如船無柁瓊尾流蕩何所底止近世畔經倍道之說競起而無所忌憚正坐此耳章句集註
孰不讀之用力篤至若稼書氏能有幾人章句集註末疏如煙海發明深切若稼書氏之書能有幾編披沙揀金苦其難得亦莫非
坐此學者苟能因稼書氏之所講而反諸身心則學之明可期而學之蔽可祛矣是又余之所願與同志共勉也文化十年十月古
賀樸撰（句）

松陽講義余家藏善本往歲書肆某等謀翻刻之余謂是書布世其益於學者不小爲施訓點以授之遷延不果閱歲殆十始就劂
刷乃重加讐校謬誤頗多隨更改正又有存而未定者古人云校書如掃落葉猶信矣因思學者之於經義亦由是乎宋元以後四
書末流更僕難數而純正如是書有幾雖是書之純正在不善讀者或特不能無謬於所解則無益而有害豈翹字畫訓點之誤此
則所當與同志之人終身校正也文政戊子良月望畏堂筱崎弼書（句）

銅刻四書合講 明治十六年樂善堂銅版刊本

岸田吟香「書翻刻四書合講後」

書翻刻四書合講後

方今西教侵入東人靡然將感染其毒不及今豫防則殆至不可救歐陽子曰病之中人乘乎氣虛而入氣苟實則病去今日養氣之方莫若誦聖經聖經切近莫若四書而未疏鹵莽非馳高遠則泥訓詁人將厭其末而廢其本余常慨焉頃獲四書合講其說簡約平易老婆孩童亦能通曉蓋適用善書也因銅版翻刻縮爲袖珍頌東人東人無貴賤無老少日夕攜帶官暇業餘必諷誦之則正氣自充實心廣體胖西教之毒何乘而入嗚呼西教而不能入西人覬覦之心亦將消然則此書不獨防毒之良劑亦可以當防秋百萬兵歟明治十五年四月日本岸吟香撰（白文）

小學類

爾雅三卷 天保十五年羽澤石經山房刊本

松崎明復「跋（版心）」又識

此本係北宋仁宗時刻版南宋高宗時補刊（敬驚弘殷匡胤玄朗恒楨貞禎徵等字皆缺筆其係補刊者版心各有重刊重開記又桓邁二字缺筆餘溝購等字及桓字係原刻者皆不缺筆此可證也）原本京師大醫某君所藏亡友狩谷卿雲借鈔極精余病有宋以來此經滅裂欲訂一本以貽後學顧世無善本忽睹是本急請卿雲獲之入刻有年所未敢出以問世者猶恐其有訛脫也後又得室町氏時翻刻大字本蓋所謂蜀本也（每半葉八行行十六字注雙行行廿一字）詳攷其體貌蓋與是本後先所刻亦有南宋孝宗時補刊（帝諱缺筆皆與是本同其係補刊者桓邁慎三字皆缺筆餘溝購等字及桓慎二字係原刻者亦不缺筆）其字豐肥雖異是本之謹肅至其源流實同故據以訂正參以元明諸本其訂正異同處旁施黑點仍作校譌附末簡庶存是本之舊使讀者兼知二本之同異也是本每卷末有音釋不審誰氏所作（案晁公武讀書志曰爾雅有釋知騫及陸朗釋文毋昭裔以一字有兩音或三音後學生疑於呼讀釋其文義最明者爲定有爾雅音略三卷今此音釋雖零星數紙亦分爲三卷或係音略舊本歟但毋昭裔乃孟蜀宰相而大字本不載是音則大字本亦第宋本而非蜀本也歟）大字本所不載但元明諸注疏本及無名氏本皆收之繪圖本亦取附經文各處下頗有異同因取各本訂正以次合附卷末所以便于檢閱也若夫結字點畫不正者余自有訂定經本在故一依是本之舊云天保甲辰春月益城松崎復識時年七十有四（白文）

昔謀此刻時沼田藩士堀田筠庭光長縮其俸金一鎰所資故是刻不踰時而成顧太樸不可即用校以十餘本予性寬緩卒業太
晚久曠筠庭之高誼又吾七十以後衰病相仍學子渡邊魯山井璞出入持養無所不至小閒則侍筆此校所載如段玉裁阮元郝
懿行諸說皆其所錄入其功兩不可忘因得連綴而書復又識（白文）

小爾雅一卷 天明四年京都中川藤四郎等刊本

大江資衡「小爾雅序」

小爾雅序

夫小爾雅者所以廣爾雅之餘徽熙詩禮之指歸弘六藝之軌範宏百家之門闈者也實博物鑠鑰多識樞機教化之淵藪摘藻之海沂也若夫爾雅者興于隆周熾於炎漢豹鼠得辯斯文遂煥今此青編遺籍孔鮒輯纂嘗閱漢氏藝文載附古今孝經名氏雖闕芳譽惟馨夙續先聖之宗能趨子順之庭當秦破縱擅衡六國爲虜進封文通復拜少傳到於祖龍得雲點鼠居倉議燔詩書謀阨賢良獨懼遺典之滅熄且慮違令之禍殃乃輸書闕里壁中祕藏避世晦跡隱居嵩陽無何甕牖繩樞之徒斬木揭竿之子特重聘幣餌以博士然既託采薪之憂固持畏犧之旨全厥清操貽茲芳軌爰逮宋氏嘉祐宋咸訓釋申義於是舊典倣彰洪邁愈光巨儒經世之儔文林操觚之良靡不仰鑽玩索因循悅懌也資衡棘路鄙人藝苑野客技見譏屠龍職不過執戟才乏乎雲肆之囿識闇于標勝之場濫劄其謬愆謾奪其紛錯覃思研精校理檢覈庶幾博雅君子補掇遺漏天明癸卯冬至日平安大江資衡撰（句返送縱）

廣雅十卷 寶曆七年江戶大黑屋彌兵衛等刊本

井嗣昌「再鐫廣雅序」 伊東維寧「廣雅跋（版心）」

再鐫廣雅序

廣雅之爲書也魏張揖本諸爾雅而廣之也夫八方殊語庶物易名同歸異指斯書也詳辨三才博釋萬物真六經之階梯古文之訓詁稱謂之學蓋具于此也孔子曰爾雅足以觀於古足以辨於言矣廣雅亦復爾欲審六經者捨之將何求哉而千載寥寥罕傳于世間得之而多祕不出故不知斯書之誠足多識鳥獸艸木之名也惜哉於是乎補其殘闕正其訛謬再命剛生以壽于世云寶曆紀元之七年冬十月蕙洲井嗣昌胤卿撰（白文）

爾雅之廣命之曰廣雅歟精其悉矣吾友井胤卿者頗好字學嘗得此書藏之乃曰是書也訓詁要□博文是據抑爲有益惜哉□刻之少謂之何也今□丁丑夏私爲檢閱遂命剞劂梓成示余余曰夫雖有嘉肴不食無其知味此書有益也胤卿氏之功其勉矣是爲跋寶曆丁丑秋伊東維寧（白文）

逸雅八卷 寬政四年跋活字印本

田盛範「逸雅後序」

逸雅後序

若耶之鋌赤堇之精破而出之涸而出之神之神雖爲神之神者無風胡歐冶之工則荆臺之礫爲人所胡盧歐冶所營而薛氏相之始齋國之重寶得太阿工市之美焉蓋五經之存在於人間者譬若耶赤堇破涸而出者神之神雖爲神之神者絕而無歐冶之工則又唯爲人所胡盧不可爲何之如而已矣嗚呼非斷髮揃爪煤身何以爲神也範也近來閱于方間得武林金氏五雅自序云經有五雅亦五者何存雅以準經也嗚呼天地爲萬物郢五經爲衆說郢聖言幽遠條流雜分唇言曼衍欲近正之者莫若雅景純所謂九流津涉六藝鈐鍵也噫以範謂之也五經則若耶赤堇鋌精而五雅則歐冶薛氏之工也始齋國之重寶得太阿工市之美者也嗚呼金氏之功于後世實斷髮揃爪以到神者也今也取足利學之古以活字刊之爲我輩廣焉爾云寬政四年壬子仙橋田

盛範撰（白文）

匡謬正俗八卷 明和七年京都林伊兵衛等刊本

清田絢「匡謬正俗序」 倪懋績「跋（版心）」

匡謬正俗序

浪速木世肅翻刻匡謬正俗求序於予予謂斯書在今日必可行而或恐不行蓋方今道藝之士務作名高才者一意勇□昧者恬於苟且正誤之義闕焉夫古今載籍之多稱呼名義之謬必可改者有焉不必改者有焉不必改而不改尚爲有識所恨焉必可改而不改夫謂之何寡聞自□固屬不可□徒務博洽不事講習亦終乎言誤雖多亦實以爲博而能精研而究之而後謬可匡焉俗可正焉乃斯書之於藝苑亦可謂藥籠中物矣世肅風流好事而能爲斯□不亦美哉因書而歸云明和己丑之春播磨清絢（白文）

高孺皮手一本而謂不穀此木世肅之所校刻者曰匡謬正俗八篇也世肅使我識其後我冗矣且執筆研清君錦先生已弁其首則跋必以倪大夫此孺皮志也不穀之於世肅未嘗接見而知聲光赫赫頗有覽輝之望以爲大業盛事屬之斯人毋論吾曹之所推挹即一時名雋扼擊而談操觚之業者瞠若乎後矣未嘗不躍然而允也顏祕書精核訓詁據該明必暢本源時人謂班孟堅忠臣世肅奇思奕奕獨出人表古篇異□世所希者必注問世可謂振古之傑而顏祕書忠臣也哉一稱矣余閱唐史傳顏祕書多藏古圖書器物書帖性甚愛焉世肅亦而尸而祝祕錄奇牒支棟又蓄古雅風流諸佳置以極綜博也二稱矣顏祕書嘗丁於廨裏顯刊正事先秦西漢百家之晦癖聲棘而猶有未哲者迺簪弄都下富室子若而人而與讐校迺竄選中當是時使世肅假爲其土着則必滿籛耀光才氣凌雲得大肆力於弘學今者世肅雖後於萬里之外豈何異當年据於一廨裏儼然廁其選中者也三稱矣然則世肅之於顏祕書偶然而偶耶偶然而偶者不偶然而偶也苟知偶然可偶而不知不偶然之可偶則不可得而稱矣明和庚寅夏六月茅渤倪懋績識（白文）

連文釋義一卷 明治九年京都水原平臧刊本

水原芝跋

余少時學詩文每苦熟語難解而未見先賢註釋及之者常以爲憾焉頃日樓居無事偶閱昭代叢書中有連文釋義一編先獲吾心者狂喜如得至寶友人見之亦源賞之愆□曰是書大有益爾蒙學與其帳祕不如公世共同其喜也遂校訂上梓因誌其由明治九年避暑□暇之月耻堂仙史水原芝美瑞氏并書（白文）

經傳釋詞十卷 天保十二年刊天保十四年江戶須原屋茂兵衛等印本

東條喆「刻經傳釋詞序」 森川政名「跋」

刻經傳釋詞序

解經之要在明古言而已矣古言明而古義通古義通而聖意可得而睹焉是清儒之所以顯務古學也清儒解經必取徵於古雖隻言半詞旁搜博引證左羅列讀之者不勞探索而古義可見矣乃聖意之睹不睹姑舍之其言皆有確據而不墜於臆斷浮論蓋攷證精覈經學隆盛前代未之有也宮保阮氏建學海堂於秀山之麓裒天下解經之書收以爲一千四百卷其書目百八十餘種述者七十餘人名曰皇清經解中有王尚書引之所著經傳釋詞十卷摭摭經傳之助語上自唐虞下至秦漢凡係助語者悉蒐羅之參伍辯證賅備無遺其憑此以發明經旨者居多孰謂之乎者也助甚事也此書一出如盧允武助語辭張溥初學文式李廷機操觚字要湯賓尹操字法石成金文字竅膚見■聞誑曜於鼻閒栩栩措大執簡之閒者奚翅殘星之於太陽乎哉引之又著經義述聞其書并載經解中述其所聞於廼父王觀察者云考鏡瑩然發揮古義蓋有家傳在焉今推其餘光及於此編採掇之洽詮釋之詳可以照鑒千古助語之眞面目其功不亦偉乎夫助語之於經傳也詞氣之緩急緊縵意象之婉曲直切析毫分芒於單言隻字之閒煥然若見之乎今日者之乎者也助其形勢古人不一字苟焉其關聖人之大訓不輜矣然而自漢以來釋者唯曰辭也未嘗有詳語其義者故後世視之若贅旒然方其作文之時濫竿射覆動致錯謬恬乎不復顧其字義之如何皆坐乎溺流而味源已今引之振鐸於此以警發之所謂周誥殷盤佶屈贅牙者其亦庶幾乎春融而冰釋矣森川子正以斯編在大部中不便繙繹欲表出而飜雕之以廣流傳請余校之乃閱帝虎加點乙而敍其概天保十二年辛丑九月之朔江戶方庵東條喆撰渡邊■書（句）

■ (ㄋㄨ 35801) ■ (ㄟㄣ 7857)

跋

學海堂經解端衰漢唐古學之書與通志堂經解聚宋元以後說者新古相杭猶漢楚割鴻溝焉如其勝敗則未可測也唯考證之賅洽精覈確乎不可拔之勢學海堂實爲金城湯池力猶有餘推轂助語如王引之經傳釋詞通志堂所未備也夫古今儒士之於經傳字字句句人皆知其爲龍泉極力磨礪之至于助語則棄置之若折鈎之喙誰復信其可以爲九鼎乎哉引之乃兼採駢收詮釋別裁闡邃析微炳如觀火譬如奇兵之將驅策熊羆貔貅猛虎衆人不得馴擾者出翠被豹舄組練百萬之後掩其不備可謂奇觀矣若夫昏迷蚩尤霧中者則是書其爲指南之車矣天保辛丑九月中浣江都森川政名書於雙柳舍渡邊

■ (イ、ノ 7857)

(句)

說文解字三十二卷 弘化四年序刊本

小畑行簡「說文解字注序」

說文解字注序

昔在倉頡氏見鳥獸之迹依類象形創造書契由是六書作焉八體始焉率土之濱書同文字法合準繩照萬古於今日鑑今日於萬古雖千百世之後事皆由此而行焉其用廣矣其道大矣然後世文字名實混淆不明且覈者閒亦不鮮於是有許叔重氏說文解字者出焉六書之法粲然明備類聚羣分順列次序貫徹條理譬之衣之有領綱之有目洵萬世字學家之模範也嗣之又有二徐氏出其訂正補翼之功不爲尠矣最後清人段玉裁氏亦著說文解字注及六書音均表五卷蓋其學博覽洽聞長于考據精于引證俗語方言無一所遺取彼讐此取此較彼必折衷軒輊毫分釐析以本義爲經以引申爲緯大牖後學之眼目以此觀之天下字書孰有踰於段氏者余嘗從書估購得一本晨夕披覽檢考不措句逗訓點彌七月而功竣此書有三難獲焉曰舶來稀有曰非細檢精究則難解曰價甚貴余乃訂之紕繆欲上梓以便于後學學者能覃思此編則文字之濫觴義理之詳悉法則之定格自然瞭乎心目猶撥雲霧而睹青天也是爲序弘化四年歲次丁未春三月識於詩山堂南窗下小畑行簡內山高基書（句返送）

重刊許氏說文解字五音韻譜十二卷 寛文十年跋刊本

夏川元朴「跋（版心）」

說文解字漢汝南許叔重之作也爲其篇也分類以聚字次韻以著聲所以其象物而著形粲然明白曰隸曰偕曰眞曰艸皆宗之以變化者也固文字之鼻祖而韻書之權輿也欲學字者捨之將何求哉頃者書肆欲鈔之梓以壽于世矣而需訓點於余余閱之三豕渡河之舛蓋以不少於是訂其紕繆而証之以他書所其疑者闕之以俟博雅之人云爾寛文庚戌姑洗良辰後學夏川氏元朴謹誌（白文）

大廣益會玉篇三十卷 慶長九年跋拋南山書院本重刊

鐵山叟宗純「玉後序（版心）」

此書是蕭梁顧野王先生所選爾來支桑見卷於美□墻者也雖然厥板則少于□童蒙者時時苦昏迷故是本祖博兩□傾心以鏤於梓正運純孝兩匠□力既工畢矣藏置諸京□四條云伏希唐鹿□□寸陰曷耀心之白日蒐蒐不惑萬年永廓胸之春色矣慶長九甲辰夏五月日鐵山叟宗純漫書其後（白文）

縮刻唐開成石經付五經文字九經字樣 天保十五年跋刊本

松崎明復跋（新加九經字樣）又「縮刻唐石經例言」

予嘗病近世學者徒務浮說碎義而不執乎經文謂雖學倍其方亦無經本之所致因欲刻單經善本以貽後學乃取唐開成石經撰善書人縮臨之（各經首卷友人小島知足所臨第二卷以下學子河瀨汝舟三浦汝楫臨完）訂定以謀上木而一貧如洗不能終其緒於是我侯首刻三禮肥後新田侯刻孝經論語爾雅皆捐貲見錫予易詩書則西條侯三傳及五經文字九經字樣則佐倉侯皆爲刻而藏之然後唐以前之經本巍然復全於世矣夫十二經六十餘万字悉皆聖人之遺言學者不可不背誦而腹笥焉苟日習三百不過數年瀏亮可上口而存其大體玩其經文久而執之冰釋理順文義自通而其疑義錯節所叵解者從多聞闕疑之訓不必強爲之說雖不足以喻人亦足以自喻矣若夫有餘力而考以傳注證以史子參伍錯綜演繹貫通則亦唯在温古知新之士由經文推求之耳嗚呼吾老矣眼花蒙朧精神衰耗雖知其是而已晚矣後進之士習之於少壯之年勿失其時所謂用日少而畜德多三十而五經立者可以庶幾已矣此予所以有是舉也歲次甲辰天保十五年夏月前掛川教授益城松崎明復識

（白文）

縮刻唐石經例言

一開成石經之刻先於後唐長興三年始入木時恰一百年矣長興本取以爲本文編入毛鄭何王杜范諸注當時謂之編注石經而有宋一代以長興本爲甲令收民間寫本不用則兩宋元明所刻悉皆石經子孫雲仍也而副墨洛誦不能盡肖乃祖甚者化爲呂氏之羸則是碑安得不尊而宗之哉故今所校刊畫一循奉其殘闕剝落處則據宋本最古且確者補入施點右旁以別之一石經雖最古可貴時有訛謬加之摩改頗多或立石時所改或出後人所爲案北宋時唐世寫本佳者猶存學者私據校改以入刻故其善時有出於石經上者焉如皇國所傳古鈔經傳更爲隋唐佳本故今以所據宋本及博士家所傳古本一一精對考之以

注疏證之以釋文石經誤脫無疑者從諸善本而改補之疑不能決及後儒考證確不可易而無別本可據正者姑從原本竝發圈左旁仍收其字與說於卷末要之天下之善非一人所能定在識者擇而采之其摩改者以改爲正則不點

一各經行間有旁添之字左傳一書最多率賤儒據俗本所補今例從刪落然或有與諸善本合者則從而采入之依前例左點收於卷末

一古文尚書之僞自宋吳棫已疑之然其說止於字從句順後儒疑信相半以朱子悍然自信未敢斷其僞至清閻若璩始著書駁之不遺餘力繼焉而出者江聲王鳴盛益鑿而精之雖時傷過刻而作僞之迹顯然盡呈今則三尺豎子皆知其爲贗矣而此刻不敢刪者其書則僞而其言則零金碎玉莫非聖賢佳謨故未知其僞摘其瑕而暴之已知其僞標其善而保之是亦好古尊經之義也然猶嫌其眞僞相亂是以句首尾而限之讀者詳之

一戴記月今一篇乃玄宗命李林甫等所改其妄不待言故一依宋本入刻其字則仍校之以結體猶正也

一唐諱缺筆者依字填之涉諱用或體者則一依原文牟■耆正訛字也而各經互用憾感墜隊古今字也而一章岐出凡此類極夥正之不可勝正至廿卅乃石經用字之例故亦皆依原文竝不點發標異間有改正者乃筆滑所致非例也

一原刻末附五經文字九經字樣則全部字體當據二書訂正而此刻不盡然者隸變或字古人所以不廢經典相承已久不必取此以捨彼也今二書仍附帙後讀者遇字體可疑就而檢閱之是非自判但二書剝落處馬氏刻本妄意補入不足以校今無本可據補故一依唐碑他日或得宋元佳搨當補刻爲完璧爾益城松崎明復識

■ (無字)

■ (無字)

韻府古篆彙選四卷 元祿十年序京都柳枝軒藏版刊本

天德吳雲法曇「韻府古篆彙選序」

韻府古篆彙選序

史籀制大篆李斯造小篆是大小篆所以權輿也大篆之文世罕學之小篆之文歷世學之讀書者豈可不傳習也哉先師東臯嘗嗜篆文東渡之日齎古篆彙選來于崎港于水府常置座右臨寂遺言獻大護法西山源公公曰是有益之書且東臯將來也不傳于世因命京師書舖柳枝軒方道未踰年而梓成公命序於予予謂先師禪者而携之殆違宗風雖然古曰實際理地不在一塵萬行門中不捨一法文字海中遊戲三昧何不可之有時元祿十年歲在丁丑臘月穀旦天德吳雲法曇謹識（白文）

隸辨二卷 寬政三年刊四年大坂藤屋得兵衛等修本

奧田元繼「重較隸辨序」 澤田麟「重刻隸辨序」 鎌田禎「考例」 森高美「題隸辨跋」(難讀)

重較隸辨序

八卦肇啓文字之機緘暨蒼沮之徒出象形會意結繩之風頓易焉迺王治聖化之淳厚懸象輿圖之萬有成繇是而出焉其道之與物安得可以耳目心臆旦夕計者也哉必博羣書廣考索而后其庶乎秦漢之間其文皆篆隸隸分二體即是正書變而楷而眞而行草後世聚訟多多屬陳腐已清人顧藹吉著隸辨一書自言爲解經作也故隨字附注悉參秦漢已上而折衷之峻詘近俗徵古雅綜該簡要無查此遺彼之患也然此書舊以韻相衷如唐韻廣韻韻會韻府之類故昧韻音者每每難之浪華鎌田禎稽古之暇肆力竭智爲後學津梁於是乃準許梅二子義例從一字畫數統之一處爲序次注釋亦相隨而移考閱之便其功頗鉅矣然是非鄙意之初有所能加也字字翻顧氏善本纖毫不爽爲要焉若夫初學之士欲習隸法通古訓者較勘精詳有取于此則數月之後必當知其眼目手腕不同往時境界矣寬政三年辛亥秋八月穀旦播州奧田元繼題于浪華拙古堂中 (句)

重刻隸辨序

班固氏藝文志秦有八體書漢有六體書其最著而傳于萬世者惟篆與隸是已秦始造隸書矣施之徒隸也程邈所奏雖其體蔑爾無間然炎漢四百年因循所用惟此隸字若夫鴻都學門所樹蔡中郎獨擅美焉豈得非雲陽所獻哉魏晉之間藝苑之雄鍾王接迹而起樂毅黃□之作亦謂之隸實乃楷書一時貴重以爲楷式而鴻都之跡闕然不講於是乎八分之稱聿興唐韓擇木蔡有鄰輩極摸漢碑時謂善八分亦惟晉宋已還之稱自斯厥后隸分之說紛錯聚訟後人之惑滋甚夫隸者古來相傳之名不可易者也宋歐陽公勒漢碑爲漢隸古隸之義始與可言已矣趙氏金石富於歐公隸釋隸續確乎論辨豐碑石柱歷歷在目下字源之著錄三百有九咀味菁華彬彬近古逮隸辨一出而建武鴻都之舊歐趙集錄之藏隸釋所詳字源所漏悉聚無所不附載可謂漢隸

之高古亦於是盡善矣頃浪華鎌田志庸爲此帙也易音以畫檢討益便蓋一發簡而粲然若列朱鳥龜蛇於圭首而縱觀之也自今而後隸文之學復鴻都之舊其有茲舉抑程邈所奏又何言闕如無聞乎哉寬政四年壬子正月東江源鱗撰（句）

考例

一此書原本以韻探字今倣說文字彙舊法就偏傍畫數而立部首庶幾便乎搜索故擇原本之紙潔字明者剪取各字從其宜粘之猶古之活板是以於字體則無毫釐之差謬矣

一此書以覈字體辨正變爲要故注解亦不涉者體之異同者多省之覽者諒諸

一原本字兩韻者出兩所譬如中邊之中本音平出東韻中當之中轉韻去出送韻中與仲通者又出送韻善惡之善本音上出獮韻善之之善轉音去出線韻上下之上本音去出漾韻上升之上轉音上出養韻讀誦之讀本音入出屋韻句讀之讀轉音去出候韻之類雖有四聲之異而其體同者芟之異者互出

一每字以楷書更其端使覽者易分其體已惣計三千三百二十六字隸字惣計九千四百四十五字環齋鎌田禎識（句）

隸辨四卷 明治十五年東京瀨山直次郎刊本

山長宣光「增訂隸辯敘」

增訂隸辯敘

唐以前分隸之別明白矣自宋歐陽修集古錄誤以八分爲隸諸儒多惑焉或云古者分隸兼行鐘王變隸體始有古隸今隸之別或云有秦隸有漢隸有八分八分謂漢隸之未有挑法者漢隸至蔡邕有挑法與秦隸同名其實則異又謂之八分是皆思其別而不得強爲之說者也試徵之唐以前書梁庾肩吾書品曰尋隸體發源秦時隸人程邈所作今時正書也東魏韓毅大覺寺碑實楷書而毅自題爲隸書唐張懷瓘書斷曰隸本謂之楷而八分別爲一體六典曰八分石經碑碣所用隸書典籍奏公私文疏所用若當時以八分爲隸諸書所云決不如是然則古之所謂隸即今楷今之所謂隸即古八分又何疑夫八分與隸均出於秦而東漢王次仲推廣之始盛行凡刻石莫非用是體者蔡文姬述其父之言曰割程隸字八分取二分割李篆字二分取八分故爲八分書而蒼萃其書者宋婁機漢隸字源元馬居易漢隸分韻明方仕集古隸韻等不爲尠至清顧藹吉著隸辯以補婁馬之徒所未及尤爲詳確識者舍其名取其實焉東京安藤龍淵精於金石學者也頃者重校顧氏之書刻以行于世徵序于余余謂學者往往據古碑文字參考經子如以修華嶽碑兄乃盛知管子大匡篇兄與我齊國之政之兄即況字以平都相蔣君碑光光播播知周礼士師播邦令之播即矯字之類不一而足則是書非惟點畫波磔爲書家之模範抑亦可以爲學者考證之資矣但其襲舊稱而不改故略辯分隸之別以冠其首云明治十四年長至前三日毅堂山長宣光撰萬荅三兼書（白文）

字彙十二卷 天明七年京都風月莊左衛門等刊本

笠原簡室「字彙增註補遺序」

字彙增註補遺序

字書之來舊矣伏惟太極是生兩儀兩儀未分其氣混沌清濁已分而人物生象形具而聲音出凡天地之大鬼神之幽古今之變事物之頤以至道德性命之微雖有精粗小大上下顯微不一而靡不各有名存所謂字者固已隱然于六區之間矣維處義氏作仰觀俯察畫一奇以象陽畫一偶以象陰而字書之端見矣蒼頡變卦爻摸鳥迹引伸觸類而六書之制立焉然後作字書者大率宗之少昊感鳳凰而作鳳書高陽感蝌蚪而作蝌書周史籀依頡書作大篆秦李斯省籀篆爲小篆次仲八分程邈隸書鍾繇正行史游章草漸聿興然字書肇於一而窮於萬有一千五百二十之數蓋有契于乾坤二篇之策也而六書之義始于象形繼以諧聲良有以也凡有形者象之日月是也取象諧於聲江河是也字必象形立而聲音出形母也聲子也天下容有無母之子也實求子者必歸諸母而後知所從出矣篆隸行草之體出而天下無遺書平上去入之聲形而天下無遺字配以五音弁以三十六母而各隸諸部則字之清濁輕重反切死活于是乎定而天下無遺名也自史籀以下諸家皆以字書名漢楊雄採之爲訓纂許慎兼采之爲說文梁顧野王增加爲玉篇唐李陽冰嘗崇尚於說文修正筆法自謂篆籀中興似有得乎象形諧聲二義但子母無別識者病之切韻類譜之分四聲始於沈約隋陸詞輩又增廣爲韻會唐孫愐雅俗改切韻爲唐韻或取其偏傍相同或取其聲響相協皆有功於字學者說文舊無翻切宋徐鉉取孫愐切韻附益之陳彭年增唐韻爲廣韻庶幾攷形聲者各有攷據矣大抵類形者主子統母而不類聲類聲者主子該母而不類形未免擇而不精缺而不備矣景祐中丁度加修廣韻爲集韻司馬光爲類篇而類韻書略諸作出至金王與祕推廣玉篇區其畫段爲篇海荆樸取司馬母聲清濁之邊添入集韻歸之五音亦隨母取切檢閱甚便而反切無恙矣粵迨明太祖高皇帝稽古右文萬幾之暇詔儒臣校編韻書刪繁訂誤命曰洪武正韻是書一頒舛謬者正缺漏者全非收沈約之音難而用夏蚩夷皆知所從宜萬世不刊之典也而以來字書韻集皆本正韻作之也今此字彙其端其終以數多寡其

法自一畫至十七畫列二百十有四部每卷冠圖俾檢者便若指掌其義則本諸說文而下箋譯裁以己意刊其詭附芟其蔓引卒以歸于雅攷信于正韻制也若反切直音之合後有直橫二圖其製也列以於四聲配以於五音收三十六字母而建四十有四韻母形備而不遺子聲統而不殘允推爲書學大成矣然說者曰宣城一集厥功最鉅乃諸家之失習而不察又未嘗搜羅經史攷訂音義故挂漏之處亦頗多焉原夫■載於管子■山著於山經亢倉之■國策之■禮註疏之穿詩註疏之嶽以至鑊歌有■宋臣名靖之類皆先生所缺略而茆茆之不宜析白白之不宜合禰衡之不當从祧八廚之不當音皮譌處正復不少此其故何也智者千慮之一失而已余每開卷不能無遺憾焉終以誦讀之餘徧搜字韻閱書幾及五十余種研思刻意詳加校訂明正譌謬補其音義闕略而名曰增註擴其奇字漏失而名曰補遺且繫以韻母四聲復統以清濁四等而欲使童蒙無載酒問人之患穹雖僭踰起先生于九原進後學于百世誠知有所逃罪云爾時寬文壬子仲呂莫生武江後學簡室題（返送縱）

■ (ケイ 8056) ■ (サイ 8140) ■ (キ 9290) ■ (キヤク 11730) ■ (音不明 25231)

翻刻康熙字典序

六書者古文要之而行藏於古也有時矣其常言結繩肇乎上古迹衡縱象園方鳥跡出乎中占有象謂之文有聲謂之字施於簡謂之書則可知於厥立德立功之際將以有爲也道之以政乎結繩以佃以漁其諭於利也速矣夫言施之簡爲有質然書契取之蹄迹法既其深矣哉籀篆出而異古文李篆起也專勤秦文不合者罷之其愚黔首也本非所以有耻且格也鬼其奚哭爲其說者有所偶矣幸哉聖人有取於古文以載禮蒙樂至今其立於泮宮列於庠序炳炳乎千古駸駸乎萬國豈苟而已哉亦唯可樂其成無奈其始何而已是其爲有時也政漸繁乎事物隨之畫篆不如畫隸之易雖欲不移得乎訓方氏之跡廢而九服之言逸焉各國自用字勢亦不一爾雅之博所遺不爲少矣矧哲人多起北而著書忽諸南學者勉之則知乖而同殊而通世有方言者爲之故也而揚氏與非其揚氏未可知之漢既受秦敗禮樂壞崩遂開獻書之路則壁中之藏早行於世焉時尚有能蒼頡者揚氏以爲莫善於之作之訓纂亡幾及新莽改定古文求達之士以取進恐其新文者出焉更始之亂也典文殘落光武未及下車補綴闕文至永元之末許叔重註考六經取正賈景伯諸儒建之首列蒼頡文五百四十部作說文十四篇九千三百五十三文以發蘊六書具亦一時也藝苑廣衍九百而不已創體離靡雜家方是競作者假而尚爲不足且合圭暮分璋泛有名乎隨作之字貌有似乎卒屬之音有義緣聲而移者有音與義兩失者至翻於梵譯於夷則未得義之音閒有未充字之聲或見加之通徹明昭所諱遂缺完治亂面背所反將紛聞欲取徵乎六籍言先絕義後乖有註者牽合緯而累經文觀後之弘經人早與晚汲汲今文時茂密時簡踈人意所趨日踏其跡叔重之書既疑乎非其舊有石經古文者欲反之轡耶又所謂石鼓也者何足據哉三易古書及汲冢燼餘各有奇字糅其中焉或疑是猶李之秦文乎玉石混淆將如初學何字典之書不可已也於是乎興曩者有字彙既收三萬三千一百七十九字視之許氏既倍三而有餘續有正字通善搜括古今究其辨駁本篇因襲之芟煩翦蕪博採經籍遠及釋氏或揭案發前人之

未發其附有補遺有備考有等韻大造孰與此篇津梁矣樞要矣得其時哉得其時哉蓋於字源也以說文之義爲優旁駁長箋之逞臆若正譌精蘊其說基於大篆所馳既岐是所不取也博雅雖降載爾雅之不載釋名多苦註亦足觀轉音所由不可罷耳惟夫雖古文也其一世而得備哉象形先就象意次之日月先象雨露漸成若總謂之天則可知乎其最成於後大東之與彼通也厥始邈焉或在彼三代之間乎而文字之來積世而漸專於秦漢也非必須蘇因高備眞備可得而已矣今也莫加牽合則有似合美濡之音以訓之水水氣之音以施之月厭冢之音以名之天乎雖一隅之所見尚有所竊埃焉矣若果足爲可行則不可謂無上古以若所爲得若所爲而可言者豈止之哉大氏會意啓行於彼亦尚有不得稅駕者若夫訓於天也其道與事未易言焉若從會意則先定大字而後可義耶蒼頡姑置焉今見秦碑者大與六形相近是或誇六國合一以爲天之義乎即所謂秦文者邪或取六天從六合亦皆得義或云天者覆也■爲其象從一兩端下垂是猶可謂幾乎全又云地上半形者據地球也許氏從大上之一會之意而謂至高無上也豈解字之謂乎今之楷書上畫短而中畫長人漫不欲聞其義不言乎人世最一之大非天而何前下垂云半形云安其鑿乎是謂之字政未得綏定亦可也矣然與求之於野寧取於古文乎許叔重於時備五經無雙而猶間有弗合者亦見其弗弘假借也爲慮流而無攸止乎哉李陽冰一時名於篆也弗苦究六書之義各有所見也六書雖可知古文學者所以不專從事於此也矣東方新字若干卷境部石積之撰厥目見於國史而不普於後世或云古風篇什僅存其遺豈唯文而有行藏乎音亦有所變移夫翻切亦殆未易習嘗有五十位國字今尚專也當時傳吳音者能得通於我音而所作也配之國訓應譯漢字與漢字相依而馳■以若所爲東往酬來以若所爲草風稿什旁從其縱橫而可擬翻竊其用各適其俗故雖切音之書行於古音母之學不勉之乎則四聲不揚不憂開合不暢不意乎不或曰乎我用我音一行喉音洋洋焉足何所闕而圍圍焉苦昔者朝命脩漢音立之博士置之生必也期深造於後世莊嶽之計遂不成背馳至于今日何如也或云當時既難於更轍授者倦其固也依轍勢而左右而已則可知也今之音即太古之音維錯或有說云相去千有餘歲彼既音降而爲韻四聲日是勉焉奚翅變於我其然乎古云假借今叶音之稱若其有音義之事於上世則其不移也猶依軻而試馭焉五十位之與邦訓並馳也應不知其所駐抑亦天之所區別音亦從焉乎蓋反切之業竟不能不因音母也字彙始加音字於反切下爲之捷徑後之字書効而焉依今觀其所音各可疑者

多矣音韻之書始於聲類成於唐韻及正韻愈益備焉括盡諸家若掌中也唯此篇爲然若夫縱通之法邦學未得其蘊也坊人謀
錡鏗也久之既往丙戌屬予增訂茲年刻成亦令有言於厥首於是志其小者不耻不敏云大日本安永戊戌春三月浪華都賀庭
鐘識（句返、送縱）

■ (ケイ 1506) ■ (シユウ 44891)

康熙字典十五卷 明治二十年渡部温銅版刊本

中村正直「訂正康熙字典序」 野中行「訂正康熙字典序」

訂正康熙字典序

渡部知新訂正康熙字典成敍曰書莫備於康熙字典而康熙字典莫善於知新訂正之書余始不知康熙字典有誤謬如此之多也及知新之從事于此聞其緒論乃知訂正之事洵有不可少者知新極力網羅古今書籍或借諸人或自往各所官庫必得其引用原書相校對余家頗多鄴架知新借書之車時輾轉於戶外也昉業于明治十二年二月畢功于十八年九月七年之間人事不問寒暑不輟何其勤也余嘗謂訂正舊書有時乎其功倍蓰于著新書如此書幾乎家家不可不置一部者乃訂正誤謬使歸完善其用無窮其惠无疆知新之功可勝言耶蓋聞清初君主召集海內學者優待供億使次第編纂大部書意在收拾才傑之士不使懷反側之意亦政略之一也今以此書原本多訛謬察之此說或然如知新此舉則非由他人獎勵獨自企圖而獨力任之其誠心實意之效誰復出而掩其上耶明治十八年十月敬宇中村正直撰 (句返縱)

訂正康熙字典序

小學之書至康熙字典而大成天下奉爲準臬然注中所引之書往往年紀差違篇章字句有脫謬學者惑焉豈纂修者諳記背書而適失之歟抑承字彙正字通之譌未暇是正歟吾友渡部知新竊憂之憤然自奮把經史子集一一對照又廣東所舶載之字典閒有異同亦考訂之獨力網羅起明治十二年二月七更裘葛而始能竣功可謂勉矣於是乎瑕疵絕跡瑜璧完美凡考異一千九百三十餘訂誤四千補前人之缺解後學之迷其有功斯書也大矣昔人謂杜征南顏祕書爲丘明孟堅忠臣如知新亦可謂康熙字典忠臣哉刻成爲之序明治十八年十二月壬辰靜岡猪野中行撰 (句)

三字經一卷 嘉永六年序愛蘭居藏版刊本

橫山卷「敍」 札幹暢「跋（版心）」

敍

人有恒言皆曰我多事矣不暇讀書我務讀書矣不暇及書堂是無他其胸中無餘地耳苟使胸中有餘地則書何不可讀也藝何不可及也故古之人洪文博學或來於多事鞅掌之間善書巧畫多出於讀書勉勵之餘大野藩札 君愛蘭職務繁劇夙夜拮据而旁嗜翰墨晉唐而下歷代名跡隨得臨撫朝夕不倦故自篆隸以及真艸咸無所不能隆專門名家恐不能過焉是非臨事明決胸中有餘地則豈能如此哉頃者正書三字經一通將梓以授子弟使余題一言余與君相識非一日矣故□前言以弁之若夫書之雅正妍秀觀者自知之何待喋喋乎抑世之遑遑者視斯卷亦必有慚也嘉永六年春二月湖山學人橫山卷誌（白文）

用筆結字隆小技豈可無其法哉柳公□云心正則筆正歐陽詢云斜正如人此□皆足以爲法是余安觀古之名筆風神逸氣□于□表譬如對點人君子使人自消猶□之心是豈法然哉方今以書名於一時者不少然熟視其筆蹟大抵俗氣不□鄙野可戲□人情□□備□臭腐奪其精神也手□有臨池癖下自宋元上遡晉唐名家妙墨無不□□空耗歲月未覺有所仍雖然一片婆心無使□□□學書之法不特在筆□而在其本心因書彼輩□誦習三字經一篇以□用筆結字之一□且□出柳歐二家名言以授之云嘉永癸丑春三月愛蘭札幹暢識（白文）

四字經一卷 文化四年刊江戶岡田屋嘉七等後印本

大窪暉跋

右四字經一卷者明蕭良有氏所著也其爲書上自羲皇下至趙宋其間前言往行可以勸可以戒又不可以不知者四字成句協以韻語以便課誦幼學之徒雖未必通其義若能即此諳古人之名姓字號則其於穉習之助亦不無小補也因乃以先生校閱本刻之其塾以授兒曹云文化丁卯五月大窪暉識 (白文)

發音錄一卷 元文五年江戶須原屋新兵衛刊本

水野元朗「跋(版心)」

本邦讀書類不辨四聲唯方語是依所以失字義也幸得張氏發音錄其書活板謬妄頗多我北□乏華本不能考訂焉客歲從□馬于東都謀諸吳門延年延年曰物其有矣我藏說郛待善賈者也張之錄在其中矣乃請爲校讎改正焉延年因願上木余曰可哉余今茲任滿秋以爲期持以遺同志維其時矣促令成之元文己未夏六月朔大泉水元朗識 (句)

大清文典一卷 明治十年東京青山清吉刊本

金谷昭「例言」

例言

一 近日於坊間得舶來本漢土文法書其書曰文學書官話 (Mandarin Grammar) 音論字論句法文法以至話說用法章解句析逐一備論無所遺蓋彼國文法之說實以是書爲嚆矢矣從此法分解論釋百般文章修辭論理之道亦可以立也其益文學豈淺尠哉因重刊之改稱大清文典以授同學之士云

一 唐音及俗語難解者經重寬穎川君之一讀而施音義焉

一 唐音有二種一曰南音一曰北音今所施一從南音

一文義訓釋經弘國阿部君之一讀庶得妥貼矣卷末所載漢英對譯亦係君所寄令以識篇內譯義所原焉明治十年六月金谷

昭識 (返送縱)

人名索引

- ・この索引は、本集成掲載の序跋撰者名（原則として本名）を五十音順に配列したものである。
- ・人名は現代假名遣いによって配列したが、読み方の判然としないものは音讀に従った。
- ・序跋題にある括弧の用法については、本文凡例を参照されたい。（小野澤 路子）

序跋撰者名	序跋題	ページ	書名	
あ	青木萬邦	「跋（版心）」	42 禮記正文五卷	
	赤松鴻	「題書疑首」（難讀）	24 書疑九卷	
		「跋（版心）」	77 孝經一卷	
	秋山儀	「新刻韓詩外傳序」	35 韓詩外傳十卷	
	芥川元澄	「書疏跋（版心）」	20 尚書註疏二十卷	
	朝川鼎	「孝經會通序」	84 孝經會通一卷	
	淺見安正	跋	45 大戴禮記十三卷	
	阿部正精	跋	74 孝經一卷	
	い	石川英	「評註春秋左氏傳序（版心）」	48 龍頭評註春秋左氏傳校本三十卷
		石川之麩	「縮臨古本論語集解跋」	104 論語（縮臨古本）十卷
石塚尹		跋	23 砭蔡編一卷	
井田經綸		「跋」	85 孝經宗旨一卷・孝經引證一卷	
井田龍		「序」	85 孝經宗旨一卷・孝經引證一卷	
伊東維寧		「廣雅跋（版心）」	123 廣雅十卷	
伊藤長胤		「書東萊先生博議後」	53 呂東萊先生左氏博議十二卷	
伊藤長堅		「弁言」	6 鄭氏周易九卷	
井上揆		「四書訓點序」	113 〔四書訓點〕	
井上通熙		「新刻周易古註序」	7 周易九卷	
		跋	29 詩經二十卷	
う		宇野成之	「凡例」	17 尚書十三卷
			跋	29 詩經二十卷
お		大江資衡	「小爾雅序」	122 小爾雅一卷
		大久保奎	「遂初堂易論跋」	15 遂初堂易論一卷
	大窪曄	跋	144 四字經一卷	
	大藏讓與	「翻刻古本論語序」	101 論語十卷	
	岡元鳳	「跋（版心）」	30 毛詩指說一卷	
	岡田挺之	「鄭註孝經序」	79 孝經鄭註	
	奥田元繼	「左傳評林序（版心）」	54 音註全文春秋括例始末左傳句讀直解七十卷	
		跋	54 音註全文春秋括例始末左傳句讀直解七十卷	
	奥村眷猷	「跋（版心）」	62 春秋左氏捷覽一卷	
		「重較隸辨序」	134 隸辨二卷	
		跋（版心）」	56 左傳附注五卷	

	小田煥章	跋	27	毛詩正文三卷
	小永井嶽	「後藤點五經序」	96	音訓標註五經
	小畑行簡	「說文解字注序」	129	說文解字三十二卷
カ	笠原簡室	「字彙增註補遺序」	137	字彙十二卷
	片山猶	序	26	尚書大傳四卷
	鎌田禎	「考例」	134	隸辨二卷
	龜田長梓	序	15	遂初堂易論一卷
	龜谷行	「四書集益序」	116	論語集益二卷
	狩谷望之	「跋（版心）」	82	孝經一卷
		跋	103	論語十卷
	川田興	「再刻音訓五經引」	91	音訓五經
キ	菊池武愼	「題新定三禮圖後」	45	新定三禮圖二十卷
	岸國華	「縮刻五經揭要跋」	98	五經揭要
	岸田吟香	「書翻刻四書合講後」	119	銅刻四書合講
	北島道龍	「序」（難讀）	48	鼈頭評註春秋左氏傳校本三十卷
	清田絢	「匡謬正俗序」	125	匡謬正俗八卷
	清原宣條	「序（版心）」	77	孝經一卷
	清原則賢	「序（版心）」	77	孝經一卷
ク	窪木俊	「跋尾」	9	蘇氏易解九卷
ケ	倪懋績	「跋（版心）」	125	匡謬正俗八卷
コ	小出立庭	「題周易句解首」	13	直音傍訓周易句解十卷
	河野子龍	「刻儀禮序」	40	儀禮十七卷
	後藤義求	「自序」	94	標註詳解五經
	後藤世鈞	「左傳古字奇字音釋跋」	61	左傳古字奇字音釋一卷
	近藤元粹	「凡例十則」	50	增註春秋左氏傳校本三十卷
		「新刻五經序」	95	新刻改正五經
カ	齋新甫	「跋」	17	尚書十三卷
	酒井忠學	「詩緝跋（版心）」	33	詩緝三十六卷
	札幹暢	「跋（版心）」	143	三字經一卷
	佐藤政敦	「序」	38	周禮正文三卷
	佐藤坦	「再刻五經序」	89	改正音訓五經
		「音訓五經序」	90	校定音訓五經
		「大學古本旁釋序」	99	大學古本一卷
		「刻四書集註跋」	109	四書集註
	佐藤平格	跋	25	洪範一卷
	澤田麟	「重刻隸辨序」	134	隸辨二卷
	三条公美	跋	81	孝經一卷
		又跋	81	孝經一卷

	三條實美	跋	81	孝經一卷	
し	筱崎弼	「翻刻四書翼註序」	115	四書翼註六卷	
		「松陽講義跋（版心）」	118	松陽講義十二卷	
	周哲	「儀禮序」	39	儀禮十七卷	
	如竹	跋	10	周易二十四卷	
	眞祐	跋	24	新鐫書經講義會編十二卷	
す	菅原在家	「儀禮序」	40	儀禮十七卷	
		杉原直養	跋	12	易學啓蒙通釋二卷
		跋	22	書集傳音釋六卷	
	鈴木温	跋	97	五經集註	
せ	井嗣昌	「再鐫廣雅序」	123	廣雅十卷	
		關世美	「毛詩指說序」	30	毛詩指說一卷
	仙石政和	「跋語」	101	論語十卷	
た	高見岱	序	112	正點四書	
		多紀元簡	「毛詩名物圖說序」	34	毛詩名物圖說九卷
		太宰純	「古文孝經序」	71	孝經集覽
	田中章	「跋（版心）」	6	鄭氏周易九卷	
ち	長萬年	跋	16	古文尚書正文二卷	
		つ	土田泰	「五經序」	96
都賀庭鐘	「翻刻康熙字典序」			139	康熙字典十二卷
て	鐵山叟宗純	「玉後序（版心）」	130	大廣益會玉篇三十卷	
		田盛範	「逸雅後序」	124	逸雅八卷
		天徳呉雲法曇	「韻府古篆彙選序」	133	韻府古篆彙選四卷
と	東條喆	「五經句讀序」	92	訂正音訓五經	
		「刻經傳釋詞序」	127	經傳釋詞十卷	
		鳥居忠見	「詩書正文序」	28	毛詩正文三卷
	鳥山宗成	「韓詩外傳序」	35	韓詩外傳十卷	
な	仲子由基	「合刻檀弓孟子序」	44	檀弓一卷	
		永阪潜	「校刻五經序」	93	明治新刻五經
		中沼之舜	跋	21	書經六卷
	中野煥	「大學解敘」	100	大學解一卷	
	中村正直	「訂正康熙字典序」	142	康熙字典十五卷	
	夏川元朴	「跋（版心）」	130	重刊許氏說文解字五音韻譜十二卷	
	那波師曾	「跋（版心）」	47	春秋左傳三十卷	
	南摩綱紀	「增補春秋左氏傳校本序」	52	春秋左氏傳校本三十卷	
ぬ	貫名包	「翻刻左繡敘」	64	左繡三十卷	
		「例言」	64	左繡三十卷	
		「引書目」	64	左繡三十卷	

の	野中行	「訂正康熙字典序」	142	康熙字典十五卷
	野村煥	「跋」	55	音點春秋左傳詳節句解校本三十五卷
は	服部元喬	「皇侃論語義疏新刻序」	107	論語集解義疏十卷
	林遼	「影鈔宋槧尚書正義序」	18	尚書正義二十卷
	林就	「刻詩緝序」	33	詩緝三十六卷
	林衡	「題古文孝經孔傳後」	76	古文孝經一卷
	林恕	「新刊周易本義序」	11	周易十卷
		「新刊公穀白文序」	68	新刊公穀白文
		公羊跋	68	新刊公穀白文
		穀梁跋	68	新刊公穀白文
	林信敬	「後藤點五經序」	89	改正音訓五經
	林信言	「刻春秋左傳屬事序」	58	春秋左傳屬事二十卷
	林信勝	跋	14	周會魁校正易經大全二十四卷
		「周禮跋（版心）」	37	周禮六卷
		「儀禮跋（版心）」	39	儀禮十七卷
		跋	43	禮記集說大全三十卷
		跋	55	春秋集傳大全三十七卷
		跋	88	五經白文
ひ	廣瀨範治	「左傳經世鈔正文序」	63	左傳經世鈔正文三卷
ふ	不秀軒	跋	97	音註釋義五經白文
	藤澤恒	「刻蘇批孟子序」	108	增補蘇批孟子二卷
	藤原實美	跋	81	孝經一卷
	藤原直憲	「四書解義序」	117	日講四書解義二十六卷
	古賀樸	「序」	118	松陽講義十二卷
	古屋高	「定正洪範序」	25	洪範一卷
ほ	細合離	「跋（版心）」	26	尚書大傳四卷
	細川利和	「例言」	18	尚書正義二十卷
	堀正意	「左氏春秋跋」	46	春秋經傳集解三十卷
ま	松崎明復	「跋（版心）」	120	爾雅三卷
		識	120	爾雅三卷
		跋	131	縮刻唐開成石經付五經文字九經字樣
		「縮刻唐石經例言」	131	縮刻唐開成石經付五經文字九經字樣
	松永昌易	跋	10	周易二十四卷
		跋	22	書經六卷
		跋	32	詩經八卷
		跋	43	禮記三十卷
		跋	70	春秋四傳三十八卷
み	三雲義正	「題新刻四書正解後」	114	四書大全說約合參正解三十卷

	水野元朗	「跋（版心）」	144	發音錄一卷
	水原芝	跋	126	連文釋義一卷
	三谷圃	「刻音訓五經序」	90	校定音訓五經
		跋	109	四書集註
	皆川愿	「再刻左傳辨誤序」	59	春秋左氏傳註解辯誤二卷
		「刻春秋非左序」	60	春秋非左二卷
	源頼亮	「重刻左氏傳後序」	47	春秋左傳三十卷
	宮城隆哲	「跋（版心）」第二丁表闕	14	易經直解十卷
む	室田義方	跋	12	啓蒙意見五卷
も	森高美	「題隸辨跋」（難讀）	134	隸辨二卷
	森川政名	「跋」	127	經傳釋詞十卷
や	屋代弘賢	跋	80	孝經一卷
		跋	81	孝經一卷
	柳原前光	「序」	48	龍頭評註春秋左氏傳校本三十卷
	山縣孝孺	「書檀弓孟子批點後」	44	檀弓一卷
	山崎苞	「序」	85	孝經宗旨一卷・孝經引證一卷
	山田文靜	「翻刻古本序」	75	古文孝經一卷
	山長宣光	「增訂隸辨敘」	136	隸辨四卷
	山本信有	「春秋左氏傳附註序」	56	左傳附注五卷
		「孝經集覽序」	71	孝經集覽
ゆ	湯淺元禎	「書疑序」	24	書疑九卷
よ	横尾謙七	「四書重校序」	110	重校四書
	横山卷	「敘」	143	三字經一卷
	吉野永親	「周易正文序」	5	周易正文二卷
※	（無名氏）	緒言	94	標註詳解五經

編 集 者

高山 節也

二松學舎大學 文學部 教授

日本漢文教育研究プログラム 事業推進担当者

小野澤 路子

二松學舎大學大學院 文學研究科 博士後期課程

ISBN 4-903353-30-3

二松學舎大學日本漢文教育研究プログラム
「日本漢文資料による日本像構築の國際的研究」

和刻本邦人序跋集成 經部

2011年3月（非賣品）

〒102-8336 東京都千代田區三番町 6-16
二松學舎大學 日本漢文教育研究プログラム 事務室

電話 03-3261-3535

Fax 03-3261-3536

kanbun-1@nishogakusha-u.ac.jp

<http://www.nishogakusha-kanbun.net/>